

悠遊

第二十二号



企業OBペンクラブ

ペン・フォト句 (前編)



下駄の音 蹴だしの風や 祭の夜

大越 浩平



華やぎも ひと雨降れば ぬれ落ち葉

中村 晃也



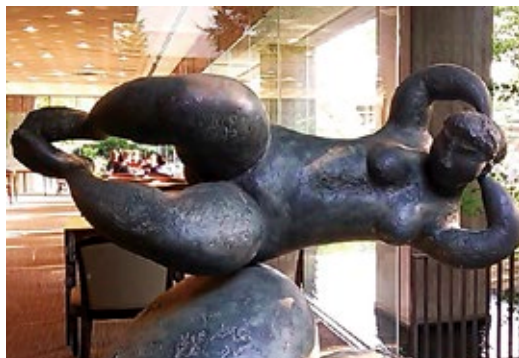
山ガール 威風堂々 尾瀬沈む

大月 和彦



戦後史を おまけで辿る 大人たち

三 春



重心に 逆らう姿勢 政治的？

平尾 富男

悠遊

第二十二号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「白砂壇 - 法然院」

松浦 武弘

昨今、日本人も海外からの人たちも、観光客が最も多く訪れるのが京都である。私の学生時代は神社仏閣を訪れる観光客はすくなく、彫刻国宝第一号の広隆寺弥勒菩薩が通路の脇に無造作に安置されていた。銀閣寺から南禅寺に至る「哲学の径」など人もまばらで、法然院などは訪れる人もない寺であった。学生時代、晩秋の吉田山を下り哲学の径に出て、無人の法然院で紅葉の中の砂壇の白さにハッとした記憶がある。定年退職後、一之宮巡りで京都を訪れた5月には若葉に萌える法然院を訪れ、昨年11月には紅葉に映える白砂壇を見た。

目次

▽巻頭言……………	西川 武彦 4
-----------	---------

Ⅱ特集Ⅱ 日本語の魅力

▽色は匂へど 散りぬるを……………	斉藤 征雄 6
▽百年の計……………	市川 忠夫 8
▽日本語の特質……………	森田 晃司 10
▽サウンド・オブ・サイレンス……………	細谷 博 12
▽『米歐回覧実記』の日本語……………	鵜飼 直哉 14

Ⅱ特集Ⅱ 心に残る一冊・一句

▽小夜の中山……………	大野ただし 18
▽絵心を誘う詩文……………	山縣 正靖 20
▽『西行花伝』 辻邦生 著……………	新田由紀子 22
▽花や今宵のゝ滅びの美学……………	首藤 静夫 24
▽『心に残る一冊・一句』のテーマをいただいて……………	上田 信隆 26
▽モーツァルト全集……………	川口ひろ子 28
▽血と砂の歴史に想う、そして『サダト自伝』……………	安藤 晃二 30
▽千万人と雖も吾往かん……………	岩崎洋一郎 32
▽心に残る言葉……………	野上 浩三 34
▽ゴッゴリの『外套』……………	都甲 昌利 36
▽キミなら『文明の衝突』にどう反論する？……………	高橋 孝蔵 38
▽ラ・ノストラ・ベラ・トリエステ……………	阿部 典文 40
▽『ホッセイニ』そして山々はこたました』を読んで……………	大泉 潤 42

▽思い出の一節……………	猪股 重子 44
▽望郷のバラード……………	大平 忠 46
▽私の『吾輩は猫である』……………	志村 良知 48
▽痛快！ この一冊……………	稲宮 健一 50

Ⅱ自由テーマⅡ

▽孤帆遠影……………	原田 信 54
▽日本一周鉄道の旅……………	富田 佳瑞 56
▽最後の同級会……………	田原 敬 58
▽日本人の特性……………	野瀬 隆平 60
▽想定外の後遺症……………	新井 良侑 62
▽寮歌を愛して半世紀……………	松浦 武弘 64
▽日本の南氷洋調査捕鯨について……………	新山章一郎 66
▽横浜下町探訪……………	松谷 隆 68
▽志たかく 老婆心も忘れずに……………	橋本 政彦 70
▽『後期高齢者』への仲間入りにあたって……………	羽田 壽夫 72
▽七十歳代をどのように生きたか……………	上原 利夫 74
▽文章創りMY WAY……………	西川 武彦 76
▽老人ホームで思うこと……………	吉寄 清己 78
▽七十年 日本の平和……………	大越 浩平 80
▽ふれあった異国の人達……………	木村 敏美 82
▽之を楽しむ者に如かず……………	藤原 道夫 84
▽我が心のキリスト教……………	平尾 富男 86
▽格安の風景……………	三 春 88
▽パソコンに振り回される……………	下山 健夫 90

▽老人のつぶやき……………	玉山	和夫	92
▽さくら咲く室生寺へ……………	保坂	令華	94
▽グランド・オペラ……………	金京	法一	96
▽土佐の「いっそそう」……………	矢澤	正二	98
▽教育はあるが知性が……………	中村	晃也	100
▽遊楽夢笑 すべからく美しい……………	浜口須美子		102
▽「ニーベルングの指環」雑感……………	横内	則之	104
▽神さま談義……………	池田	隆	106
▽世の中便利すぎるのでは……………	川村	邦生	108
▽今年は節目の多い年……………	杉浦	右蔵	110
▽ヌットさんが戻ってきた……………	浜田	道雄	112
▽リソルジメント(イタリアの統一)……………	松浦	俊博	114
▽学生服……………	濱田	優	116
▽東京駅散策……………	廣澤	重穂	118
▽私と読書とペンクラブ……………	富岡喜久雄		120
▽聖獣白澤(はくたく)を追って……………	大月	和彦	122
▽被災地見舞い……………	清水	勝	124
▽デジカメ登場で消えたもの……………	福本多佳子		126
▽第二の地動説……………	鳥海	博	128

Ⅱ 創作短編Ⅱ

▽かんたん夢……………	内藤真理子	132
▽左遷と復讐……………	大西 宏	135
▽星の瞳……………	馬場真寿美	138

Ⅱ 悠遊の記Ⅱ

▽入会に当たって……………	松田	昌康	141
▽近況報告……………	中村	爽	142
▽美術もペンも……………	塚田	實	143

Ⅱ 分科会報告Ⅱ

▽何でも書こう会……………		16
▽サロン21……………		52
▽掌編小説勉強会……………		130
▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………		144
▽二〇一四年「ペン川柳」勉強会の成果……………		148
▽「800字文学館賞」……………		150
▽ペン・フォト句会……………		152
▽ホームページ関連……………		153
▽企業OBペンクラブ本年の歩み……………		154
▽企業OBペンクラブとは……………		159
▽会員名簿……………		160
▽編集後記……………		162

表紙制作
表紙の絵
カット

福本多佳子	
松浦 武弘	
安藤 晃二	首藤 静夫
富田 佳瑞	野瀬 隆平
山縣 正靖	福本多佳子
松浦 武弘	敬
(五十音順)	

会長 西川 武彦

クラブが誕生したのは一九八九年十一月で、同じ月の初めにベルリンの壁が崩壊しました。

それからの四半世紀に、二極から多極に移った感がありますが、BRICSなどに加えて、イスラム諸国の台頭などで、世界は怪しく揺れ動いて先が読めません。

お膝元では、少子高齢化とそれに伴う人口減が不可避な時代に入ったにもかかわらず、「日本株式会社」によるバブルの夢今一度で、経済成長という幻想を追いかけている節がないではありません。

思春期の子供の急成長が人生で二度とないように、資本主義経済では、「鉄が鉄を生む」高度経済成長は、同じ国では二度と巡ってこないというのが定説といわれています。

今世紀に入ってから東南アジア、中国などにおける高度な経済成長も、近未来的には夫々の形で頭打ちになるの

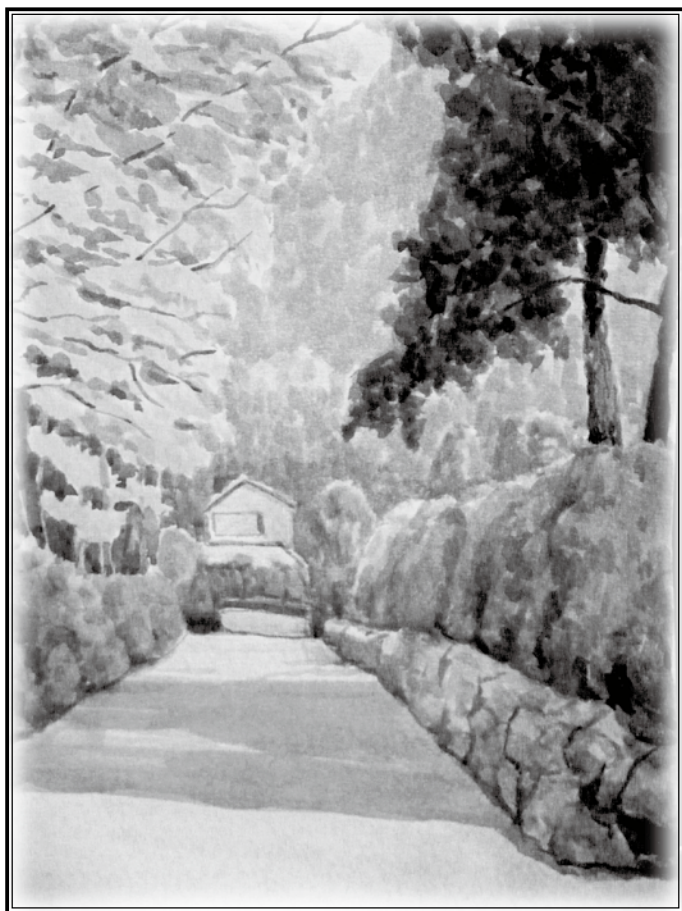
ではないでしょうか。

お隣の韓国を含め、高度成長とともに、先進国の仲間入りしてきつつあるアジアの諸国とは、経済面では実質的・現実的な互助互恵を指向しつつ、政治外交的には、戦争の歴史を背に負いながら、「同床異夢」で対話を続け、IT時代に相応しい緊急時のホットラインを常時確保しておくことが肝要でしょう。

それを大前提として、四季温暖で自然に恵まれた成熟社会であるわが国では、経済成長に替わり、個人として、国としていかなる姿を求めるべきか……。これを軸とした議論が、国政レベルで未だ煮詰まっていないようです。

「足るを知る」が正解かもしれませんが、それが各層・各面で具体的にはどういうことなのかを、当クラブでも追求して発信したいものです。二十五周年の区切りを越え、緩やかに代替わりしつつある当クラブで、それがこれからの大事な使命かもしれません。勿論、PEN活動を通して、遊び心を大切に、いろいろ楽しむことが大前提なのはいまでもありませんが……。

特集 日本語の魅力



「色は匂へど 散りぬるを」

齊藤 征雄

書き言葉としての日本語は、漢字、平仮名、片仮名から成っている。なかでも平仮名の存在が日本語を日本語たらしめているといってもよいと思う。

平仮名は平安時代初期、漢字の草書体をさらに崩して作られた文字であるが、最初は主に女性が用いたので女手と呼ばれた。その女手が漢字文と融合し、日本語独特の繊細な表現を可能にする文体手法に磨きあげられて、今日の日本語が出来上がったのである。

日本人にとって文字を習う第一歩は平仮名である。その手本には伝統的に「いろはうた」が使われてきた。だから基本を知らないことを、「物事のいろは」も知らないというのである。もつとも現代では、いろはにほへとを完全に言えない人がかなりいるらしいので、「物事のいろは」が揺らいでいるのかも知れない。

作られたのは十世紀後半といわれる。空海の作と長く

信じられてきたがそれは誤りのようである。真言宗の学僧が関係しているという推定もあるが定かではない。

「いろはうた」が、幼い子らの平仮名を習う手習い歌として使われてきたことに疑いの余地はないが、制作の目的は別のところにあつたかもわからない。古今和歌集に「同じ文字なき歌」というのがあつて、三十一文字が一字たりとも重複しないように作られた歌があるらしい。「いろはうた」はそれを超える四十七文字が重複しないように作られているし、また七五調の調べは当時流行の今様の形式でもある。そうしたことから「いろはうた」も知的な遊びとして作られ、それが手習いの実用に使われたという解釈も成り立つのである。

「いろはうた」の意味内容は、涅槃経というお経の中の偈^げを和訳したものだといわれている。

《涅槃経の偈》

諸行無常

いろはにほへと 色は匂へど
ちりぬるを 散りぬるを
(諸行は無常なり)

わかよたれそ 我が世誰ぞ
是生滅法

つねならむ 常ならむ (是れ生滅は法なり)

うゐのおくやま 有為の奥山 生滅滅已

けふこえて 今日越えて (生滅滅し已りて^{おわ})

あさきゆめみし 浅き夢見じ 寂滅為樂

ゑひもせず 酔ひもせず (寂滅を樂となす)

以下、私なりに現代語に訳してみた。

美しく花が咲いても 万物は流転し

いつかは散ってしまふ すべては無常なのだ

この世では誰も 生じた物が滅するのは

死をまぬがれることはない これ真理である

深山の如き現世の迷いから 生滅が存する世界から

今はそれを超克したので 離脱してしまえば

もうはかない夢をみたり 寂滅涅槃の世界に入り

心をうばわれたりはすまい 真の樂が得られる

極めて格調が高い内容である。そしてそれは仏教の真

髓を言いあらわしているといわれる。

有為とは無常な現世を表わす言葉であり、欲望に執着する苦の世界をいう。万物が流転し無常である有為の世界を超えることによって、欲望への執着が消滅する。そ

れが静かで安らかな涅槃の境地と仏教は説くのである。

「いろはうた」はたったの四十七文字でしかも一字の重複もなくこの仏教のエッセンスを見事に表現している。

意味内容でもう一つ注目すべきことがある。「いろはうた」を七字区切りにして各行の末尾の文字を並べると「とかなくてしす」となる。これは「咎なくて死す」と読めるのである。この意味深長な言葉が作者の意図したものか偶然かはわからない。ただ、この解釈は昔からあったもので、江戸時代に作られた歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」は、咎なくて死んだ四十七士を四十七文字の「いろはうた」に懸けたのがその題名の由来といわれる。

文字の手習い歌は、学習のツールである。本来無味乾燥であってもよいものの中にこれ程の高度の内容を織り込んである。それを遊びというならば、これ以上贅沢な遊びは無いといえるだろう。そのことは日本語文化の最も豊かな一面を示しているともいえる。

参考文献 小松英雄「いろはうた―日本語史へのいざない」講談社

「百年の計」

市川 忠夫

二一世紀に入って早くも一五年が過ぎた。「二〇世紀は文明・物質の時代、二一世紀は文化・情報の時代」を実感できるようになって来た。地球資源の有限性から物質に対してはブレーキを踏み、人間頭脳の無限性から情報に対してはアクセルを踏んでいる。文化や情報を構成する要因はいろいろあるが、中でも言葉が特に重要だ。

生れてこのかた七〇余年、日本語一筋で生きてきたが、この間、意識して日本語を学んだり使ったりすることはほとんどなかった。ところが、企業OBペンクラブに入ってから、日本語に対する関心が非常に高くなってきた。そして今、「日本語はユニーク」と強く感じる。

日本語を云々するには、外国語の知識が必要だ。中学で英語、高校でドイツ語、大学でロシア語を学び、先生から単位だけは頂いた。しかし、留学も海外勤務も経験していないので、それらの活用機会は少なかった。英語

は若干仕事に使ったが、ドイツ語、ロシア語は全く使うことはなかった。ドイツやロシアの聞きなれた歌の詞を覚えるのに、わずかに役立ったただけだ。こんな乏しい外国語経験にもかかわらず、「日本語はユニーク」と確信するのは、なぜだろうか。

まず感じるのは、表意文字が表音文字と連携して躍如していることである。例えば「山」、険しい感じがよく出ている。例えば「笑う」、顔つきが伝わって来る。これが「mountain」や「smile」ではピンと来ない。これは、古代に隣国から漢字を導入した結果だが、千年以上経た今、アイコン、絵文字、スタンプなどの表意文字的表現が国境を越えて広まりつつある。興味深い事実だ。

二つ目は、擬音語・擬態語の豊富さ・作り易さである。「ざあざあ」「しとしと」「ぴちゃぴちゃ」など音をまねた言葉、「にこにこ」「にやにや」「にたにた」など表情を表した言葉がたくさんある。音を聞かせることもなく、絵を見せることもなく、心の中に情景を再現できる日本語は何とすばらしいことか。

三つ目は、一人称二人称表現の多様さである。一人称だけでも、「私」「僕」「俺」等々たくさんあり、様々な場面で使い分けができる。公的な会合への出席と友達とのハイキングでは、気分も服装も全く異なるのが普通だ。一人称も状況に合わせて変えたい。にもかかわらず、欧米のように一人称が一つとは、何とも窮屈なことだ。

その他にも、敬語表現のきめ細かさ、短い詩歌（俳句、川柳、短歌など）の作り易さ、文字自体の芸術への昇華（書道）など、いろいろある。

「日本語はユニーク」と感じる点を挙げて行くと、どれも心に訴える機能ばかりだ。いわば「情理語」の機能だ。しかし、科学や工学、法律や経済などの分野では、頭に訴える機能が必要だ。こちらは、いわば「論理語」の機能だ。これまでは、「標準語と方言」「母国語と外国語」の捉え方で、言葉を使ってきた。これからは「論理語と情理語」の捉え方で、両方を使いこなす必要があろう。情報化・グローバル化時代の言葉には、二つの大事な条件がある。一つは、世界の人々が共通に使えること、も

う一つは、世界の人々が心も頭も広く表現できることだ。

これまでも、ラテン語、エスペラント語など、世界共通語を意識した言葉が提案されて来たが、どういう訳か、うまく行っていないようだ。事実上、英語が最も世界共通語に近い位置にある。特定の国の言葉を世界共通語にすることはあまり気持ちよくないが、共通化の必要性は多くが認めるだろう。しかし、英語は、日本語に比べて、細やかに心に訴える力は弱いように感じる。

名案がある。情報化・グローバル化時代の世界共通語を「英語＋日本語」とするのだ。英語には論理性（頭）を期待し、日本語には情理性（心）を求めているだろうか。日本語はかなり英語を取り込んでいるが、英語はあまり日本語を取り込んでいない。日本人全員が「英語への日本語注入」に取り組めば、世界の文化に大きく貢献し、また日本人の英語力アップにも繋がる。

言葉の変革は、東京オリンピック開催や和食文化普及のような短期に実現できる課題ではない。二二世紀を目指し、「百年の計」として取り組んではどうだろうか。

一 日本語の特質

森田 晃司

日本語はさまざまな特質をもっています。例えば、自然に関する語彙が豊富で、逆に体の組織に関する言葉は少ない。これは自然と共生し、食用としての家畜を持たなかった文化を映しています。

世界に類語が見つからない古い言語であり、また表音文字（かな）と表意文字（漢字）を巧みに併用している言語でもあります。オノマトペ（擬声語）の多い言語でありながら、半面音節（音の塊）の数が極端に少ない言語でもあるなど、幾つもの特質が思い浮かびます。しかし、何といても最大の特質は日本列島においてのみ使用される言語であり、逆に日本列島内では日本語以外の言語は使われないことにあります。いわば、一国一言語とでも言える特色を持っています。

ユーラシア大陸を始めとする世界の各地では、古来多くの民族が入り乱れて抗争してきました。その結果、一

つの国で複数の言語が使用されたり、逆に一つの言語が複数の国で使用されたりしています。自然の領域が国家の領域となっている日本列島では、唯一使われている言葉が日本語なので、実にすっきりしています。

この列島にいつ頃から、またどこから人が来て住みついたのか、はつきりしていません。しかし、遅くとも数万年前には、北方や南方から複数の民族がやってきたと考えられています。二、三千万年前に現れたと推定されている日本海が次第に大きくなり、完全に大陸から隔離された後も、氷河期には陸橋ができ、動物の往来があったと推定されています。ところが、一万二千年ほど前の最後の氷河期の後は、大陸との往来は途絶えました。

大陸から隔たった自然の領域の中で民族が融和し、縄文文化が生まれて列島の各地にあまねく普及し、複数の言語もまたこの列島の中で融合し、日本語の祖先の縄文語としてまとまって行つたのではないかと考えられます。

この極めてあり難く、また贅沢でもある一国一言語にも存亡の危機がありました。文字を持たなかった支那の周辺各国では漢字をそのまま受け入れて、漢語を多用す

るうちに、本来の自国の言語や文化を損ねてしまいました。同じく文字を持たない縄文語でしたが、日本の先人は踏ん張りました。紀元前後の漢字の到来から五百年をかけて、「かな」という表音文字を作り出し、日本語の音を守りながら、漢字を日本語を書き記すための文字として活用する方法を編み出しました。我が先人の英知と海によって隔てられた自然の領域が、日本独特の文化や言語の維持に大きく貢献したと言えます。

日本には、縄文時代にその起源がさかのぼるとも言われている言霊信仰があり、言葉に霊的な力が宿ると考えられてきました。当然その発音も極めて重要なものと考えられていました。

現代人の私たちは、祝詞などというと、わけのわからない古臭いものとして軽視しがちです。ところが、尼崎市にある水堂須佐男神社の上林武男宮司は、毎日、祝詞用の発声訓練を欠かさないそうです。祝詞は言うまでもなく神と人とを結ぶものです。神々の名を呼び、神に願ったり、祝ったり、感謝したりします。間違いのない、滑らかな交信には、間違いのない滑らかな発声が必要な

のです。発声に対するこんな真摯な思いが、「かな」が発明されるまで漢字の普及を思いとどまらせる力になったのでしょうか。「かな」により日本語の音が守られたことで、祝詞が守られ、神に謝する田楽ができ、猿楽ができ、能、浄瑠璃、歌舞伎、和歌、俳句などの独特の文化が生まれました。山川草木悉皆成仏という、万物に霊が宿るとされる日本独特の思想も、日本語なくしては生まれて来なかったのではないのでしょうか。

日本人は日本列島という自然の領域の中で、かけがえない文化を育んできましたが、その文化を支えてきたのは、言うまでもなく一国一言語の日本語でした。これからもかけがえない日本語を、誇りを持って守り育てて行くことが、私たち日本人に課せられた大切な役割であり、また、世界の言語の多様性を維持して行くことこそが、国際貢献にもつながると言えます。



「サウンド・オブ・サイレンス」

細谷 博

「どうですか痛みは？ シクシクですか？ グリグリ

ですか？」とドクターが、患者としてソファベッド上で呻吟する私の当時の部長に、心配そうにのぞき込んで訊く。「ノーッ！ ギュウッ」と差し込むような。先生、

何とかして下さい。ヘルプミー！」暫く聴診と触診を繰り返していたドクターは、薄くなった金髪を掻き揚げて「はーん。これはゴールストーン、つまり胆石ですよ」

三十年ちよっと前にシカゴの中心街で開業していた、日本語のわかる貴重な医師のオフィスでの光景です。

「日本語って便利ですね。症状を表すのにピッタリの音を使うなんて、日本人は全く言葉の天才ですな」

聞けば、先生は日本の医療システムの実態研究のため日本に派遣されたが、日本の文化に魅せられて任期を過ぎてからも日本に留まり、三重県にある住友系病院に七年も勤務していたことがあるとのこと。

「症状を表すだけでもズキンズキンとか、グルグルとか、ドキドキとか、チクチクとか。こちらの診立てが悪いとカーッとする患者さんもあるし、喉が乾けばカラカラになり、おなが空けばグーッと鳴ります」などとまるで落語家みたいなことを仰る。

オノマトペという言葉学用語があります。擬音語のことで、擬態語も含みます。確かに、英語を習いたての頃にも動物の鳴き声を表すのにワンワンとかニャーオとかメーとかモーとかあつて、それに対応する英語がバウウとかミューとか、音の類似性が低く概念的で、この点では日本語の方が数等優れていると言わざるを得ません。後年、フランス語やドイツ語も勉強しましたが、印象に残っていません。

中学生の時の社会科で世界中の国名や地名をカタカナで表現できているのを知って、その便利さに驚いたことがあります。後年に知ったのですが、英語やフランス語や中国語など諸外国語では、よその国名、地名を表すのに苦心惨憺して、なおかつ成功していません。枚挙に暇ないのでここでは割愛しますが、ほんの一例を挙げれ

ば、北京の発音を中国政府がいきなり変えても、我が国では「ペキン」を「ベイジン」とするだけです。他の国ではこういう芸当はできません。ロシアの首都も英語のMoscowよりは「モスクワ」の方が実際の発音にぐっと近いのです。また、イタリアとアルプスで隔てられた欧州の国々は憧れのイタリアの地名を表現するのに苦心しています。たとえば英語ではフィレンツエがフローレンス、ヴェネツィアがヴェニス、ローマは歴史に残る名画「ローマの休日」の最後の場面、正に輝かんばかりのオードリー・ヘップバーンに「ローム」と言わせてローマの人たちを失望させました。

我々が世界に誇る片仮名や平仮名に加え、あの偉大なるヘボンさんがローマ字に変換する術を発明してくれたお陰で、長年の鎖国後に幕末から維新にかけて多くの異人国に接しても慌てることなく、片仮名からローマ字表記で、或いはアルファベットからローマ字変換で一件落着です。しかも、そのローマ字を足がかりに大部分の西欧語に接近することが可能になり、維新後僅か四、五十年で脱亜入欧を実現し、世界の一流国の仲間入りを果た

しました。

が、その一方で失ったものも有ります。和漢特に漢籍の素養でしょう。夏目漱石や森鴎外などは英語、ドイツ語に通じていたとはいえ、彼らが文豪と言われるほどの書き手で有り得たのは、実は漢籍の知識であり、それを通じて幼少の時から身につけてきた文の作法があったからでしょう。さらに言えば、この数万年、大陸と孤絶して民族的には交流支配が細くなつて以来、この島国で独特の発達を見た「間」という音楽的特性にも、明治維新と第二次大戦敗戦後と二度にわたり大きな変化を受けました。

それにしても、先程のシカゴの先生に続く日本語の愛好者が、日本文学者以外にもアメリカには沢山います。静寂を表すのに「シーン」という音を使うなんて日本語の繊細さの極致ですが、何とアメリカにも同じ感覚の人たちがおりました。「サウンド・オブ・サイレンス」と言う名曲を歌っているサイモンとガーファンクルです。心静かに「シーン」と聴きましょう。

『米歐回覽実記』の日本語

鵜飼 直哉

『米歐回覽実記』との出会い

私が久米邦武著『米歐回覽実記』（以下「実記」）に興味を持ったきっかけは七年前、泉三郎氏の『岩倉使節団という冒険』を読んでいたとき、次の文章に出会ったところにある。

「西洋ノ民ハ之ニ反シ、營生ノ百事、皆屹屹トシテ刻苦シタル餘リニ、理、化、重ノ三學ヲ開キ此學術ニモトツキ、助力器械ヲ工夫シ、力ヲ省キ、力ヲ集メ、力ヲ分チ、力ヲ均クスルノ術ヲ用ヒ、其拙劣不敏ノ才智ヲ媒助シ、其利用ノ功ヲ積テ、今日ノ富強ヲ致セリ、」これは1872年9月19日、全盛期のイギリスでニューカッスルの紡績工場を見た記録のあと、二文字下げ注記の中の記述である。○印の部分が特に印象的であった。産業革命の原動力であるメカの本質を見抜いた上に見事なレトリックのある文章表現だ。三十三歳の漢学者が、

一体どうして理工学分野に至るまで、このような洞察力を持ったのだろう。久米邦武とはどんな人物なのか、知りたくなった。

とは言っても歴史に疎いことは人後に落ちない私だから、「実記」をすべての出発点として、文字面を追うことになる。それでも辛抱強く読んでいるうちに、漢文訓読調の表現や久米の書き癖なども少しずつ分かってきた。

ベニス（ベネチア）の巻

数年前、「実記」をガイドブックに、ベニスに行った。使節団一行がゴンドラに乗った印象は、久米流では以下のようになる。

「此日ハ驛舎ヨリ直ニ艇ニ上ル、艇ノ製作奇異ナリ、舳首蹺起シ、艇底圓轉トシテ、舳ニ屋根アリ、中ニ茵席ヲ安シス、棹ヲ打テ泛泛トシテ往返ス、身ヲ清明上河ノ圖中ニオクカ如シ、市塵鱗鱗トシテ水ニ鑑ミ、空氣清ク、日光爽カニ、嵐翠水ヲ籠メテ、晴波淪紋ヲ皺ム、艇ハ雲靄杳渺ノ中ヲユク、飄飄乎トシテ登仙スルカ如シ、」

わずかに147文字の文章に、ベニスに着いた直後の一行の感激と驚きとが手にとるように分かる。高揚感と恍惚感がリズムよく脳細胞を刺激する。

詳しく見てみると、「泛泛」「飄飄」のように同じ文字の繰り返し型と「○○○○トシテ」が多用されていることが明らかだ。久米が恍惚感一杯になった時に頻繁に現れる。また「艣首騫起」「雲霧杳緲」など漢字四文字の言葉が独特のアクセントになっているだけではなく、漢詩を直接引用した部分もある。たとえば「清明上河ノ圖」をグーグル検索してみると「北宋の宮廷画家張擇端が描いた中国美術史上屈指の名画」とある。漢学者ならではの手法であろう。

漢文訓読調文の魅力

漢文訓読調文の魅力は、これを現代語文と比べてみると明らかである。水沢周氏の労作『現代語訳・特命全權大使米欧回覧実記』は、同じ部分をこう書いている。

「この日は、鉄道の駅からすぐに小舟に乗ったが、その舟の形が変わっていた。艣も舳も反り返り、船底は

丸く、舳の近くに屋根があつてその中にクッションを備えた安楽な席が設けてある。棹をさしてゆらゆらと進んで行く。まるで川遊びの美しい絵巻の中の人物になつたような気持ちである。鱗のように重なり合つた臺の波が水に映じ、空気は澄んでいて日光は爽やかに、涼風が水面を吹き渡つて、海面にきらきらちりめんのような細かいさざなみを作っている。ゴンドラはふんわりと霞んだような中を進む。飄々と風に舞い、天に登って行くかとも思われる。」

原文の1・7倍、253字を使っているものの、原文の持つ高揚感も恍惚感も出し方がない。

「実記」にはこのような表現が随所に見られる。

言語学の専門家たちが、この漢文訓読調を日本語の体系の中でどのように位置付けているのか、私は全く知らない。しかし、読めば読むほど新発見が現れる「実記」の漢文訓読調の魅力に取りつかれた私である。

何でも書く会 ―テーマ自由で800字―

毎月二回開かれる「何でも書く会」、会員が持ち寄った短文を各人が朗読し、質問、意見、感想などの議論が交わされる。十数人が午後の四時間たっぷり話し合います。議論が尽きなかった分は、五時過ぎから会場を変えた第二部で焼酎やワインを飲みながら続けられます。

企業OBペンクラブは、二十五年前、文章による「国際感覚の啓蒙」を目指して発足し、何点かの本を出版しました。その後、新聞社OBによる文章指導が行われた時期がありました。二十年前から「テーマは自由」と「800字」を特色とする今の形の勉強会となつて続いています。

「テーマは自由」が魅力です。「物書き」をしたいと思いつながら現役時代には出来なかったという人が多い。

多様で豊富な経験を持ち、古今東西万般に明るい卒サラ人の領域は広く、日ごろ思い、溜まっている事が堰を

切ったように綴り出されます。

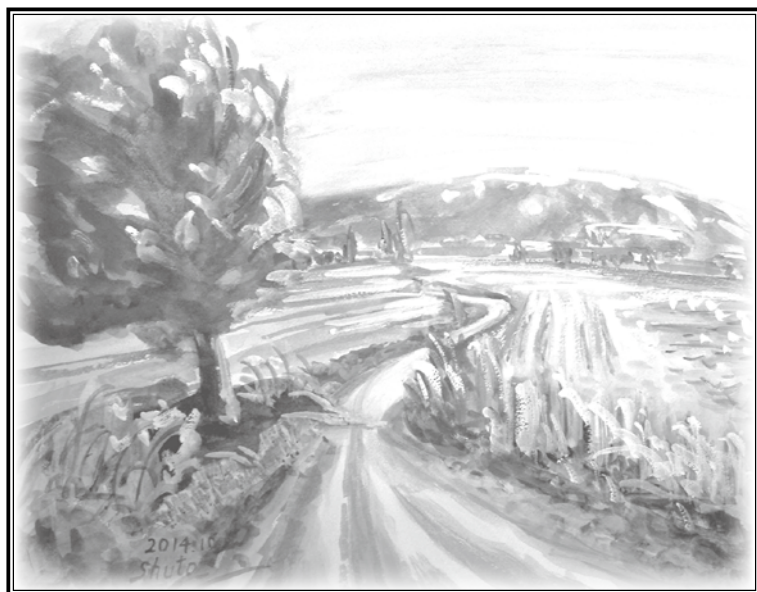
800字の制限も効いています。最初はこの字数に戸惑いますが、短文をきちんと書くことが文章づくりの第一歩といわれます。山ほどある素材からテーマを絞り、起承転結を考え、削りに削って凝縮させます。考えを簡潔に800字にまとめ上げ、抑制の効いた文に仕上げます。

こうして積み重ねられた作品はここ数年間だけで二千篇近くなりました。一部は当クラブのHPに掲載されており、珠玉の文章も多々あります。これを出版し、世に出すことが課題となっています。



(プロマネ 大月、大越、志村)

特集 心に残る一冊・一句



小夜の中山

大野 ただし

年たけて また越ゆべきと 思ひきや 命なりけり
小夜の中山

私の場合、西行のように思いつめた心境ではありませんせん。ヨーロッパへの物見遊山の折に、この一首が思い浮かんだのです。

それはもう十年以上も前に、チロルから南のイタリアへ峠を越えたときでした。もう少し正確にいうと、インスブルックから鉄道で西へ、サン・アントンで有名なアルベルク峠の手前に、ランデックという城下町があります。そこから鉄道を離れ、バスで南下すると、西はスイス、南はイタリアの国境地帯に入ります。三十キロ走るとフンズの町で、ここを過ぎると道は二つに分れます。右に行けばスイスのサン・モリッツで有名なエンガディン地方へ、左に道をとれば二十キロでレッシエン峠に着き、これを越えればイタリアに入ります。

最初にこの道を通ってスイスのエンガディンと呼ばれる地方の中心都市の一つシュルスに入ったのは、一九五九年のクリスマス休暇のことでした。

当時、シュツトガルト工科大学のASTAという福祉厚生関係の窓口団体主催の山小屋でのスキー合宿に参加したとき、バス旅行で通ったものです。スキー場としてはサン・モリッツに比べるとそれほど有名でなく標高も二一三六米と三千米を越えるサン・モリッツ附近のスキー場と比べると見劣りがしました。その為かその冬に二度滑っただけでその後は行っていません。再訪したいのですがユーロが通用しないので二の足を踏んでいます。最近はどうかという、専ら東へ東へと足が向いています。ウィーンが中心になっていますが、このレッシエン・パスから見ると、東は南チロルならメランがあつて、その先はボーツェン、さらにコルティナ・ダンペンツから東チロルのリエッツへ。この先は、オーストリアのケアンテン、シュタイアーマルクの両州があります。その南はもうスロヴェニアとクロアチアです。さらにオーストリアの東にはスロヴァキアとハンガリー。

私の活動範囲は東へと拡大してしまいました。

話をレッセン・パスに戻すと、こんな平凡でつまらない峠は他にありません。

峠といえば日本で思い起こすのは十国峠です。ここは十国を一度に見渡せるほどの絶景です。一方、レッセン峠の方は両側を里山に囲まれ、峠を通る道の前後も少し高くなっていて、その窪みが何と峠と呼ばれているのです。もう一つ、レッセン・シャイデックという呼び名があり、ここが地中海と黒海の分水嶺になっています。では何故この峠にこだわるのか。

今は温暖化というか異常気象と呼ぶべきか、すっかり北欧州の気候が変わってしまいました。六十年代まではドイツの冬の気候は厳しく、一例を挙げると、長い冬の間に太陽の光を見ることはありませんでした。悔しいことに、夜になるとその雲が落ちて寒天に星が冷たく光っていました。

その気候ががらりと変わるのがアルプスの南北を区切るこの峠だったのです。別にこの峠一つに限ったことではなく、アルプスの峠で気候はがらりと変わりました。

定年を迎える頃に、偶々この峠を越えて南チロルに入ったとき、何となく口をついて出たのが、「年たけて…」の歌でした。

私の若い頃には海外に出ることは難しく、航空運賃も高くて、個人旅行など「夢のまた夢」の時代でした。

それが二十世紀も終わりの九十年代に入ると様変わりして、団体切符の安売りが可能となって大衆旅行時代が幕を開けました。長い飛行時間さえ我慢すれば気楽に世界中を飛び廻れる時代になったのです。

私にはジンクスがあつて、海外旅行の前後とか途中に世界的な大事件が起りました。例として、自民党の崩壊、9・11の世界貿易センタービルの崩壊など。

そして今回はバリでの新聞社襲撃事件です。

今回の事件を、単純に「テロは許せない」と言つてよいものか、何十億の人たちの信仰の対象となつていいる預言者を冒瀆してよいものか。これはフランス文化の自惚れの最も悪い形で表わされた現象ではないのか。西行なら何と言うのだろうか。

絵心を誘う詩文

山縣 正靖

今回のお題は「心に残る詩文」である。絵描きもいつの時代にも、旅と良き詩文から美しいモチーフを頂戴してきたわけであるが、小生も絵描きのはしくれ、乏しい読書の中から小生の絵心に残る詩文をご披露申し上げる。

山のあなたの空遠く 幸ひ住むと人のいふ

噫、われひとゝとめゆきて 涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く 幸ひ住むとひとのいふ。

(ブッセ 上田 敏訳 『海潮音』)

弥生ついたち、はつ燕、海の貴方の静けき国の

便りもてきぬ、うれしき文を。

弥生来にけり、如月は風もろともに、けふ去りぬ。

春の川瀬をかちわたり、しなだるゝ枝の森わけて、

舞ひつ、歌ひつ、足速の 恋慕の人ぞむれ遊ぶ。

岡に摘む花、董ぐさ、草は香りぬ、君ゆゑに、
素足の「春」の君ゆゑに。

(ダンヌンチオ 燕の歌 『海潮音』)

これはまだ見ぬ地中海の神話の世界へいざなう象徴詩で、ボッテイチエッリの「春の三美神」を彷彿とさせるではないか。

これに似て、万葉集にはおおらかな絵心をさそう歌が多い。

あかねさす 紫野行き 標野行き

野守は見ずや 君が袖振る (額田王)

立ちて思ひ 居てもぞ思う くれなゐの

赤裳裾ひき 去にし姿を (詠み人知らず)

芭蕉の奥の細道にも、珍しく女人の句がある。

象潟や 雨に西施が ねぶの花 (象潟)

一つ屋に 遊女も寝たり 萩と月 (一振)

両句とも妙なる前文があり、そこで感極まつて一句詠むという形式なのだが、かの悲劇の美女西施は雨に濡れ

たねむの花のような風情だったのか。月と萩だけが飾りの寂しいあばらやに宿した遊女二人は、これからお伊勢参りというが、どのような行末をたどったのだろうか。自分に描けるかなとは思うが、まことに味のある絵題である。

情熱の歌人、与謝野晶子には強い歌がある。

柔肌の 熱き血潮に 触れもみで

さびしからずや 道を説くきみ

これ、実は文明開化で花開いた自由な文学を、「頹廢だ、美しい日本に戻れ」と言って、規制しようとする老人共を痛烈に皮肉った抗議の歌だが、絵描きからすれば、われわれが一生かかっても描き切れない日本の女人の肌の美しさ、初々しさを、文学はかくもやすやすと表現してしまう。参ったなというところなのである。

次に男の文学である。小生は夏になると毎年、『白鯨』

(メルヴィル)という奇妙な海洋小説と、『モンテクリスト伯爵』(大デューマ)を繰り返し読んで来た。

夏休みでも海外旅行などとても行けない時代に、小生は、この小説で世界への想像を膨らませていた感がある。『白鯨』は米国のナンタケットから船出して大西洋、太平洋、日本の沿岸も航海し、最後はるか南海で、巨鯨に体当たりされて沈没してしまうという、壮大な海の叙事詩。もうひとつもマルセーユから船出して、地中海、スペイン、ローマを巡り、最後はバリで宿敵への復讐を果たして、途中で助けたオリエントの美女の故郷に帰っていくという筋書きである。

それにしても何故、何十年も同じ小説を読むのか。プロットが面白いのは当然だが、ここで考えてみると、両方とも小説の一場面ごとに鮮明に映像をよみがえらせてくれる筆力が凄いのである。一場面ごとに絵になる現場を体験できる小説はそう多くはないだろう。

なお、『白鯨』(岩波文庫)には素晴らしい版画の挿絵がついている。

『西行花伝』 辻邦生 著

新田 由紀子

最後の頁を閉じると風がそよぎ、満開の花をひとつはなびらの渦の中に散らした。周囲の現実が形を成すと、この物語が紡ぐ夢のような時間が円を描いて閉じていく。目の奥に物語はなおも花吹雪となって、はるかな時代の息吹と、人々の眩きと思念を花片に載せてふりつもる。

〈春風の 花を散らすと見る夢は さめても胸のさわぐなりけり〉 〈願はくは 花のしたにて春死なん そのきさらぎの望月のころ〉

桜に憑かれたかのような西行の歌は名高い。「春ごとに桜が咲くと思うだけで、胸がうれしさで脹らむ。…桜の花が人々の心を浮き立たせるとき、その歓喜の中に私がある」。物語の中での西行の臨終のことばだ。

平安時代末期の歌人西行法師は桜を好み、願い通りに満開の花咲く日に葛城山中弘川寺で入滅した。そして、『安土往還記』『背教者ユリアヌス』などの歴史小説の作

者辻邦生は、西行の七十三年の生涯を『花伝』と題して中世の情趣香り立つ物語に著す。

物語は西行を師と仰ぐ藤原秋実という官人が綴る。師にゆかりの人々を訪ね、その姿を聞き出していく。西行を語るのは老いた乳母、従兄の霊、年少時の友、宮廷の女房、僧形の朋輩、西行自身、そして秋実の独白。四季折々の情景に源平争乱の史実を織り交ぜて語る二十二の帖は、あたかも絵巻物をひもとくかのようだ。

西行は俗名を佐藤義清と称し、紀ノ川沿いの富裕な領主の武門に生まれた。奥州藤原氏に連なる家系を後ろ盾に、権門主家の引きたてで中央に出仕する。院の北面の武士として鳥羽院の警固を勤めるうち、弓馬や蹴鞠の秀でた武芸を買われて院の寵愛を受ける。宮廷の高官や女房たちとの歌会にも連なり、「雅であること、この世の花を楽しむこと」に感化されたと、義清は語る。

将来を嘱望された若武者が二十三歳で出家遁世する原因は、さまざまだ。激化する流血の領土争い、皇継をめぐる摂関家内の陰謀、朋友の急死、などによる無常感と厭世感もある。しかし、『花伝』と銘うつこの物語の読

みどころは、出家の要因を高貴な女人への禁じられた恋におくくだりにある。

観桜の宴で警固に侍る義清は、鳥羽院の女御待賢門院璋子に召されるまま一夜を契る。母の面影に重なる女院璋子に「女の精」を見て、いちずに心を焦がすが、一度の逢瀬で恋を封印せねばならぬ道理は明らかだ。

〈弓張の 月に外れて見し影の やさしかりしはいつか忘れん〉
〈かかる身に 生したてけんたらちねの親さえつらき恋もするかな〉

この道ならぬ想いも立身出世も、宮廷の黒い渦に取り込まれていく先が見えた。「武力も権能も、この世で一喜一憂する手段にすぎない。浮世の外がこの世の花を樂しむ雅の舞台なのだ」と、この世から身を引き離すように義清は仏門に入る。いまや女院の姿は森羅万象に宿る。その輝きを刻み込もうと、出家西行は歌道に邁進する。

〈雲晴れて 身にうれへなき人の身ぞ さやかに月の
かげは見るべき〉
〈身をわけて 見ぬこずえなく尽くさばや よろづの山の花の盛りを〉

しかし、西行はただの歌僧にとどまらなかった。女院

の皇子崇徳院を陰謀から救おうと、軍師さながら奔走する。動乱の武力を担う平清盛と源為義に合戦の回避を談判する。都を追われた崇徳院を歌で慰める。高野山に籠って大伽藍建立を指揮する。源平の興亡を目のあたりにして歌を詠む。鎌倉の頼朝に請われて都の風雅を語り、奥州藤原秀衡に東大寺再建を勧進する。関白藤原忠通の子慈円に招かれて比叡山に上がる。藤原俊成・定家親子に判詞を託した歌集を伊勢神宮に奉納する。歌枕を求めて東国へ旅し、弘法大師の足跡を訪ねて四国を行脚するかたわらで、一所不住の法身ながらの太行跡だ。

四方の戸が開いて、光の中に莊嚴に浮かび上がる御仏のように、秋実の前に師西行は大きく立ちあがってきた。擾乱の世にあつて、師は物事の源を希求する純一な衝動のままに現実を突き破り、先へ翔けた。その心の中には常に、咲いては散り敷く花を宿していた。「桜の花に陶醉（うかれ）る日、ぜびその花の一枝をわが師西行に獻じてほしい」と、秋実は書いて帖を終える。

〈仏には 桜の花をたてまつれ わが後の世を人どぶらはば〉

花や今宵のゝ滅びの美学ゝ

首藤 静夫

清盛は寂しかっただろう。

後白河院をかつぎ、平家討滅を謀る「鹿ヶ谷の密議」が露見した。清盛が陣頭指揮で対応に当たるなか、頼みと思う嫡子重盛の抵抗にあったのだ。重盛は院の意向を重んじ、いざとなれば父親にも弓を向けるという。

『平家物語』は、清盛を悪人、重盛を善人として描写している。性格も親子で違うようだ。重盛は誠実、慎重でやや神経質な秀才タイプ。武門の出でなければ仏門を志向したであろう。陽性、果断でスケールの大きい清盛は息子に肌合いの違いを感じていたはずだ。それでも期待をかけ内大臣にまでした嫡子だが、四十二才という壮年で病死した。以後清盛の専横が激しくなったと「物語」はいう。

清盛には他にも大勢の子弟や孫がいるが、跡目にふさわしい人物がいな。彼にぶら下がって栄達を望み、詩

歌管弦に励んで宮廷に取り入る者ばかりだ。

次男・宗盛は統率力がなく、男色にふけり、三男・知盛は才幹に富むが健康に難がある。その弟重衡は大仏殿焼討ちの責任者で僧侶たちの目の仇だ。

清盛は見えていられなかっただろう。自分亡きあと一門がどうなるのか——「物語」は語っていない。自分の代で終わるとの予感があったかも知れない。

それでも彼は幸運だった。一門の末路を見届けずに済んだのだ。

一一八三年七月、木曾義仲に追いたてられ、平家一門は都落ちする。清盛病死からわずか二年半だ。

総大将宗盛は、当初「一門結束して都を死守し、最期を遂げよう」と主張した。源氏は頼朝、義仲ほか、まだ分裂状態で、ひとつの勢力では平家が断然有利であったにも拘わらず。結局、西国で態勢を整えてから巻き返す意見に落ち着いたが、心はすでに敗軍の将である。

権力の絶頂からつるべ落としに没落する例は歴史上ままあるが、平家は特にその感が強い。

都落ちの際、薩摩守忠度が藤原俊成に託した百余首の和歌集の逸話が有名だ。

俊成邸の門をたたき、勅撰集編纂の時は自歌を一首でも二首でも採ってもらえたら本望だと頼む。

平家の命運が尽きたと忠度はいいい、俊成も言外に同意する。すでに時代の気分であつたのだろうか。

忠度もそれなりの武人だつたそうだが、敵と本格的に戦う前からこの心境である。

一門はこのあと、落ち着き先を求めて大宰府など北九州一带をさまよう。が、西国でも叛旗がひるがえり、海上に戻され、讃岐の屋島にたどり着く。

平家に逆転のチャンスがあつた。屋島から播磨に押し渡り、神戸（現）から須磨にいたる長大な陣地を構築して源氏の本隊を迎えた時である。形勢は五分五分。一ノ谷に義経さえ現れなかったらどうなっていたか。

結局、当初から諦めムードの平家と戦闘に執着した源氏との差だった。「物語」では、一ノ谷で平家の公達が討たれるさまを詳しく伝えている。戦いを前に公達は薄化粧を施し、お齒黒もしていたとか。忠度は、敵陣に紛

れ込みスキを見て逃げるつもりだったが、お齒黒を見られてあえなく討ちとられたとある。滑稽味さえ感じる。

それでも彼が戦陣で詠んだとされる辞世の一首は心にしみる。

行ゆきくれて木のしたかけを宿とせば

花やこよひのあるじならまし

「行きくれて」は「旅の途中で日が暮れて」という意味であるが、平家がさまよい続けた末にたどり着いた「終焉」をここに感じる。

時あたかも末法の世界である。公達だけでなく生きる望みを失った多くの人々の気持でもあつただろう。

桜の下で休息するのだから、桜花よ、あるじとして私をもてなしてくれないか。しかし、できないよね、私も一門の運命も消えかかっているのだから……。

この一首は清盛に詠んでもらいたかつた。彼こそが時代とともに歩み、苦しみ、時代の幕引きをした人だと思ふからだ。

「心に残る二冊・一句」のテーマをいただいて

上田 信隆

特集テーマの題名に相応しいものをどう書けばよいか、正直しばらく気が重かった。そんな折、暮れの新聞をみてみると、俳句欄に文学の森社から『ゆつくり波郷を読む』という本が紹介されていた。アマゾンではどうも扱ってはいないようだ。たぶん一般の本屋でも置いていないのかもしれないので、版元に連絡をした。新聞の反響のせいか売れ筋のようで、在庫切れとのことだが、たまたま担当者が親切に私の自宅に郵送してくれた。正月明けに本は届いた。『ゆつくりと波郷を読む』は俳句評論のジャンルであるが、読み終えると小説を読んでいるような気がした。

前置きが長くなったが、特集の「心に残る」というフレーズは、『ゆつくり波郷を読む』で私なりに感じたものがあり、一気に書き出すことが出来た。

今までいろいろなジャンルの本を読んできたが、振り

返るとインパクトがあつた本は意外に少なかったようである。「心に残る」というような感慨は若いときに感じやすく、その時代であればある程度の冊数を数えることが出来ると思うが、年を重ねていくうちに感慨も薄れ、記憶の外に移っていくような気がする。本当に心に残すには、その種のジャンルを研究したり、あるいは何度も読み直すようにしなければならないと思う。

石田波郷は、横光利一に通俗小説と純文学とを一つにしたものが今後の小説の在り方ということを教えてもらう。そこで、ドストエフスキの『罪と罰』を読んだ波郷は、偶然ということがこの本では実に多いことを発見する。波郷は俳句の心を詠む写生こそあるべき姿という俳人であるが、偶然にであつた事象を俳句に取り入れる事を試みる。具体的な例題として

あえかなる薔薇撰りをれば春の雷（馬酔木昭和八年）

銀座の千疋屋でバラを買い求めているときに春雷が鳴る。バラと春雷になんの論理的必然はないが、この二つをぶつけ合うことは、俳句においては確かに響きあう心がある。俳句ではこれを、取り合わせとか二物一章とい

うが、私の小学校、中学校で見た俳句もこの形が多い。

菊の香や奈良には古き仏たち 松尾芭蕉

夏草や機関車の車輪来て止まる 山口誓子

俳句に於いては、先人の句を研究したり、鑑賞することが大事だとされている。芭蕉は西行や宗祇の研究に通じていたと言うし、誓子は芭蕉や、蕪村、虚子などに接点があったはずである。古典に学べとはよく言われる話だが、確かに偉大な先人たちの句は、後世の人達にとつてはバイブルになることが多い。波郷はその一つに芭蕉の『猿蓑』をあげている。現在私達はすぐにでも古典を調べられる環境にあるのは大変ありがたい、そのことはインターネットの情報検索によるところが大きい。

今の世にかぎらず「心に残す感慨」とは読後の研鑽、研究にあるのではないかと思う。記憶を定かにするには、繰り返しの読書が必要になるとつくづく思う。同時に反復することは、新しいものの見方や発見が必ず出てきて、さらに私達にその奥の細道に旅立たせてくれるのではないかと思う。インターネット社会は研鑽、研究を飛躍的に効率よくしてくれた。

そこで私は今『罪と罰』を再度読もうと考える。少し気が重いのは、今回この文章を書くときと同じ気持ちであるが、思いついたときに読まなければ二度と読むチャンスがないかもしれない。子供のときのあの充実した読書感が戻るかは定かではないが、なぜあのような感激があったのかを訪ねて見るのも、一理あるような気がする。波郷は『罪と罰』の偶然性に注目した。私の記憶では、ラスコーリニコフは学費滞納で大学を除籍された貧しい学生である。その彼がたまたま行った金貸しの老婆を殺害する。その動機や葛藤の詳細を読み直すことにより、彼の心の動きが鮮明に蘇ることを期待する。今なら時代背景など考える余裕があるが、子供のときにはなかったように思う。しかし子供心の中には、今よりはるかにするどい感受性があったような気がする。色々な自分の比較が見えるのも楽しみの一つかもしれない。俳句にかぎらず、趣味等というものは楽しむことが第一だと思う。これから苦勞しながら読むであろう『罪と罰』が、頁をめくるたびに楽しくなることを大いに期待したい。

モーツァルト全集

川口 ひろ子

十六冊の書籍（小学館）と百九十枚のCD（蘭フィリップス社）がセットになった『モーツァルト全集』。モーツァルト没後二百年を記念して一九九〇年に初巻の交響曲が刊行された。以降、ピアノ曲、宗教曲、弦楽四重奏曲、オペラなどが、二か月おきに配本された。

この本の構成の大きな特徴は、次の二つである。

第一は、モーツァルトの全作品について、その優れた芸術性を論じ、詳しい解説がなされていること。

第二は、彼が生きた十八世紀という時代を、音楽分野だけではなく、あらゆる方面から光を当てて読み解いていること。

執筆者は、音楽学者、研究者、演奏家その他、社会、文学、哲学、美術、建築などのオーソリテイで、国内外の百余人が揃う。

先ず、全巻すべての巻頭には「モーツァルトの芸術」と題して、三十六ページに及ぶ作品論が連載されている。著者は、この全集の総監督でありモーツァルト研究の第一人者である海老沢敏だ。

これが実に充実している。氏のモーツァルトに対する卓越した学識と熱い思いが迸り出て、私たち読者の心を打つ。例えば、第七巻のヴァイオリン・ソナタの作品論では、憂愁の色の濃い「ホ短調ソナタ」の、ヴァイオリンとピアノの二重奏に関して「美しい魂の対話である」と評し、「孤独な魂が一人語る時、もう一つの孤独な魂が語りかける時がある」と語っている。

第十一巻から第十四巻まではオペラだ。全作品の原語の台詞とその日本語訳が掲載されている。私のようなオペラ愛好家にとって大変ありがたい、使い勝手の良い四巻である。

一方、十八世紀論では、作家の荒俣宏の『ファッション・マガジンの生まれた世紀』が興味深い。貴族の子女向けの、ウエストが極端にくびれたロココスタイルに代

わって、この時代にパリの街で流行したのが中産階級の子女用の身体を締め付けないデザインだ。この姿を銅版に彫り、印刷して手彩色したファッション誌が誕生した。これはパリだけではなく、広くヨーロッパ各地に向けて定期的に刊行され、その発展と変遷の様子が、数多くのイラストや写真と共に語られている。

バブルの余韻が残るこの頃、私はアパレル業界の現役で、社員五人の小さな下請け会社を立ち上げたばかりであった。次々と押し寄せる仕事の山。これを捌くことだけに全精力を注ぎ、他の事柄を考える余裕もない毎日を送っていた。そんな中、生来欲張りな私は、他人に振り回されるだけの便利屋暮らしに疑問を持つようになった。といって逃げ出すわけにはいかない。

その時現れたのが、この『モーツァルト全集』だ。体力がなく、お酒に弱い私のストレス解消法は、響きの中に身を横たえ、音楽に身を委ねること。CDがセットになったこの全集は、私の救い主。チャンス到来と飛びついた。

「極東の島国の隠れモーツァルティアン」と自称し、部屋に籠って、少しのCDとFMラジオなどに耳を傾ける私のささやかな音楽ライフは、この時以来激変した。何しろ、モーツァルトの全ての曲を聴くことが出来るのだ。そして十六巻の書籍。はじめは飾るだけで喜んでいたが、徐々に暮らしにゆとりも生まれ、折に触れてページを開き、活用する習慣がついた。

私はこの本に導かれて、音楽について多くを学び、豊穡この上ない十八世紀のヨーロッパ文化の様相を垣間見る喜びを知った。

バブル末期、現役時代の『モーツァルト全集』への思い切った投資は、貴重な配当を運んでくれ、今日の私の豊かな暮らしの糧となっている。



血と砂の歴史に想う、そして『サダト自伝』

安藤 晃二

パリで起きたイスラム過激派によるシャルリ・エブド新聞社銃撃と相次ぐユダヤ系スーパー襲撃事件で、十七名の命が奪われ、フランスでは全土で三百七十万人が参加する反テロ大行進に発展した。メルケル独首相ほか、各国首脳が参加、その意思表示を全世界が見た。モロッコの外相がパリで弔意を表したが、デモへの参加は差し控えた。表現の自由とは言え、ムハンマドを揶揄することにはくみしない、注目すべき事実が報道された。

複雑化した中東情勢の出口は見えない。非人道的な蜜行を繰り返す「イスラム国」の出現は、その軍事力により伝統的な国境線を危うくする。これまで中東全体では一応の秩序は保たれてきたが、いま、米国の在り方を含め、パワーバランスが崩れる可能性が見える。「イスラム国」対応において、俄然その存在感と正当性を増してきたのが、テロ組織と言われたクルド独立党一派。新た

な敵に対し唯一命がけの地上戦能力を備え、西側の盟友として地域安定のくさび的存在となりつつある。NATOメンバーであるトルコにとり、クルドの正当性が領土的要求に繋がれば問題は深刻化する。西側は自らの地上戦を避け、対「イスラム国」勝利の為に、トルコと確執のあるクルド人へ軍事支援をせざるをえないジレンマにある。クルド問題への外交手腕が求められる所以である。今ひとつ、中東地域で重要性を増しているのがシリア派のイランである。イランはシリア、イラクの安定化、パレスチナ問題解決にも重要な役割を果たす筈だ。核開発問題での妥協は難問だが、米国とイランの協力関係なしには、事態は建設的には進まないであろう。しかし、レバノンのヒズボラが、米国の盟友イスラエルと激しく敵対し、ヒズボラに強力な軍事支援をするのがイランである。全で一筋縄では行かない。二十一世紀も、中東は火薬庫であり続けるに違いない。第二次大戦後の七十年間、この地域は激甚な紆余曲折の歴史を歩む。この間、世界が問題解決への光明を見出した出来事があった。あのエジプト大統領、アンワー・アッ・サダトの取った行

動である。

一九七七年十一月の寒い午後、ロンドンの自宅でテレビの特別番組を見ていた。ライブ中継で放映するクネセツト（イスラエル議会）壇上から力強く演説するサダト、その内容と迫力に釘づけになった。とてつもない人格の出現に感動し胸がときめいた。第四次中東戦争を経た状況下で、自らの決断により敢然と敵国の議会に乗り込んだ。戦いの恨みは言うまい、パレスチナの大義と権利は誰も無視できない、何人も他人の犠牲の上に自らの幸福を築くことは出来ない。イスラエルとエジプト間の、またイスラエルと全てのアラブ諸国との和平を、ひいては全世界の平和実現を国際社会に対し誠心誠意、直截に訴えていた。全員総立ちで拍手が鳴りやまない。翌七八年、エジプト・イスラエル間和平合意が成立する。サダト、ベギン両氏はノーベル平和賞を受賞するが、八一年サダトは過激派により暗殺され、その生涯を閉じる。

七八年に英語で執筆されたサダトの自伝 *In Search of Identity* が出版された。一も二もなく購入し、耽読した。

サダトという人格を生んだ土壌を知りたかったのだ。

中流家庭の十三人兄弟という出自である。自由将校団にあつて、政治犯として投獄された縁でナセルと邂逅、共に無血の英国植民地終焉とエジプト王家の追放に貢献する。一途に思索する姿、決して理想主義に流れず、優秀な実務家に育った背景には、彼がその自伝の中で頻繁に言及する英国による基礎教育 G C E（一般教育証書）と英国が創設した陸軍士官学校での教育が垣間見え、明らかにその人格形成を支えている。サダトがガンジーを最高の崇敬者にあげていることと思ひ合わせ、英国という国の皮肉な運命と不思議さも炙り出される。

最近、イスラエルでのサダト演説の全文を読んできた。イスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒が信奉する同一の神は、その創造した崇高なる存在「人間」に愛、誠実、清廉、そして「平和」を教える。サダトは自身の決断について、神への祈りに祈りを重ねた末やって来たと、処々にユダヤ人の琴線に触れるメッセージを伝えている。それは政治家というより、一人の求道者の姿であつた。

千万人と雖も吾往かん

岩崎 洋一郎

この格言を知り、意味が分かったのは、いつだったであろうか。アメリカから九歳で帰国し、まだ日本語に不自由していた頃であったのは間違いない。孟子からということは知らなかったが、心に深く響くものがあった。

アメリカでは個人の個性が尊重され、各人は他人と異なることが当たり前で、髪や目の色は勿論のこと性格や能力もまちまちであることは自然であった。これに反し、母国日本では何もかもが画一的であった。今でこそ個性がもてはやされるようになったが、戦前の昭和では、足並みが揃わないものは異端視されていた。

最初に編入した小学校では、歩き方や仕草・表情が日本的でないということで、陰に陽に好奇の対象にされた（決していいじめではないが珍獣扱い）。さらに驚いたことに、規則づくめであったこと。学校の修身でもこの外的規範が強調されていた。

アメリカでは、もちろん規則は守るべきであるが、最高最終的な規範は個人の良心が優先するとの教えであった（「ご存知と思うが、米国では徴兵制度下でも、信念・宗教上の理由で良心的拒否権が認められる」）。

冒頭の格言に出会った時から、私は一般的な日本人と異なる個性・経歴を持っている宿命であることを自覚して行動する勇気が出るようになった。

その後、自由な空気がみなぎる成蹊学園に転校することとで自分の生き様が決定的になった。学校の勉強もさることながら、自分の特徴を伸ばすように心がけた。戦時中の辛い時期もこの気概のお陰で乗り越えられた。

万国共通の数学など自然科学に心地良さを感じて旧制高校は理科に進学したが、大学受験を控えて改めて今後の人生を考え、人間と向き合う経済学部に進むことにした。理科では、常にトップ・ファイヴに入る成績で、文転を報告したら先生方から「これで東大進学は一人減った」と皮肉られたが、その予想（？）を見事裏切ることにした。

私は、自分の異能である英語力を学生時代に凄まじい

勢いで磨いた。子供の英語から大人のそれに向上させるために、英米文学を古典から現代モノに至るまで読みあさった。また、大人の会話に馴染むために現代劇の脚本を読みあさった。米議会の委員会の議事録にある激しいやりとりも国会図書館で読みまくった。

大学の卒業にあたり父に就職先を相談した。そのアドヴァイスは、あまり大きくなく、成長分野の会社というものであった。それに従って三菱レイヨンにした。卒業の頃、日本では石油化学が発足したばかりで、合成繊維や合成樹脂の将来性がもてはやされていた。営業部門の事務屋として入社した。

当時、あらゆる技術情報は先進国であるアメリカ発の英語の資料であったので、私は水を得た魚のように活発に活動した。例えば、繊維は染めなければ製品にならないが、合繊に合う染料は主としてアメリカの染料会社が開発していた。その代理店から、英語の技術資料を取り寄せて活用するなど、営業マンの埒外の知識を身につけるようにして製品開発に励んだ。

その後、本社の渉外室という英語力を最大限に発揮で

きる部署に移転し、自己のもつ能力を最大限に活用することになった。特許や技術契約の係争などで欧米の巨大企業を相手取り直接交渉で論破して解決するなど成果を上げ、異能を充分認めてもらった。

さらに範囲を広げて、石油化学界の最新情報に、技術情報を含めて誰よりも早く深く接して、経営戦略を立てるように励んだ。このように英語力と技術力という独自の能力を磨くことに励んだ。他人と異なる能力を生かすことに躊躇しなかった。会社では「技術者になった事務屋」という変な見方をされたが怯むことがなかった。

振り返ると、他人とは異なる途を歩む運命であったが、結構楽しいものであった。



心に残る言葉

野上 浩三

喜寿を過ぎて心に残るのは、大学の某教授が社会に出て行く卒業生に向けた次の言葉である。

「生涯迫及する目的を持って。毎日接する生きた資料をもとに、会社の中を徹底的に研究すべきである。一つの会社を追及することによって一つの産業を、一つの産業をマスターすることによって日本の資本主義を研究する方向が、これからの君たちの方法論となる」

何時までも気儘に大学に残っていたかった私は就職活動に出遅れた。故郷でのんびり夏休みを過ごして東京に出て来た時には、就職活動は一巡していた。そんな私を大手の生保会社が拾ってくれた。そこで就いた株式投資の仕事が、私に退職後のライフワークを与えてくれた。

入社当時、わが国は高度成長期への入り口にあり、株式相場は上昇が続いていた。投資先の企業の調査や株式

市場の動向分析などを通して、自然に株式会社の基本や企業の経営実態、経済動向の見方などを学んだ。

会社生活を送る中で、ライフワークのテーマを見つけた。株式の時価発行制度、ブラザ合意、代表取締役社長の制度の問題である。

時価発行制度は一九六八年に導入されたが、必要な法制度は全く整備されなかった。そのために当初から基本逸脱が横行し、一九八六年から九〇年にかけてそれがピークに達し、平成バブルを発生させた。

ブラザ合意は一九八五年に行われたが、対応を誤ったために過度の円高を襲来させ、輸出型企業を壊滅状態にし、わが国を長期の経済的、社会的に悲惨な状態に陥れた。二つとも国策としての対応を誤ったために、豊かな国づくりが可能であつたわが国を、逆に困窮させたのである。

代表取締役社長の制度は非常に矛盾した、わが国だけの制度である。監督者の代表取締役と被監督者の業務執行責任者の社長に同一人物が就くのであるから、企業統治機能が働くはずがない。

二〇〇五年に『日本経済再生の為に 打破すべき三つの壁』と題する本を自費出版した。「然るべき人」の目に留まらず、提案が活かされることなく終わったが、記録集としての価値は残った。

二〇一四年一〇月、国民年金基金の運用が窮地に陥り、GPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）が株式投資を増やすことを決断した。株式は国の宝である。株式投資を増やし、漸次債券の比率を減らしていくのが最善の方策である。GPIFが出した結論は正しい。

現実には、アメリカでは年金基金の六〇％を株式に投資して大成功を収めている。その結果、年金基金が大株主になり、株式会社が生む富が国民に均霑するかたちが生まれ、大衆資本主義が実現している。

しかし、株式投資を増やすことには反対論も根強い。その上、わが国の場合は株式投資を増やす前提として、三つの重大な条件をクリアする必要がある。

時価発行制度の抜本的見直しと適正な為替レートの堅持を可能にする体制作り、わが国に根強く存在する株式投資に対する否定的な考え（軽視や蔑視、警戒心）の除

去である。

したがって、「年金基金の運用の柱にすべき株式投資」という提言書の必要性を痛感させられている。株式投資の有効性を説くと同時に、株式投資を積極的に活用する前提として、次の三つの条件の実現が必要不可欠であることを訴える必要がある。

- ・基本逸脱の時価発行増資と過度の円高の弊害を反省・検証し、対策を講じる。
- ・株式投資に対する否定的な考えを、「株式は国の宝である」という考えに転換する。
- ・アメリカに倣って大衆資本主義の実現を目指す。

教授の意図は、日本の資本主義を批判的に観察することにあつたと思われる。しかし、不肖私は、株式会社制度が企業経営の最良の方式であること、資本主義が大衆資本主義へと進化し得ることを知つたのであつた。

ゴーゴリの『外套』

都 甲 昌 利

ここまで読んで、私は「何だ、俺の事を書いているのか」と腹立たしく感じたと同時に、人間への洞察力に脱帽した。

ロシア文学といえば、直ぐトルストイの『戦争と平和』やドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』などをお願い浮かべるだろう。確かにこれらは日本人に広く読まれ、彼らの生き方や人生観に大きな影響を与えたことは確かだ。しかしながら、そのドストエフスキーは「我々はゴーゴリから出発した。我々は皆ゴーゴリの『外套』の中から生まれた」と言っている。『外套』を学生時代に読んで、なんと深い小説だと感激したことを覚えている。最近、もう一度読んでみた。

小説『外套』の粗筋はこうだ。

主人公、アカキー・アカキーエヴィッチは、ペテルブルグの役所で書類を清書する以外、能のない五十男である。身分も最低の九等官。貧乏で風采が上がらず、誰からも馬鹿にされ無視されている。

ペテルブルグの寒さを守るためには外套は欠かせない。彼の外套はボロボロで擦り切れている。その貧乏な男があるとき思い切って外套を新調することを決意する。実際に働いて長年貯めた小銭をかき集め、つましい生活を切り詰めてのことだ。

男がつぎはぎだらけの外套を抱えて、おどおどと仕立屋を訪ね、修繕を頼むが、修繕不可能と宣言され、ガーンと打ちのめされる。それでいて外套を新調することを決めたあと、彼の気持ちは晴ればれとする。ゴーゴリのこの辺の心理描写や正確な細部は実に凄い。

ところが、なんと外套が出来上がった途端に盗まれてしまい、彼はそのショックで死んでしまう。その後、ペテルブルグに通行人の外套を剥ぎ取る強盗が出没する。彼が亡霊となって街をさまよっているのだ。彼が狙うのは街の有力者で、彼らは何時もアカキー・アカキーエ

ヴィッチを馬鹿にしていた連中だ。

と、まあ、ざっとこんな筋で、全然面白くないという読者もいる。

しかし、ゴーゴリの作品には至るところに社会的同情つまり卑賤な、下積みの、哀れな人々への温かい人間的愛情が詰まっている。そして、地位の高い役人や権威、権力に対しては徹底的に立ち向かう。『外套』以外の作品にしてもそうだ。

『検察官』は、飢えに苦しむ哀れな男が、とある田舎宿に転がり込む。ところが、なんと市長達がお出迎え。市長や役人たちは、日頃の悪行がバレるのが怖いのだ。どうやら検察官と誤解しているらしい。なに食わぬ顔で官吏たちの弱みに付け込み金銭を巻き上げる。最後に偽検察官という手紙を置いて立ち去る。市民が地団駄踏んで悔しがるどころへ今度は本物の検察官がやってくるという筋だ。これも、なんと人間は権威に弱く何時も騙されているかというのが彼の言いたいところだ。

『外套』の主人公アカーキー・アカーキエヴィッチの外套は、ペテルブルグの寒さから身を防ぐ物理的な単なる物ではない。それはどんなに人に軽んじられようと、人と交わり、社会的に生きざるを得ない哀れな男の人間としての証、人間の尊厳の証ではないだろうか。

激しい競争社会に生きている我々現代人も自分の身を守るためには、他人から名誉や尊厳を得られる肩書のようなものを必要としているのではないか。代議士、大臣、長官、社長、博士など。

その名誉と尊厳の証の肩書きが剥ぎ取られたら我々はどうかやって生きるのだろうか。ゴーゴリは奥が深い。



キミなら『文明の衝突』にどう反論する？

高橋 孝藏

厳しい国際社会の中で、日本はどう生きていくのだろうか。

米国政治学者S・ハンチントン教授は、冷戦時代は米ソの「イデオロギーの対立」が国際関係を左右した、冷戦後の国際関係は世界の八つの文明がどう絡み合っているかで決まると論じた。一九九三年に発表された『文明の衝突』は秀逸な洞察力で、世界に大きな衝撃を与えた。教授によると、八つの文明とは宗教、言語、歴史、価値観、習慣などをベースに、米国を含む西欧文明、ロシアなどの東方正教会文明、イスラム文明、インドのヒンドゥー文明、中華文明、日本文明、ラテン・アメリカ文明、アフリカ文明をいう。

キーポイントは、同じ文明内の国々の諍いは容易に理解しあえるが、文明間の争いは解決するのが難しいと断

じたことだ。

その例として、同じ西欧文明内の仏、独は三度も大きな戦争を戦ったが、今ではお互いに協力しあい、欧州をけん引している。一方、文明が違う日本と中国は、一九三〇年代、四〇年代に日本が犯した行為をめぐって、日本がどこまでどのように謝るかいまだに論争が続き、和解の糸口さえ見えないのがその証拠であると述べた。

中国問題専門家によれば、尖閣をめぐり、中国指導部はしばしば日本との戦いも辞さない覚悟でいたといわれる。東アジアの盟主となり、いずれ世界一の大国にのし上がりたい中国にとって、日本は宿年の敵なのだろうか。日本はかなり危険な立場に立たされていると思われる。日本は中国とどう付き合えば良いのだろうか。

イスラム教徒の出生率は高く、現在世界総人口の二〇％強であるが、二〇二五年には三〇％ぐらいになり、キリスト教徒の数を追い抜くであろう。彼らは戦闘的で、イスラム教徒はあらゆるところで、非イスラム教徒と争いを起こしていると教授は解説している。

『文明の衝突』出版後に起きている、イスラム過激派

の過激な行動は予測済みだったのだろうか。

フランスの風刺週刊誌襲撃事件をきっかけに、西欧の一般市民による無差別なイスラム教徒排斥、反イスラム運動が激しさを増している。

西欧文明では言論の自由は無制限に守らねばならないものと考えられている。しかし、他文明の信教の自由も尊重せねばならない。教祖を貶め、その宗教を卑しめることは信教の自由を阻むものではないのだろうか。

文明が違えば価値観も違う。教授は、西欧文明の価値観を他の文明に押しつけてはならないと警告している。西欧とイスラムの全面対決にならないようにするために、西欧側の自制も必要だと思われる。

西欧文明と東方正教会文明が理解しあうのも難しい。旧ソ連の版図にあった地域がEUに加盟したい、ロシアはこれを取り戻したい。クリミア半島を含むウクライナ、モルダヴィアなどをめぐり、解決のめどは立たない。

残念ながら、文明間の争いに歯止めがかからない。

さらに、ハンチントン教授の日本に対する分析は手厳

しいものがある。

「八つの文明の中で、日本文明は日本一国だけ。孤立しやすい。その孤立をさらに深めるのは、日本文化は高度に排他的で、広く支持される宗教やイデオロギーを持たない」

「アメリカ人は、日本人の考え方と行動を理解するのが難しい。アメリカと日本の関係は、アメリカが西欧諸国との間で築いているような、打ち解けた、思いやりのある親しいものであったことはないし、これからもそういう関係が築けるとは思えない」

本当にそうなのだろうか。教授執筆当時より時間は経ち、禅文化はいざ知らず、食文化、アニメ文化などは世界各国で受け入れられはじめている。ただ、日本や日本人を理解してもらえないような、必要な自己主張や強力な情報発信が足りない点は痛感せざるを得ない。

日本が孤立せず、国際社会に積極的な貢献ができるように、私たちに求められている課題は多い。

ラ・ノストラ・ベラ・トリエステ

阿部 典文

作家ジェイムス・ジョイスは、一九〇四年、二十二才の時に英国の植民地として圧政に苦しむアイルランドを離れ、以後生涯を大陸で過ごしている。

そのヨーロッパ大陸での最初の居住地が、「トリエステ」であった。そしてこの地で、『ダブリンの市民』や『若き日の芸術家の肖像』等を執筆し、長編小説『ユリシーズ』の第一挿話を脱稿している。このトリエステでの生活は、経済的には苦難に満ちていたが、人々は異邦人を温かく受け入れてくれた。加えて、アドリア海北端東部に位置しているこの都市の自然の美しさに魅せられたジョイスは、「ラ・ノストラ・ベラ・トリエステ」（麗しの我らがトリエステ）と呼び、若き日の思い出を残している。因みに一九〇九年『ダブリンの市民』出版のため祖国に一時帰省し、再びトリエステへ戻る旅路の楽しみや恋しさを、「駅ごとにわが魂の平安に近付くのだ。木の間

越しに見えるミラマーレ城（アドリア海に浮かぶ白鳥と呼ばれている）と、トリエステの長い黄色の栈橋を見る時、ぼくの心はどんなだろう。何故こうも度々、トリエステを渴望の眼差しで見るべきさだめなのか」と、妻への手紙に記している。

ジョイスに心の平安を与えたトリエステは、第一次世界大戦終結後イタリアに帰属し、現在は人口約二十五万人の都市である。ここはかつてのオーストリア帝国の海の玄関口であり、イタリアの諸都市とは雰囲気異なる近代都市の外貌を持つが、また、ローマ帝国時代には東部ヨーロッパ、特にバルト海との交易の窓口だったから、古代と近代を同居させた骨董的な街並みを保存する街でもある。

その後は地中海やアドリア海の覇者となったベネチアの陰に覆われ、中世には息を潜めていたが、トリエステに再び繁栄をもたらしたのが、十八世紀初頭、アドリア海の自由貿易権を確立したハプスブルク帝国による商業貿易港としての開発である。そして現在では、ヨーロッパ内陸への石油基地として、また造船業を始めとする重

工業に活路を見出している。

この都市と私の関係は、一九七一年の晩秋、トリエステに本社を置くイタリア造船公社を訪問した時が最初であった。第一印象は強烈だった。内陸部の空港に着陸した際、出迎えてくれたのは、白銀に輝くアルプスの支脈「ドロミテ山群」の美しい景観。次に「柿の木のためわに稔る赤い実」で彩られた農村地帯と、第一次世界大戦の激戦地跡の丘陵に築かれた「公園墓地」。これ等を通過した後、南下する一条の道の前方に現れた「造船公社モンファルコーネ工場」の林立するクレーン群。その印象的な景観はジョイスの知らないところであるが、造船所を眺めた後の海岸線と、小高い丘陵に挟まれた所謂「トリエステ回廊」の景色は、新参者であった私にとって、まさに「ラ・ノストラ・ベラ・トリエステ」そのものであった。

トリエステでの最初の夜、ホテルから眼にした夕日に映えるトリエステ湾と、遠く水平線上に浮かぶユーゴスラヴィア・イストリア半島の風景は、ジョイスが描くダブリン湾の景観に瓜二つであった。一度は捨てた故郷の面影を濃く留めるトリエステに、ジョイスが「魂の平安」

を感じたことは、容易に納得がゆく。そこで、日本人には馴染みの薄いトリエステの魅力を記してみよう。

「海岸道路」に沿ってかつて塩田だった新市街地を通り抜けると、右側には地中海周遊の豪華客船が発着する埠頭が海に向かって突き出している。一方左側には幅二十メートルほどの大運河が、新市街と旧市街を分かつ。その奥周辺は、新古典様式のカトリック教会をはじめ、ユダヤ教やギリシャ正教の聖堂など、住民の多様性を示す寺院が散在し、また一角には豪華なオペラ座が陣取っている。

旧市街の中心に位置するローマ時代の城郭跡「聖ジュストの丘」を取り巻く環状の小路や、丘の頂上に向かう数本の急な坂道は、ジョイスを始め、トリエステ生まれの詩人ウンベルト・サバや、エッセイ「トリエステの坂道」を著した須賀敦子等の文化人が好んで散策した古い歴史を秘める小道である。

この街並みは、私の滞在中の仕事の疲れを癒してくれる「麗わしの我等がトリエステ」であったことに気付き、ジョイスの言葉が、いま「心に残る一句」となっている。

『ホッセイニ』そして山々はこだました』を読んで

大泉 潤

世界の紛争地アフガニスタンで、美しくも哀しい物語が紡がれた。著者は当地に生まれ、アメリカで文筆を揮うカーレド・ホッセイニである。著作三編の出版は数百万部を超えている由。

文明の曙の時代にある国が辿ったように、この国も富者と貧者、統治する者とされる者、暴力をふるう人間と被害者の対比がある。抑圧を避けて、豊かで強い影響を与える国へ飛び出す人と、絆に縛られ、地元に残まる人がある。

第二次大戦後、英のインド統治終了により、パキスタンに軍事併合されてその一州となり、一九七三年クーデターによって、大統領制のアフガニスタン共和国となった。ソ連に接近し、イスラム主義者を弾圧した。ソ連が撤退し、武器が大量に残され、タリバン政権、紛争を経て、アフガニスタン・イスラム国が独立。内戦が全土に広がり、

タリバンが勢力を拡大した。米多発テロを契機に、部族指導者の家系のカルザイ議長が首相、大統領へと駆け上った。一方、CIAの作戦は、十一万人のソ連占領軍と戦っていたイスラム教徒ゲリラに向けての武器補給だった。パキスタンの情報機関経由で提供したが、カイバル峠でアフガン抵抗運動の指導者に渡す前になりに流出した。また、反乱指導者は自分たちの分を隠匿した。彼らは、『将来アメリカが居なくなる。頼りは自分たちだけ』と主張し、統治は複雑を極めた。

物語は、一九二七年のニラ・ワーダテイの両親の出会いから、二〇一〇年のサンフランシスコでのアブドゥラとパリとの再会までの家族の歩みが、経糸として延々と語られる。広く地球を舞台に、沢山の登場人物が活動する。故郷のシャドバク村、都会のカブール、パリ、サンフランシスコへと広がる。ワーダテイ家は、祖父が国王に仕えた家系である。執事のナビと、その甥姪のアブドゥラとパリが主役を務める。カブールの屋敷は白く輝き、陶器の花瓶、円形の鏡、大理石の床、トルクメンの絨毯、タイル張りで冷蔵庫のある台所、庭にはジャスミン、薔

薇、サクランボの実る木々と草花が美しく、ウズベク人の料理人が居て、乗用車シボレーと運転手の家がある。

一方、郊外のシャドバクに住む貧しいサブールは定職がなく、泥煉瓦の家に住み、林檎摘み、レンガ作り、石運び、耕作、道路補修と頼まれ仕事に精を出す。行き詰まり、娘パリをワータティ家へ渡す。

一九九〇年代 市域で戦争が起き、カラシニコフを持った盗賊が現れ、ロケットが撃ち込まれ、交戦地帯となった。弾丸、曳光弾で屋敷は惨状を呈し、窓が割れ、塀は砕け、民兵が家具、絵画、絨毯、彫刻などあらゆるものを略奪した。アデルの父ムジャヒディンは民兵の首領の一人で、カルザイ大統領と並んだ写真もある。新市街を建設し、大邸宅に住んでいる。古い邸宅を所有していた老人と子供の陳情を無視し、部下が受け取った権利書はボヤで焼失したという。また彼の経営する工場では、秘密物資を製造する恐れのある人物だった。

スレイマン・ワータティ氏の遺産は、介護したナビに遺される。老衰したナビはワータティ家のパリに遺書を書く。パリの兄アブドゥラは、アフガニスタンを脱出し、

パキスタンに逃れ、サルタナと結ばれた。彼らはサンフランシスコでアフガニスタン料理店エイブス・サブハウスを娘と三人で、ささやかに営んでいた。

アブドゥラはその後引退し、今は清潔な介護施設に入居し、穏やかな余生を送っている。リュベロンの丘に建ち、ヴォグリーズ山地の景観を楽しめる。そこへ、甥のアランが家族を連れて到着する。遺産のスーツケースには茶色い紙に包まれた箱があり、様々な形、色の羽根が詰まっている。これこそ、アブドゥラがパリに長年にわたって送ったものだった。

通りがかりの女性に注がれる男たちの視線、カプールのダラルマン宮殿、ガルガ湖にそそがれる光線、詩を愛する心、銃を背負った恐ろしい盗賊、ロケット攻撃による屋敷の被害、民兵の略奪、死体の置き去り、新国王の改革に対する国民の反応、屋敷を奪われた一家の逃避劇などの挿話がちりばめられている。

戦乱で散り散りになった一家が、時を経て安住の地に辿りつく心休まる一編である。世界平和、家族愛、平等、友好を考えさせられる珠玉の一編と思う。

思い出の一節

猪股 重子

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。……」

この一節は漱石の『草枕』の書き出しです。でも私にとつて、親元を離れ一人暮らしを始めた頃、いまは忘れましたが、何かに悩み、友だちに出した手紙の返事の中に、和紙に小筆で書かれたこの一節が入っていました。若き日の心に深く刷り込まれ、折に触れ何かを思う時、いつでも口をついて出てくる一節です。

後期高齢者と呼ばれる今日、青春時代に感銘をうけた、一番に身に沁みる言葉でもあります。

あれから五十年、智に働けど知恵は出ず、情に棹させば涙の川に溺れ、意地を通せば老いの一徹と言われている今、兎角この世は住みにくいと悟るこの頃です。

百年も前、いやそれ以前から人間の感情というもの、言葉というものの難しさにみんな悩んで来たのだと、この頃つくづく思っています。残り少なくなった今、この世に生き続けるためにはこれを肝に銘じて、暮さねばならないとも思っています。

どこに越しても住みにくいと思ったとき、先達の詩人や画家、文人、俳人は後世に残る名画、名作、名句を残し、少しでも住みやすい世を作りました。

だが私はどこにも越すことが出来ぬのならば、好きな俳句の旅に出ます。

僅かばかりの時間とお金をやりくりして、ぶらりと旅に出ます。美しい山河。秘められた物語。滅び行く伝承。破壊と建設の果てしない繰り返しの中に、自然の花を愛し、育て、黙々と続けられているささやかで、我慢強い人間の営み、さまざまな物との出会い、行きずりなるがゆえに素直になれるそんな旅が好きです。

その中でも俳句の仲間との吟行が何よりです。この春も小石川後樂園へ花菖蒲を見ようと句友と出かけました。花菖蒲には少し早く、余り咲いていませんで

したが、睡蓮池は一面美しい純白の花に埋まっていた。鴨の親子がのんびりと泳ぎ、青もみぢの美しい小道や小川には、生まれたてのトンボも遊んでいました。

延段とふ道の木洩れ日青もみぢ

睡蓮の葉を縫ふやうに小鴨かな

生れたての塩辛蜻蛉すいと来る

幾百代今に継ぎたる菖蒲園

また先日も地元の句会で、横浜久良木能楽堂へも行ってきました。句会の前に日本の伝承芸能、古い謡の中から「羽衣」「高砂」の一部を聴くことが出来ました。

世事離れ謡に遊ぶ竹の春

ひたすらに走り根越ゆる秋の蟻

穴惑う蛇と見紛ふ松根方

などと詠みました。

十月にはペン俳句の仲間と鎌倉へ吟行に行ってきました

た。

天候にも恵まれ、鶴岡八幡宮は七五三のお祝いに可愛らしく着飾った子、家族連れや遠足の子供、外国人などなど、平日にも関わらず賑っていました。

四年前の強風に倒れた由緒ある大銀杏の根元、移植された木からも新芽（ひこばえ）が育ち、歴史ある大銀杏にも新しい命が受け継がれています。

比企一族の菩提寺である妙本寺も、紅葉には少し早かったのですが、いかにも鎌倉という風格で迎えてくれました。

幕目のととのふ寺や薄もみぢ

鐘撞堂囲む走り根秋深む

午後からは若宮大路を見下ろす会場に集まり、おいしいお弁当に一息つき、仲間の皆さんの句を見ながら楽しい句会の日でした。

来年も元気に『悠遊』にペン俳句会吟行の報告ができますことを願っています。

望郷のバラード

大平 忠

ルーマニアの音楽家ボルムベスクが、十九世紀末に作曲したヴァイオリン曲『望郷のバラード』の存在を知ったのは、今から二十年前だった。ゴルフエッセイスト夏坂健の同名のエッセイを読んでからである。この曲が日本で演奏されるまでの経緯の記述に惹かれた。

一九七七年、外務省勤務の岡田真樹氏はウィーン旅行中に、一人の音楽家の演奏に聞き惚れる。感動のあまり楽屋を訪ねた氏に、そのヴァイオリニストはイオン・ベレシユと名乗り、チャウシエスク政権に疎まれて故国ルーマニアを逃れ漂泊亡命の身であった。「故国を偲んで毎日この曲を弾いている」とのこと。岡田氏は再会を約したが、次に巡り会えたのは八年後のスイス・チューリッヒであった。別れるとき、老音楽家から一枚の楽譜を託された。「あなたの感動したこの曲に相応しいヴァイオリニストに演奏していただきたい」と。

それからまた七年の月日が経つ。一九九二年、当時外務省東欧課長の岡田氏は、出張でルーマニアのブカレストに滞在中、東欧三ヶ国を文化使節として訪れていた天満敦子の演奏を聴く。岡田氏は、この人ならと老音楽家から託された楽譜を古川ルーマニア大使の手を通じ渡してもらう。翌年の暮に『望郷のバラード』と名付けられて、天満敦子によつて本邦初演奏が叶えられた。しかし、八方手を尽くしてもイオン・ベレシユの消息は杳として不明だったという。

このエッセイを読んで『望郷のバラード』をCDで聴いた。十分足らずの小曲である。ゆつくりしたテンポの哀調を帯びた調べで、繊細に震えるかと思えば歌い上げ、感情を揺さぶられる曲だった。全体に憂愁の色が濃く、聴く者の心深くに訴えてくるものがあつた。

作曲者のボルムベスクを調べると、イオン・ベレシユと似てやはり哀しい生涯であることが分つた。

チブリアン・ボルムベスクは一八五三年に生まれ、音楽をウィーンに学ぶ。当時ボルムベスクの生まれ故郷はオーストリア・ハンガリー帝国の支配下にあり、愛国

の青年ポルムベスクは独立運動に身を挺した。捕われて投獄され獄中で故国と故郷の恋人を想って作ったのがこの曲である。ポルムベスクは故国に帰ることなく、一八八三年獄中で二十九才の短い生涯を終えた。

しかし、その後この話は事実と少し異なることが分ってきた。ウィーン在住の音楽家竹内祥子氏がポルムベスクの生涯を追って、生誕地であるルーマニア北東部スチャバを訪ね、さらにウィーンでの足跡を辿った。著書『遙かなる望郷のバラード』によれば、ポルムベスクは神学校在学中ルーマニア独立運動に携わり、一八七七年二十四才のときに逮捕され十一週間投獄されたという。恋人ベルタとの出会いと別れはこの後である。『望郷のバラード』はこの失恋の痛みと祖国の運命への嘆きの中に、ウィーンで作曲された。長く病んだ結核が悪化して親族に見守られつつ故郷で亡くなった。巷間流布されてきたように獄中で作曲され獄中で亡くなった訳ではない。よくある英雄伝説のように脚色が脚色を生み悲劇性が増してきたのであろう。しかし、ポルムベスクの曲が人の心を打つのは間違いなく、傷ましい生涯であったことも

変わりはない。

竹内祥子氏は、この曲の憂愁の調べの基調はこの地に伝わる音楽、ドイナからきているという。ドイナは哀歌ともいわれる。ルーマニアの歴史を紐解くと、実に哀しく、その歴史の哀しさがドイナを生んだのだろうか。

バルカン半島の北東部に位置するルーマニアは、紀元前からダキア人が住んでいた。紀元後ローマ帝国が攻め入る。このあとゲルマン人、フン族、そしてスラブ人がやってくる。バルカン半島共通の人種、宗教、言語のつぼの中で国境も統治も目まぐるしく変わった。近代においてもオスマントルコとオーストリア・ハンガリー帝国が支配を争い、特にポルムベスクの故郷ブコヴィナ地方のスチャバは、ルーマニアの中でも長くハプスブルク家の支配下にあった。これらを知って『望郷のバラード』を聴くと、ルーマニアの歴史そのものが嘆きむせび泣いているかのようだ。

二〇一〇年のバンクーバー・オリンピックのとき、男子フィギュアでこの曲が流れた。ルーマニアの選手だった。今も、ルーマニアの人々の心の中にある曲だという。

私の『吾輩は猫である』

志村 良知

中学一年の国語の教科書に、『吾輩は猫である』の吾輩が餅を食って踊りを踊る場面があった。このとき、私はこの本を、子供向け翻案でなく、文庫本で読んでいた。

大学で日本の古典文学を勉強したいと望みながら叶わなかった父は、息子にその望みを継いで欲しいと思ったらしい。子供のころから機械いじりと電気工作が大好きだった兄のことは純理系だと諦めていたが、そういうものにさほどの興味は示さなかった私には期待したようである。

小学校三年生のとき、文庫本を買って貰った。大人になつたような気分で、嬉しくて消しゴムを彫って蔵書印を作った。トルストイ民話集、グリム童話集、壺井栄、坪田譲治、宮沢賢治などであった。今こうして並べてみると、戦前に小学校教師だった父の深慮遠謀が窺える選択である。

高学年になると、文庫本を自分で選ぶようになった。

手もとの『吾輩は猫である』は昭和三十五年発行であるので、父の勧めがあったのか、面白そうな題につられてのことか、とにかくここで『猫』に出会ったものと思われる。中学時代には国語の教科書にも刺激され、面白そうな場面の暗唱も試みた。

しかし、あにはからんや、大学は化学科に進んだ。機械や電気に興味を示さなかった私のこの進路選択は、父を驚かせ、また落胆もさせたようである。

帰省した正月、炬燵で読んでいる本が四千円と知るや、『増鏡』が揃いで買える値段だ」と、化学の神様ボーリングの名著『化学結合論』を、日本の古典文学の下に置く扱いをした。

父との文学論は、古典に引きずり込まれると結局は無知だと罵倒されることになるので、できるだけ父が好きな龍之介か、漱石に留まるよう努力した。

背景が日露戦争当時の事で、江藤淳が「高速度撮影」と評した晦渋ともいえる細密描写が特徴の『吾輩は猫である』は、格好の話題の対象だった。他の作品については、

どこで虎の尾を踏むか判らず、深入りは禁物であった。

『吾輩は猫である』は、作家夏目漱石の処女作である。漱石がこの小説を執筆するに至った動機については多くの説がある。この時代の漱石は、後に『道草』に描かれるように、複雑な幼年時代を引きずった人達にまわりつかれ、精神は半ば病み、さらに胃潰瘍に苦しんでいた。これらから逃れるため、虚子の勧めにのって書いた、という説が正しいように思う。実際、主人の苦沙彌先生を辛らつに、言い換えると、自虐的に描くことで、苦悩を和らげているように感じられる。

何にしても、この作品で小説家夏目漱石が誕生したのは、人類にとつての慶事である。俳句を繋げているように自分で評した美文調の『虞美人草』もあるが、漱石の小説は言文一致体で、リズム感が良いので、読みやすく、大脳皮質に沁み込みやすい。私が高校時代、高校生に一番人気がある作家は漱石であった。

軽快なテンポの『坊っちゃん』、瑞々しい青春『三四郎』、日本語の美しさの極致『草枕』などは、高校生にも深い感動を与える。『行人』、『こころ』、『明暗』とな

ると、人生後半になっても、読み返すと深い感銘を受ける。

漱石はトスカニーニと同じ歳である。第二次大戦後も世界の楽壇に君臨した大指揮者と同年齢ということを知ると、四十九歳の生涯と、十年間と云う小説家漱石の執筆期間がいかに短いものであったかに愕然とする。

漱石の死の二年後、日本で最初の胃摘出手術が成功した。三十代から「この胃さえ……」と自らの胃を呪い続けていた漱石は、この時生きていたなら最新の治療を受けるに躊躇しなかっただろう。

荒れ模様の湯河原、という舞台だけ用意されて突然途切れる『明暗』が大団円を迎えたその先には、どんな世界が控えていたであろうか。

あの世とやらにも楽しみは色々あるが、その一つは漱石の新作が読めることである。



痛快！ この一冊

稲宮 健一

松原久子著『驕れる白人と闘うための日本近代史』、著者は毎週世界五か国の代表が参加するドイツのテレビ討論番組で、他の社会に無知な白人社会と対峙して、日本の近代史を舌鋒鋭く説いて闘った。

西欧では近代文明は優れた西欧によって築かれ、他は遅れた文明社会だと思われている。その中で、日本は他のアジア諸国と異なり、明治維新で近代化を西欧の模倣によってすばやく達成した。優れた西欧社会、遅れた他の文明と言う既成概念に、松原は単なる模倣ではないと猛然とアタックして、歴史の真実を主張した。この本は美しく着飾った洋装の裾を捲り、飾り気のない西欧社会の身の内を白日に晒し、同時に日本社会の奥も披露した。アジアの中で、なぜ日本だけが早く工業化に離陸したか。その所以を地勢、民度、統治機構などを挙げ、説明している。地勢は程よく大陸から離れ、温暖な気候に恵

まれている。生活の糧は稲で、農民は稲作には必須である綿密な灌漑の共同作業を、村の寄合による合議など高度な自主管理で行ってきた。この為、読み書き算盤が早くから普及し、識字率は高かった。西欧の農民が読み書きできるより遥か以前であった。それ故、日本では国民の多数を占める農民の民度が高かった。一方、西欧の地勢は日本に比べて、遥かに厳しい。欧州の中部、北部は荒涼とした貧しい土地であった。高緯度であり、農民は苦勞してこの自然から穀物を収穫し、横暴な領主にこき使われた。

中世の西欧の国々は胡椒、砂糖、高級織物、陶磁器などを、アラブの商人を経て、南の国からの入手を渴望したが、輸出できるのは羊毛、皮など僅かな商品で、他は金銀で支払った。これを補う社会的必要性に迫られ、東の海に船出し、その延長上に新大陸の発見や、征服した各地に植民地を獲得した。そこから膨大な富を収奪した。この動機を未知の世界への知識欲、冒険心、優れた文化の普及、未開の異教徒の魂の救済などと語るのには美し

いお伽嘶だ。総てが欲得勘定に駆られた活動だ。そして、十九世紀には世界中の富を掴み、狭い西欧で多くの民族が切磋琢磨して、天文学から始まった定量的な理学、工学を發展させ、産業革命を興し、近代化の先鞭を切った。その勢いでアジアに進出し、黒船来航、開国へと繋がる。

明治維新の活動は、二百五十年の平和な江戸時代が揺籃期である。支配階級の武士は人口の七%で、約二百万人、統治は実質的に地方分権で、武士は大名に仕え、俸禄によって暮らす官僚、サラリーマンである。武士の居住は大都市、江戸や藩の城下町で、土地とは切り離されていた。一方、西欧では、国王や上級君主が封臣に広大な領地を封土として与え、封臣はそれを管理していたが、君主等の縛りが疎かになり、封臣貴族が領地の所有者となり、支配権を持った。権力と富が一致する社会である。江戸時代の幕藩体制の表向きは、この体制の正当性を获生徂徠等の倫理で維持された。しかし、無私の心で人の内面からの心象に従い、知行合一を説く陽明学の流れが武士に深く浸透していた。また、古学では古の大和心

が説かれた。その考えは平田篤胤や、その門人によって純化され、神道の優位性へと繋がった。水戸学では永い歴史の流れから皇道の尊重が説かれた。

幕藩体制下にあっても、これらの倫理に影響され、民の窮状を救う武士の心が、大塩平八郎の乱を起こし、「救民」の旗印が起きた。これに、黒船来航の外圧が加わると、「救民」が「攘夷」にすり替わり、古学や水戸学が加わり、「尊王攘夷」の旗印が幕藩体制を終焉させ、明治維新へと繋がった。維新時の近代化は、支配者階級の過去から継続した倫理観、高い民度の庶民、産業革命を経た物質文明の外圧をるつぽに入れて熟成し誕生した。

テツオ・ナジタ著『明治維新の遺産』は、江戸時代から明治維新に繋がる社会の変化を述べている。

松原、ナジタ共に、昭和の初期に西欧の植民地政策を模倣して、破局を招いたと指摘している。

サロン21 活動報告

二〇一三年は、四月以降の一年間で「日本の目指すべき方向」という大きなテーマを掲げ、その中で毎月小テーマを決めて、各担当者がプレゼンテーションを行い、引き続き出席者全員で討議する形式で進めました。

二〇一四年の四月以降はこの方向は維持しつつ、毎月自由にテーマを設定して、小一時間のプレゼンテーションと、それに続く全員参加の二時間余りの自由討議という形式を踏襲、毎回活発な議論が展開されました。

また、プレゼンテーション用に作成された貴重な資料と討議内容は、会員以外の方にも閲覧できるように、当クラブのホームページに掲載しました。徐々にヒット数も増加しています。

二〇一四年のテーマとプレゼンターは次の通り。

- | | | |
|----|----------------|-------|
| 一月 | 「行政公務員改革」 | 富岡喜久雄 |
| 二月 | 「マスコミ改革」 | 西川 武彦 |
| 三月 | 「今後のサロン21の進め方」 | 全員 討議 |

四月 「江戸時代について」

森田 晃司

五月 「近代史について」

横内 則之

六月 「米中世界戦略と日本」

志村 良知

七月 「歴史に見る子どもの鍛え方」

大平 忠

九月 「日本の財政と税制」

大泉 潤

十月 「1000兆円の借金を恐れるな」

鳥海 博

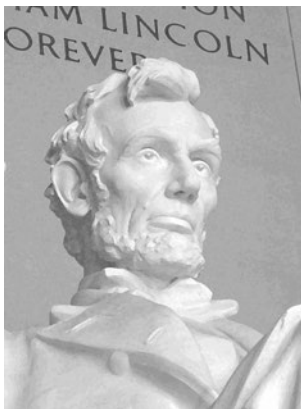
十一月 「核抑止論と日米安保条約」

池田 隆

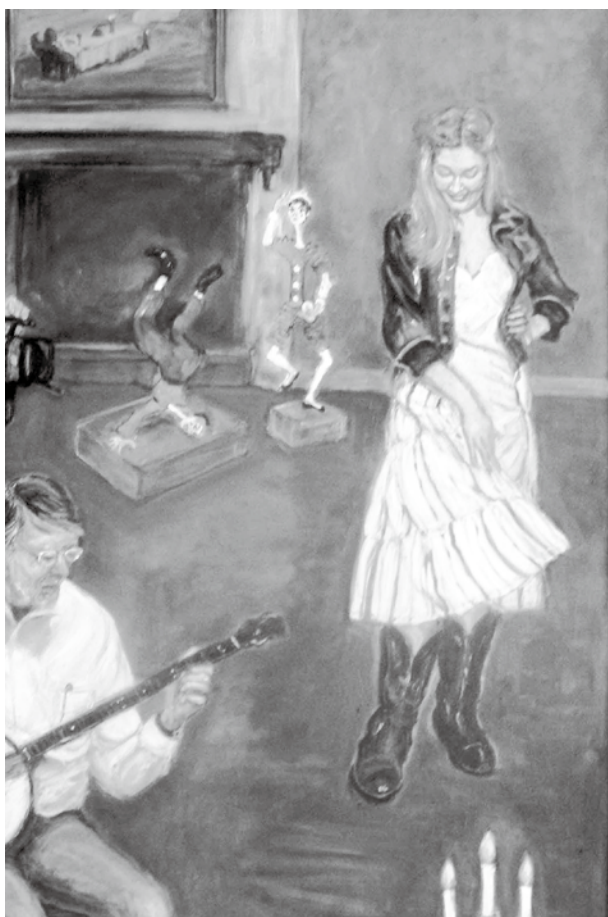
十二月 「戦後レジームの転換」

上田 信隆

(プロマネ 大平、森田)



自由テーマ



孤帆遠影

原田 信

「武漢に帰るんですが一緒にどうですか」

知り合いの中国人コック（厨师）リさんに誘われた。しばらく前には氣候の良くなる翌春に帰ると言っていた。今は真夏。武漢は中国でも三大暑熱地獄とか。即答に迷う年齢だが、こういう機会を逃すと再びはないかもしれない。

武漢に行くなら、黄鶴楼はなんとしても訪ねたい。そしてその楼上から流れ下る揚子江の景色を見たい。言うまでもなく李白の詩に誘われてである。詩人は惜別の宴の後、長江を下ってゆく親しい友の帆かけ船を見送った。でも、それから千二百年以上の時が流れている。

ガイドブックには「楼上からは雄大な長江が一望できる」などと書いてあるが、そのまま信じるほどこちらには甘くない。出発までの数日、ネット検索で調べまくった。しかし、黄鶴楼上からの眺望に触れた旅行記は二つしか

見つからなかった。いずれも、「下流方面の眺望」についてはどうも芳しくないとしか読めない。

現在の黄鶴楼は、近年武漢長江大橋の建設のために以前より内陸寄りに移設されたと言うし、古代の楼はさらに河のほとりにあつたらしい。詳しい地図を見ても楼からの下流の眺望は河岸にあるビル群が邪魔しているようだし、楼の近くに高い建物はなさそうだ。でもさらに調べると、対岸の河畔にホテルがあり、その上階からなら間違いなく眺望が得られそうだと判った。すぐネットでできるだけ上の階を予約した。

リさんにホテルは自分で決めたと言ったら驚いていた。二人共お互いのことはさっぱり、筆談でようやく僅かな話をするだけなのだからびっくりしたのも当然だろう。ホテルのフロントで「ご希望に沿う良いお部屋です」と言われた。十六階の東南の角部屋だと言う。驚いたのは前払いの部屋代がネットで予約した時の半額になっていたことだ。リさんしか考えられないから翌日問い質したら、父親がこのホテルの総経理（社長）だったと言う。でも退職してすでに十五年になる。これが中国か。

部屋に入ると南側は一面ガラスの窓。真下は河畔そのもの。東側にも窓があり、遠く揚子江の流れゆく景色が広がる。長い間思い描いていた景色が突如眼前に広がる体験にしばし茫然とした。揚子江は武漢周辺ではほぼ南から北に流れている。やがて気付くと、南側の窓の向こうに江を隔てて黄鶴楼が見える。楼上是ほぼ同じ高さだ。黄鶴楼と同じ南岸の下流方面には確かにビルが多い。

翌日、黄鶴楼に上ってみた。予想通り下流の眺望は全く得られない。高さは五十米余りだが、手前にある新旧の建物の向こうに揚子江の流れがあるのがかろうじて判る程度で、何とも平板、はつきり言ってつまらない。武漢長江大橋を見下ろすにはいいが、河畔までは一キロ以上あるだろう。だから河畔も全く見えない。

李白の時代から長い時を経て、その間黄鶴楼は何度も再建され、移設もされた。詩人が見送った楼は今よりもっと低かったが、河のすぐほとりにあったのではないか。去りゆく友を乗せた帆かけ船を見送り、やがてその遠影が碧空に尽きた後も、天際の流れをただ見つめ続けた。

ホテルの窓から帆かけ船を見たいと思ったが、見つけ

ることはできなかった。でも数日の滞在の間、揚子江を見はるかす景色と江上を行き交う中小の船の姿を見飽きることはなかった。朝もやの中に荷を運ぶ小舟もあるし、夕べには船が陽射しを浴びて一際輝き、川面には夕日だけでなく、対岸のビルの窓から反射した光も重なる。そして夜ともなると、満艦光を放つ遊覧船が往き来している。遊覧船の音楽も地上の騒音も聞こえず、ただ時折、汽笛が響くだけであった。

滞在中に元総経理の自宅に招かれた。食卓に次々に並ぶ料理は全て奥さんではなく、ご当人の手料理だった。揚子江の魚を主体にあっさりした味付けが多く、「好吃」を何度も繰り返し、リさんに筆談で「君より上手か」と聞いたら、「自分はプロだ」と少し気色ばんだ。部屋は湖を見下ろす五階。ただしエレベーターがない。中国では多くのマンションがこのタイプらしいから、今後大変だ。ことばの問題はやはり大きかった。招待された時はリさんとの筆談しかなかった。で思い付いて、翌日一家を招いた答礼の宴では、日本語ができるホテルの女性スタッフに頼んで街なかの餐厅まで出向いてもらった。

日本一周鉄道の旅

富田 佳瑞

昨年四月、広告につられて「ご夫婦でめぐる日本一周鉄道の旅 五日間」に参加した。

四月十一日新横浜上りホームから出発し、四日後に同じく新横浜上りホームに帰着する同行者十数組のシルバー・ツアーである。

初日は新幹線と在来特急でひたすら北上し夕刻札幌着。ツアーの雰囲気もほぐれぬままにその夜は自由行動で、春まだ浅い札幌の寒気に震え上がった。

二日目は早朝札幌を発ち一路北行してJR最北端駅の稚内駅で折り返し、札幌で青森行夜行寝台に乗り換える行程であった。初日は穏やかだった年配のガイド嬢が次第に厳しい口調となってきた。「札幌での乗り換えはとにかく迅速に」と頻りに繰り返す。不思議に思っただけで予定表と周囲の状況をチェックして肝を潰した。

稚内からの特急『スーパー宗谷4』の札幌着が二十一時五十五分、乗り継ぐ青森行寝台急行『はまなす』の札幌発が二十二時丁度、乗り換え時間が僅か五分！しかも階段の上り下りをしてホームを変えなければならぬ！ガイド曰く、「到着列車が遅れても出発列車は決して待ちません」

四月半ばの宗谷本線は雪に埋もれていてエゾ鹿が線路上に出没する。更にこれは事故多発のJR北海道だ。一分遅れたらパーなのだ！車中では往路でも雪と鹿によるダイヤの乱れが数回警告アナウンスされ、復路ではそれが頻繁になってきて、暗くなった雪原にエゾ鹿の群れがあちこち目撃されるようになると、流石に観念したか、ツアー一行黙して語らぬようになった。

されど泣く子も黙った旧国鉄は腐っても鯛、万歳！よかった、間に合った。とは云え、何せ旅は雪国から南国まで、冬物夏物で膨れ上がった手荷物を抱えたシルバー軍団。三十数名が必死になってホームを跨いで列車を乗り換え、狭い二段式B寝台車の通路を押し合い圧し合いやつとの思いで各々のベッドに辿り着く様は、正に老

人受難の図。よくもこんな無茶な企画を組んだものだ。

旅行会社の大胆さに呆れるより、妙に感心させられた。

かくして海底トンネルを夢現で通過すると又も乗り換えの難行苦行が待っていた。寝台急行『はまなす』の青森着が早朝五時三十九分、乗り継ぐ『つがる2』の青森発が五時四十三分、なんと今度はその間わずか四分。しかもエスカレーターなしの階段上下で、これまたホームを跨ぐという。

寝台車は、着ぶくれて嵩張る荷物を持った団体客が降車するには極めて窮屈に出来ている。通路は狭く曲がりくねっていてドア部分は狭い。だがそこは分別ある敷島の大和武士、青森到着三十分前にはドア周辺に効率よくひしめき合い、降車時はひしめかずに *outlets* に脱出できた。その後の全員奮闘ぶりは昨夜と同じであったが、全員乗り終わるや否やドアが閉まり正に間一髪の青森脱出劇ではあった。

その後は、秋田―新潟―富山と今が盛りの桜の花を愛でながら南下し、新大阪を経由してその日は岡山泊。翌日はJR御自慢の**新幹線『さくら』**で一気に鹿児島中央ま

で下り、指宿枕崎線でJR最南端駅の西大山にたどり着いた。その夜はこのツアーで唯一の遊山地である指宿に戻って砂風呂で汗を流し、それまでに打ち解けていたツアー仲間と焼酎を飲み続けた。

新横浜に戻ったのは十五日の十八時五十二分。出発が十一日の八時十五分であったからトータル百六時間三十七分の人生を費やし、内五十三時間五十九分即ち五十・六%は列車で移動中だった。また合計十四回の食事機会の内八回は車内の駅弁、中でも二日目の夕食から翌日の夕食までは四回連続駅弁で食いつないだ。

宗谷岬から指宿まで、車中の眺めと云っても新幹線はトンネルが多いので日本海沿岸を除き左程のことは無く、ひたすら走っただけであるが終わってみると何やら達成感と満足感が残っていた。海峡も山塊も委細構わず一気呵成に、しかも快適・安全に走り抜けてみて技術大国の新たな旅情を感じたのかもしれない。そして隅々まで手入れされている清潔で美しい国土に惚れ直した為かもしれない。

最後の同級会

田原 敬

長野県上田高校を卒業したのが一九五〇年。以来六五年近くが経過し、二〇年程前から行われていた同級会も、二〇一四年を最後にすることが決まった。

その一月二八日、最後の同級会には四七名が集まった。卒業以来初めて参加したのが一名。昨年は四五名が参加したので、五〇名位は集まるかと予想していたのだが。でも、参加者それぞれ話題は尽きず、健康、家族、趣味など大いに盛り上がった。

東京大学卒業後川崎製鉄に入社し、鉄一筋に頑張る、日本の代表で国際会議に行き、長らく研究所長を務めた田中智夫さんに暫くぶりに会えたのも嬉しかった。

私は長年出版関連の仕事で過ごした。業界の仲間達と研修目的で欧米の出版、印刷、製本、販売会社等へ行く機会もあり、それなりに見聞を広めたりもした。

六二歳で退職した。次に何をしようという計画はなかったが、二人の息子が大学を卒業したら、辞めようと前から考えていた。

ある時、池袋のオリエント博物館へ企画展を見に行き、そこで江上波夫先生が団長でモンゴルに旅行という案内を目にした。

私は、モンゴルと同時に江上先生に同行できることに、云い知れない喜びが湧き出て、自分が新天地へ向かう様な感じを抱いて早速参加した。

一九九四年八月二日、新潟空港から出発、ウランバートルへ向かったが、途中、飛行機の異常に見舞われ、土砂降りの中を北京空港に臨時着陸。予定外のフライトとあって、北京のホリデイ・インに一泊した。

ホテルのロビーに三々五々と散らばり、椅子に掛けていると、江上先生が来られて、女性達が「先生此処へ掛けて下さい」という。何故、先生と皆がこんなに親しいのかと思ったが、先生がこの人達の歴史勉強会の会長であることが分かった。

Kさんが「貴方も入会なさいよ」と誘ってくれたので、私は一も二もなく、入会しようと決めた。

隣の席にたまたま先生が座られたので、良いチャンスと思い、密教のことなどお聞きした。初めてにも拘わらず、先生は、面倒がらず、また見下しもせず熱心に話して下さった。

先生は「北方騎馬民族征服説」を提唱し、文化勲章を受章された高名な学者だが、金銭や地位に淡泊で、どんな人にも平たく接したそうだ。昭和天皇の前で居眠りをし、その姿をご覧になった陛下は「面白い男」と思われたようでした。

モンゴル学者の田中克彦氏の随筆に面白い記事がある。一部を紹介すると、

——田中君、近頃、よく天皇から電話がかかってくるんだよ、さびしいって。天皇はぼくよりもちょっと年上だからね。「江上、ちょっと話をしたいんだが」と。そうすると宮内庁から車が迎えに来て、行くんだよ。

——はあ、どんな話をなさるんですか。

——それは騎馬民族説だね。天皇家は馬に乗って朝鮮半島を通って日本にやってきた、って申し上げるんだ。すると天皇はとても興味をもって聞いて下さるんだよ。

——私は、その頃は老いの孤独の味がどんなものか分かんかったが、今は分かる。天皇はどんなに孤独だったろうと。

狭い交友関係の中で、同年配の人々はどんどんいなくなっていくのだから、御進講なんかで親しくなられた江上さんは、天皇にとって数少ない気晴らしの友だったのかも知れない。

今思えば、江上さんの話の核心あるいは動機は、天皇を騎馬民族説の信者にしたところというところではなく、老いの孤独というところにあったのではないかと思う。

昭和天皇の御晩年の年齢に近くなり、最後の同級会の仲間達の心境も似たようなものであろう。

日本人の特性

野瀬 隆平

終戦の翌日、米軍の偵察機が東京の上空から見下ろすと、各所で火の手が上がっている。（戦争が終わって空襲をしていないのに、何故だ？）

大日本帝国は、八月十四日の閣議で、戦争関係の機密文書を破棄・焼却するよう決定した。内務省の裏庭では、ドラム缶に投げ込まれた書類に火がつけられ、三日三晩、延々と夜空を焦がしていたという。

人間だれしも、自分が行った非を直視するのはつらい。過小評価するか、早く忘れ去りたいと思う。

しかし、日本の歴史に大きな禍根を残したあの戦争については、思い出したくない陰の部分にも目を背けず、全ての事実を冷静に客観的に史実として捉えることが不可欠である。

「自虐史観」だと批判する人もいるが、何もいたずらに陰の部分だけに焦点を合わせるといっているのではな

い。どこの国の人と話しても、理解してもらえないような歴史認識が求められているということである。

最近、米国の有力紙、ワシントンポストにこんな記事が掲載された。

"Will Japan's habit of rewriting its history affect its future?"

と題する評論家の意見論文である。

「日本は過去を忘れ去るのに一所懸命だ」という書き出しで始まる論文は、表題にあるように、自分を正当化し歴史を書き換えるのが日本人の習性の一つだと見なしている。一部の偏った考えの持ち主だと思いたいが、これが世界の多くの人が日本に対して抱く印象だとすると、決して無視することはできない。

日本で戦争体験というと、自分たちがいかに悲惨な目にあったかという被害者の立場で語られる場合が多い。しかし、日本が諸外国に対して行った負の部分については、語られることが少ない。

戦争で亡くなった人の数について、原爆による死者を

含め日本ではおよそ三百万人といわれる。一方、近隣のアジア諸国ではどれだけ多くの人たちが、戦争の犠牲となって死んだのだろうか。

日本人は過去にあまり拘らず、百八十度急転換するのが得意技の一つのようだ。

江戸時代の末期、「攘夷論」で沸いていたのが、明治維新により開国すると、たちどころに西洋文化をあがめる「舶来信仰」へと変身。太平洋戦争で敗れると、「鬼畜米英」から一転して「アメリカ礼賛」へと早変わりするといった具合だ。

さて、今日声が大きくなりはじめている「嫌中、嫌韓」。熱しやすい日本で、何かささいな出来事を契機として、大事を招来する危険はなしとしない。

ゆがんだナシヨナリズム、ヘイトスピーチが、今日のネット社会では、これまでとは比較にならない早さで容易に拡散し、世論を作りあげる。異議を唱える者は、国賊、売国奴と罵られて、次第に声を潜めてゆく。

司馬遼太郎がある人との対談で、「日本人の精神は、一尺掘ると攘夷が出てくる」といつている。

ところで、最近、夏目漱石の『三四郎』を読み返してみたら、こんな一節があった。

汽車に乗り合わせた男が、三四郎に語りかける。

「いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですわね。……」

「しかしこれからは日本も段々発展するでしょう」と三四郎は弁護した。すると、かの男は、すましたもので「亡びるね」といった。

―熊本でこんなことを口に出せば、すぐ擲ぐられる。わるくすると国賊取扱にされる。

会話は更に続き、

「熊本より東京は広い。東京よりは日本は広い。日本より……」でちょっと切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けている。

「日本より頭の中の方が広いでしょう」といった。

「囚われちゃ駄目だ。いくら日本のためを思ったって、蟲屑の引倒しになるばかりだ」

想定外の後遺症

新井 良佑

昨年のお八月初め、駅前のレストランで昼食に好物のピレカツを一口噛んだ途端、ガクツと左上顎の辺でいやな音がした。ああ、慌てて食べるから歯が折れてしまったと思ひながら、手で左上顎の歯を一本一本触りながら調べた。しかし、折れた歯はなく、みんな揃っていた。また噛んでみると、やはりガクツ、ガクツとして左側の歯では噛めない。右側の歯で注意しながらゆっくり噛み、なんとか食べ終えることができた。しかし、家での夕食の時に、また同じことが起きた。翌朝、家人が掛かりつけの近所の歯科医院に行った。

歯科医に昨日の起きた状況を説明した後、すぐにレントゲンを撮った。歯科医は画像を見ながら、「虫歯があちらこちらに見えますが、歯には特に問題はないようですね」と言つて、口を開けさせ、歯を調べた。ミラーの柄でコッソ、コッソと一本一本歯を叩きながら、こ

れは痛いですかと聞かれた。はつきり痛いと感じられる歯はなかったが、何度か繰り返すうちに、前に虫歯の治療をした銀冠の大臼歯が少し痛みを感じたようだったので、「痛いです」と言つた。「原因はこの歯ですね」と歯科医が言い、この歯を治療することになった。冠を剥がし、台座を壊して取り去り、歯の芯に溜まった膿を入念に拭き取つた。消毒した後、詰め物をして治療が終わり、次回の予約を取つて帰宅した。

ところが、その夕方、いつものように夕食を食べべたしたら、ガクツ、ガクツと状況はまったく変わっていない。治療したのになぜだと思ひながら、手で歯を一本一本慎重に揺すつてみた。驚いたことに、一本の歯が二つに縦に割れていた。

歯科医院にすぐ電話し、状態を説明した。「痛みがあるなら今すぐ来てください。もし我慢できるようなら、明日でも、いつでも良いから来てください」と言われ、気持ちには悪かったが、痛みがなかったたので、明日の午前中に行くことにした。

治療台の上で横になっていると、歯科医は「どれどれ」

と言いながら歯を調べていたが、「割れていませんよ」と言う。「左の前の方の歯です」というと、「これは昨日治療した歯ですよ」と歯医者。治療した歯の少し前の歯を指で押さえながら、「違います。この歯です」と言った。突然、「あれえ、本当だ！ 割れてる、見事に割れてますね。生きた歯が割れることなどめったにない。本当に珍しいことですよ。交通事故に遭ったようなものですね。生きている歯が割れた症例は、この医院を開いてから十数年経つが、二、三例しか経験していません。死んだ歯が割れるのは良くあることです。生きている歯が真二つに割れることは滅多にないことです。本当に珍しいケースです」とえらく感激していた。

歯科医の感激とは裏腹に、「ちょっと待ってくださいよ。昨日、レントゲンを撮り、一本一本検査した上で、関係ない歯を治療した責任は誰にあるんだい。『珍しい、珍しい』と言って、自分の見落としを誤魔かすつもりかな。はつきり痛い歯を指定しなかった患者にも責任はあるが、治療をはじめた歯の治療費はどうなるのかな」などと、天井を向いて大口を開けながら、自問自答していた。

歯医者は、自分の見落としを挽回するかのようになり、縦割れた歯の片方でも残そうとあれこれ懸命に処置していた。しかし、すべてが徒労に終わり、結局二つに割れた第一小白歯を抜くことになった。

なぜ、このような珍事が起きたのか、原因をあれこれ考えていたら、一昨年三月に甲状腺腫瘍で左葉の切除手術を受けたことが思い当たった。四時間あまりかかった頸の切開手術であったが、全身麻酔だったので、何の痛みも感ずることなく終わり、術後もすぐに普段の生活に戻れたので、身体のダメージをほとんど意識することがなかった。しかし、このことで、手術で生きた歯が裂けるほどの激痛に身体が耐えていたことに思い至った。

これまで、「一度身体にメスを入れたら、元に戻るのに三年かかる」という旧知の外科医の話を格言として、手術を受けた知り合いに、くれぐれも自重するように忠告してきたが、この言葉の価値を初めて自ら実感した。手術後一年半以上何事もなく過ぎたが、気を引き締め直して日々養生に努めている。

寮歌を愛して半世紀

松浦 武弘

想う心を一筋に
交わらぬ男児

意気ぞ良し

私は旧制高等学校に憧れ、寮歌を好み、大学時代から寮歌を放吟し、詩吟を好んできた。

私は旧制高等学校の寮歌が好きで、学生時代より歌い続けてきた。一番好んで歌ったのが、第八高等学校寮歌「涙の壺」である。熱砂のパキスタン、カラチで、赤道直下のコンゴ（当時はザイール）、キンシャサで、極寒のモンゴル、ウランバートルで折に触れて紹介した。

実際には、左記五行（四行は一番と二番）を前置きの辞とし述べた後、三番のみを歌った。

第八高等学校寮歌『涙の壺』

アイン ツバイ ドライ！

涙の壺は深けれど 丘の三年の想い出に

去り行く児等が燦々の 涙溢れてとどまらず

ああ青春の感傷や 汝の命の儚くも

如何で忘れん現世の 儚き旅のオアシスよ

賢しき人と成るなかれ

暫しもやめよ世故の才

私は旧制高等学校に憧れ、寮歌を好み、大学時代から寮歌を放吟し、詩吟を好んできた。

一回生の一年間は黄檗の宇治寮で暮らし、二回生以降京都に移ってからは吉田寮で過ごし、旧制高等学校の寮歌を歌ってきた。剣道部に所属し、久留米絣に羽織を着け蛮声をあげる私は、友人達から右翼のアナクロニズムと蔑まれた。

私が好んだ寮歌は以下の如き寮歌であった。

三高寮歌としては「逍遙の歌」「琵琶湖周航の歌」「行春哀歌」「月見草」等であり、吉田寮・寮歌として「紫匂う」などがある。他にナンバースタールの寮歌として、一高「ああ玉杯に花うけて」「春爛漫の花の色」、二高「天は東北」、四高「南下軍の歌」「北の都に秋たけて」、五高「武夫原頭に草萌えて」、六高「北上記」「新潮走る紅の」、七高「北辰斜めに」、八高「涙の壺」「伊吹おろし」等である。

寮歌以外に、「北帰行」（正調）「アルト・ハイデルベルグ」等を歌い、詩吟を好んだが、数十人の宴席で、寮歌や詩吟に蜜声をあげると、座が白けて通夜ムードに成ることが常である。従い、披露するのは大勢の酒席は避けて、少人数の会席に限った。

昨年五月二十二日、経済学部卒業五十周年で京都に集い、夜はクラス毎にコンパを楽しんだ。

三十人余りが集まったが、全員七十才を超えて酒量も減っており、クラス会で初めて「涙の壺」を披露した。

大学に入学した昭和三十五年が安保闘争であり、卒業の三十九年が大学管理法案闘争で、学生運動に明け暮れた四年間であった。

当時の学生運動は主流派の社会主義学生同盟の書記長を北小路敏（京大同学会委員長）が務めており、経済学部は急先鋒であった。

クラス討議、学部集会、オルグ活動、デモ行進、インターナショナル歌、京大反戦自由の歌などの合唱に明け暮れている中で、蜜声を張り上げ寮歌を歌う姿は、多く

の学生の目に右翼の時代錯誤者と映ったであろう。

吉田寮コンパは、一年後輩の古松彬弘氏のご厚意で、二月の建国記念日前後の金曜日の夜、代々木倶楽部「たたらの間」で毎年開催しており四十年は経過している。

昨年の二月は突然の大雪に見舞われ、大変な不便を感じたので、小生の発案で、本年は五月十五日の昼の開催予定に変更された。

コンパの最後は、古松氏の「そろそろ歌いますか」の言葉を合図に、全員が肩を組み大円陣を作り、当番幹事の指示で京大之歌、寄宿舎寮歌「紫に匂う」「逍遙の歌」「琵琶湖周航の歌」「月見草」「行春哀歌」等を歌う。数十人の中で、歌詞を持たずに歌うのは、私一人である。

明治時代建造の木造二階建て寄宿舎吉田寮（北寮、中寮、南寮の三寮よりなる）は、三高の寮ではなく大学の寮であり、現存する日本最古の学生寮となっている。

日本の南氷洋調査捕鯨について

新山 章一郎

去年九月、日本の南氷洋における調査捕鯨が、IJC（国際司法裁判所）により科学目的のための捕鯨とは認められないという判決を受けた。それを受けてIWC（国際捕鯨委員会）が調査捕鯨をやめるよう勧告した。日本政府は、二〇一四年は自粛していた調査捕鯨を二〇一五年には再開すると表明する意向のようである。

鯨は古くから世界各地で食用として捕獲されていた。ところが、欧米各国では産業革命以降、捕鯨は産業用の鯨油の獲得のために行われ、大型鯨の乱獲により鯨資源の枯渇が取り沙汰されるようになった。おりしも、当時出版された海洋小説の名作『モビーディック（白鯨）』に描写された捕鯨の残酷な実態への衝撃、そして壮大かつ崇高なほどに叙述された英雄的に戦い滅びゆく鯨の姿への感動によって、鯨への信仰的ともいえる憧れと同情

が欧米社会に再起された。一連の日本調査捕鯨への反対は、その美しい鯨がかつての侵略国日本の捕鯨砲により無残に殺戮されている、こんなことが許されるのか、という狂信的な正義感が欧米人の間に広まっていることも一因だろう。

日本側の言い分はこうだ。日本では鯨は古代から食用に供されてきた。また鯨の胴体各部は寸分の無駄なく活用され、数々の工芸品等に加工されているので、欧米捕鯨のように体のほんの一部を利用するだけで、あとは捨て去るためにあの壮大な巨体を殺すのではない。そのため捕鯨技術も発達し、現在でも捕鯨産業に多くの人材が従事しており、各地の雇用創出に貢献している。更に鯨食はその地方の年中行事にも取り入れられ、祭りの際、鯨神輿も出ていたり、各地で年末の縁起物として食べられていたりして、一種の文化として定着している。ゆえにこれは守られるべき伝統である。更にクジラの頭数が実際に減っているのかどうか、また鯨による他の海洋資源への食害など、科学的に調査する必要があるというものだ。

この問題はすでに経済的な問題を越えて、地政学も巻き込んだものに発展している。まず日本は一世紀近く昔のことながら、その野望のために他国を武力で侵略し、数々の蛮行を働いた軍事国家、狂信的な体制国家として一時、世界の悪者と見られていた時代があった。

このイメージは、日本人はいざ知らず、世界にとつては強烈なものであつて、今でもことあるごとにかつての軍事国家の再来を危惧する国際世論が方々で起きており、日本もそれを気にしなければならない程のものである。

敗戦後、日本は民主国家として生れ変わり、その優しい、実直な国民性をみとめられ、戦争をしない東洋の紳士国として世界に受け入れられてきた。

その後、世代は変わり、現在の日本のイメージは、膨大な人口、領土を背景に覇権国家的な海洋進出を繰り返す中国のまえて、いざとなるとアメリカの袖の陰に隠れ、そつと辺りを伺いながらおどおどしている小さな苛められ国家というものになつたのではないかと思う。

強力な同盟国アメリカがあまり頼りにできなくなつた

今、その立場を守るために国際社会の心証に訴えることが必要となつた日本には、この軍事的には弱小で、大人しい、イジメられ国家というイメージは有利である。

一方、日本が現在消費している鯨肉の総量は年間わずか5千トン、国民一人にすれば、年間30〜50グラム。しかもその中で南氷洋の鯨の肉はわずか2割ぐらいという。それくらいは日本に任されている沿岸捕鯨で十分間に合う。それに鯨食が日本を代表する文化かというところ、ちょっと首をかしげたくなるのではないか。また、日本政府は、将来の食糧危機に備えて捕鯨技術の温存も必要だと言っているらしいが、鯨を殺すと言われているのに、その殺しの技術を温存するためという、わけのわからない屁理屈で国際社会を納得させられるとは思えない。

日本は南氷洋調査捕鯨などを再開すべきではない。なにも、この南氷洋にまで出かけて行って、世界の同情を集めている鯨を殺すなどということをして、日本が戦後七十年、それこそ耐えがたきをしのんで築き上げた平和愛好の紳士国というイメージをぶち壊すようなことなどして何のメリットがあるのか。

横浜下町探訪

松谷 隆

横浜といえば、日本を代表する横浜港に加え、中華街やみなとみらいなどを思い浮かべる方が多いことでしょう。スポーツファンにはプロ野球から高校野球、二〇〇二年の日韓W杯から横浜Fマリノスを始めとするJリーグなどへの思い入れもあろう。

こんな横浜で、気に入っている場所がある。出身地神戸の実家近くのアーケード付きの商店街と同じ雰囲気を持つ横浜橋界隈である。といっても、横浜市民ですら「どこのこと」と思うにちがいない。市営地下鉄の阪東橋駅のすぐ近く、全長三五〇米の横浜橋商店街を中心とする下町の一角の呼称である。

この商店街は通りの両側に約一四〇軒の店舗が軒を並べ、その六割が飲食店や生鮮食品などの食関係のほか、生活関連の店舗が多い昔ながらの商店街で、最近パチン

コ、スロットマシンのゲームセンターが増え、通行人も多く元気がある。

この界隈には名物が三つあった。そのうち現存しているのは二つ。まずは、商店街から五十米の『三吉演芸場』で、八十五年前に『貸席三吉』として踊りや義太夫など習い事の発表の場として開設された。一九七三年から、オーナリーの母堂の希望で大衆演劇専門劇場に替わった。徒歩で十分足らずの真金町出身の落語家・桂歌丸師匠の独演会が始まったのもこの頃だという。

大衆演劇は健康ランドやホテル、旅館でも見られる。しかし、「常打ち」と呼ばれる専門の劇場は今や全国で三十カ所たらずだ。が、三吉演芸場は最も歴史ある常打ちの一つとして、役者たちやファンに親しまれている。

三吉演芸場の八十年余りの歴史の中で、最大の危機は一九九〇年代に訪れる。娯楽の多様化による観客数の減少に加え、建物の老朽化のために廃業寸前に追い込まれた。そんなとき「横浜の大衆演芸を支えてきた演芸場をぜひ残したい」と『三吉演芸場を残す会』の会長として

立ち上がったのが桂歌丸師匠だった。

この会が横浜市を始め、有力企業、諸団体や地元商店街などに寄付を募り、約二千五百万円が寄せられ、存続となった。一九九八年に建替え工事が始まり、二年後客席二二〇余りの現在の姿になった。なお、この浄財の奉加帳は入口の奥、正面の壁に掲げられている。

次は商店街を通り抜け左折したところにある中華料理店『酔来軒』だ。一九四〇年に現店主の祖父が開店したという。料理は多数のブログで、「横浜B級グルメ」と称され、庶民的なメニューをびつくり価格で提供している。

その好例は店の名を入れた『酔来井』。これは発想の転換で生れたのではなからうか。ラーメンの汁と麺の代りに米飯を入れ、具と目玉焼きを載せ、冷やし中華のだしが付いている。これで四〇〇円とは驚きだ。ほかの料理もそれなりの味と値段で获得感充分である。また、横浜が発祥のサンマーメンにもかかわらずがあるらしく、今年二月末発行のタウン誌『横浜ウォーカーズ』に掲載と店主から聞いた。一度いかげすかね。

最後は、三吉演芸場での桂歌丸一門会だった。残念ながら、昨年十月三十一日の第一九四回で、四十一年の歴史に幕が下ろされた。昨年、七十八歳の歌丸師匠が入退院を繰り返し、仕事を選別された結果と聞いている。

この会を知ったのは、十一年前一月の『笑点』で、「月末で三十一周年、一四四回の『桂歌丸独演会』を開催」との師匠の宣伝を聞いたからである。高座は、師匠がトリで、真打三人と二つ目二人の弟子計五人と、外部から俗曲と前座での構成で、席料は三千円、最後までそのまま。コストパフォーマンスは二〇〇パーセント以上といえる。翌年五月、四人目の弟子が真打に昇格したのを機に『桂歌丸一門会』に改称され、俗曲がなくなった。

師匠の落語に対する執念、特に古典落語についてはさすがいいもので、落語界の名作、故三遊亭圓朝の『真景累ヶ淵』を作り直しての熱演には感動した。

今後は、師匠が落語会四人目の人間国宝に指定されることと、真打の五人の弟子たちの精進を楽しみに、応援すると共に、この界隈の一層の発展を願うものである。

志たかく 老婆心も忘れずに

橋本 政彦

今年は未年。善とか義、群という字は羊との因縁があります。羊はめでたく、性質が善いので、大勢と一緒に協同一致ができるので「群がる」という字が生まれています。私の年頭の思いはより深く、多面的に考える年に

したいというものです。せっかちで根気が足りない、自分に甘い性分なので、嫌な事、困難から逃げないで思えます。逃げればチャンスを逸し勿体ないことです。道理に適えば動く、一步踏み出してみることにしました。

そこで思い出すのは、吉田松陰の松下村塾で学び、奇兵隊などを創設し、長州藩を倒幕に導いた長州の高杉晋作（一八三九―一八六七）の「おもしろきこともなき世をおもしろく 住みなすものは 心なりけり」の句です。「世（ヨ）」の意味について、柳田國男著『海上の道』（岩波文庫）は「漢字の『世』をもって処理せられるようになってから、だんだんに永い期間と解されるように

なってきたが、本来は竹の節と節との間を『ヨ』と謂うのと同じ語で、ことに稲作の一期を限ってそういうことは、日本の方でも広くまた久しく（以下省略）」と記し、沖縄八重山地方で「ヨ」が稲の一生産期として使われていたことから、「ヨ」は本来稲作の一期間のことだと結論づけました。これが日本固有の「ヨ」の時間が漢字「世」の伝来で「ヨ」より長い時間を表す意味に転じ、現在も使われている経緯です。

高杉の格言には、「真の楽しみは苦しみの中にある」や、「人間と言うのは、困難は共にできる。しかし富貴は共にできない」などもあり、この意は、富貴は志とは反対の力である私欲に傾きがちであり、そこを忘れると団結が乱れるというリスクを指摘したのだと思われます。彼は「志を高くもって先ず一步を踏み出そう」の思いで人生を駆け抜けました。

この一月十七日は、阪神淡路大震災の発生から二十一年目の節目の年です。二十年前の一九九五年（平成七年）、この日の午前五時四六分に推定マグニチュード七・二、最大震度七の大地震が阪神・淡路地区を襲いまし

た。消防庁発表では、死者は六四三二名、家屋全半壊十一万七四八九棟。当時、ジャカルタ駐在員事務所で総務担当の私はこの大災害にジャカルタで対応しました。入社以来九年間の大阪勤務、マカッサル駐在へは一九七四年（昭和四九年）に大阪からだったので、関西地区に多くの友人が住んでいて、ずいぶん心配しました。事務所には被災地からの駐在員が四名いましたが、彼らの自宅や親族に大きな被害がなかったのは幸いでした。海外との通信網が今のように整備されておらず、正確な情報の収集には苦劳しました。二十年後の今も避難住宅に住む高齢者の方々の孤独死が報じられ、大災害の復興の難しさを思い知らされます。

内閣は、その前年六月に発足の自民、社会、さきがけの三党擁立の村山内閣でした。政府や国の機関が、直接に被災地域の情報を収集する手段、非常時の対応、内閣総理大臣等への通報体制も未整備でした。国会の首相答弁には「何分初めての経験でして」の回答が多く、情報収集手段がなく、関係官庁の情報の集約も不十分でした。これを契機に「国家の危機管理体制」の整備が始まりま

した。法律が不備では政府も迅速に動けません。日頃から物事の規範や原則を点検して、不備を修正、万全を期し、その内容を熟知しておく。「これで安心」ではなく、さらに一歩進めて考える「老婆心」が大事です。

伊藤肇『帝王学ノート』では、老婆心について曹洞宗開祖、道元禪師が高弟の懷契には印可を下ろし、同じ高弟の義价には何故か印可を下ろさなかったというエピソードを説明しています。懷契は義价に印可が下りないのを苦にし、禪師に「何故お師匠様は、義价に印可を与えられないのですか」と訊ねますと、道元は「あれはよくできる。けれども老婆心が足りない」とおっしゃられ、義价に「これから先も常に老婆心を心がけよ」と遺言されます。才智、技能にすぐれているのは望ましい。でもそれだけでは失格で、人として至るには、人に真心を尽くす。世間からうるさがられるほど思いやるのが、大切なのです。学問にも、この老婆心が大切です。老婆心とは人ごとでなく親身になって徹底する心がけです。気高い志に老婆心、そして道理に適い行動すれば人生の祝福を味わえることでしょう。

「後期高齢者」への仲間入りにあたって思うこと

羽田 壽夫

本年一月八日に小生七十五歳となり、いよいよ後期高齢者へ仲間入りした。小生の『悠遊』への執筆は平成十五年・『悠遊』十一号「横浜黒船研究会のことども」、平成十七年・『悠遊』十二号「椎谷藩駅通方文書」、平成二十六年・『悠遊』二十一号「卒業五十周年記念長崎旅行」に続いて四回目である。今回は少し趣を変えて、後期高齢者への仲間入りを機に、最近気になっていることについて述べてみたい。

昨年八月に、マレーシア・クアラルンプールからインドネシアに転勤した娘夫婦宅を、現在勤務先のある静岡県在住の次女夫婦一家四人を伴い再訪し、八ヶ月ぶりの一族再会を果たした。小生宅は既婚の娘ばかり二名であるので、このままで行くと、家伝によれば秦の始皇帝より二千三百年も続いている当家の歴史も、小生の代で終



了となる気配だ。これを何とか出来ぬかとの思惑から、孫息子三人のうちの誰かが娘の婚家ではなく、小生の養子となって、羽田家を継いで貰いたいという小生の考えを話すことも目的の一つであった。

小生の家には、他の人々には全く価値がないものの、家の歴史が染みこんだガラクタがかなりある。小生としては羽田家を継いで貰える孫にはこれらをそっくり引き継いで貰いたいから、それを収納するための家屋も相続して貰う必要がある。このため相続人三名、すなわち、長女、次女、養子となる孫（希望的）の三者への相続の考え方を小生死亡前に、遺言書に明記し両娘夫婦に開示して置きたいと考えている。

長女の息子は平成十四年（二〇〇二）生まれで十二歳、次女の息子は平成二十年（二〇〇八）と平成二十三年（二〇一一）の生まれで、六歳と三歳である。いずれにしても、彼らが自分で、自分の将来を決められる年齢になるまでには未だ相当時間がある。

小生の父は八十九歳まで生きたので自分もその年まではと考えているが、その年には、羽田家の跡継ぎ候補と考えて居る孫たちも、それぞれ、二十六歳、二十歳、十七歳になる。その頃、この話はどうな決着を見て居るであろうか。些か興味津々なところがある。



七十歳代をどのように生きたか

上原 利夫

昨年私は八十歳になった。五十八歳のとき、年輩の女性Aさんに運勢をみてもらった。支柱推命を基本にまず私の過去を語ってくれた。よく当たっている。その後はどうか。六十代については要点を語り、七十代は触れずに、八十代は社会貢献をすと言った。

六十二歳から五年間、監査役制度を大学院で研究し、法学博士になった。教職に就いたが、七十歳が定年。孔子のように「七十にして心の欲する所に従うて、矩をこえず」が、私に当てはまるかどうか。

六十九歳から腰痛予防のためプールで歩いた。このスポーツクラブに音楽教室が出来たので入門し、イタリア歌曲を習った。五年ほど経ったとき、男性コーラスに誘われ参加した。独唱より気楽だし、ハーモニーを楽しめる。病院や老人施設へ慰問に出かけることもある。

ほぼ十年経った七十九歳のとき、友人の協力があり、

山梨県韮崎市長から次のような感謝状をいただいた。

—あなたは楽曲『山恋しくて 鳳凰三山』の本市への提供に尽力され、歌を通じて観光振興に寄与されました。本日ここに市制施行六十周年記念式典を挙行するにあたり深く感謝の意を表します。平成二十六年十月十二日—
歌の経験の浅い私にとり、光栄であった。

この式典の舞台で、「山恋しくて……」を二重唱で歌った女性二人と私は同じ会社で、鳳凰三山にも登った仲間。歌はその頃の作品だが、聴いたのは二年前だった。

尾瀬の「夏の思い出」のように多くの人に歌って欲しい。韮崎市に働きかけたら、夢が適った。毎年四月第三日曜に、茅が岳の麓に市が造った深田記念公園で、鳳凰三山を仰ぎながら歌われることになった。『日本百名山』の著者、深田久弥を偲ぶ深田祭が永遠に続けば、Aさんのご託宣どおり、社会貢献ができる。

七十歳代における南アルプスとの縁はもう一つある。

「南アルプス市芦安山岳館」に、わが一橋山岳部OB会・針葉樹会が寄贈した約五百冊の「針葉樹文庫」である。

昭和十二年一月の厳冬期に、北岳バットレスを初登攀

したわが先輩の記録が文庫に収録されているのを、山岳館の塩沢館長がご存じだったのが幸いした。そのお礼も兼ねて、山岳部創設九十周年事業として夜叉神（ヤシャジン）峠周辺の登山道の整備に協力した。夜叉神峠と鳳凰三山は、こうした努力で私の思い出の山になった。

晴れがましいことは自慢話になるが、古希の前後に、家族の絆が崩壊しそうな時期があった。原因は不動産バブルである。バブル期を知らない五十代に、銀行融資で賃貸マンションを建てた。この副業はバブル期に経営不振となり、家族を心配させた。返済までの余裕資金を子供の学費や私の車とゴルフ代に使ったので、改装費の捻出が難しくなったのである。一時、土地が暴騰したとき、マンションの一棟売りを考えたが、家族を襲いかねない災いを姉に諭された。バブルが落ち着いてから手放したので儲けはなかったが、倒産は免れた。

バブル期の経験は、私が日本経営倫理学会に入会してから役に立った。大学一年の時に興味を持ったのは、哲

学と倫理学であったが、実践で学んだ渋沢栄一と伊庭貞剛は、道徳観の優れた素晴らしい事業家であった。こういう事例を通じて、東洋と西洋の倫理観を勉強した。学会で理事や研究部会長を歴任したが、バブル体験で一度剥けていた。Aさんが私の七十代をスキップしたのは、未曾有のバブル経済を読めなかったからではないか。

東日本大震災の一年前、家内が難病の「重症筋無力症」に罹り、神経内科、神経外科を合わせて百日間入院した。病の原因は、精神的な圧迫のような気がする。老後に備え、簡便なマンション住まいを試みたとき、友人が少なく、気分が滅入ったようだ。息子が外国へ移住することになり、息子に貸していた旧宅へ戻ったら、近隣の仲の良い友人が元氣付けてくれた。大震災後、末娘が結婚し男子が生まれた。傘寿、喜寿を迎えた我々に、生きる楽しみができた。旧宅であと二十年健康で頑張ろう。

健康状態は、後期高齢者にとって大事なことである。食費より医療費にお金がかかりそうである。最近、テレビ番組が面白いので、外出が減ってきた。

文章創りMYWAY

西川 武彦

筆者の少年時代の綽名は、「ギッチョさん」。不器用な左ギッチョというのが謂れだ。

幼少の頃、母親の特訓で、箸と鉛筆は右手に替えさせられたが、そのせいかペンで字を書くのは苦手である。指先に力が入ってスムーズに筆が進まないのだ。強く握りすぎて、指の皮が剥けることもあったから情けない。

中学生になって英語を習い始めると、なぜか横文字は日本語より書き易いではないか。高校時代には、文学青年でもないのに、英作文のコンテストに応募して入賞したりしていたから、文才の欠片ぐらいいはあったのかも…。

英語に熱中して、他の科目はお留守にしていたから、国立大学はままならない。浪人中に、友人に誘われて見学に行ったICUで、外国人を交えた男女学生が、日本離れたキャンパスで興じる風景に一目ぼれして入学した。単純なのである。

一年生をFreshmanと呼ぶ同校では、当時授業の半分以上は英語だった。読み書きに加えて話す方もそこそこできるようになる。卒論を英語で書き上げて卒業すると、迷わずJALに入社した。

英語ができるのが重宝がられて、最初から現場の国際部門に配属された。入社して間もなく、英文タイプをほぼマスターしたが、本社に転じて係長になる頃には、企画書・業務連絡書等々、堅苦しい文書を日本語で手書きするという苦痛が待ち受けていた。

周りにいる右利きの秀才たちは、長い文書をすらすらと流れるように書くのに、こちらは倍以上の時間がかかる。疲れる。与えられた時間は限られている。焦る。

知恵を絞った結果、彼らが三枚で綴る内容を一枚に凝縮するコツを習得。頭の中であれこれ必死に練り上げながら、汚い字で起承転結をメモ書きする。最後は、エキスだけを分かり易く短く纏めるのだ。苦労したが、この技術は、のちに作家もどきになった時の文章創りでも威力を発揮しようだ。

余談だが、通訳もやらされた。カバン持ちで海外に出

張、外国航空会社との交渉事に臨む。

当時のお偉方は、英語の読解力は抜群なのだが、概して喋りが伴わない。「ふにゃふにゃ、というわけでありまして、そのところをなんとか酌んで頂きまして、こんなところでいかがなものか……」などと、日本語で言う。

メモしながら必死に通訳すると、時には横から脇腹を突かれる。「君、それは違うよ、僕の言いたいことはだねえ……」と、仰せられるのだ。交渉事は、先般の日中首脳会談の合意文書のように、「同床異夢」で収めるところがままあるから、なにかと知恵がいるのだが、とにかく、上司の含みの多い日本語は難しかった。閑話休題、中間管理職の時代にワープロが登場した。そうすると、英文タイプで鍛えた技が冴えた。ローマ字のキーを操り、英語も日本語も下書きなしで打ち込んだ。

現役最後の仕事は、機内誌の制作だった。日本語に加えて英語版もある。筆者はトップだったが、小さな会社だから、編集企画の指揮者でもあり、たまには原稿も書いた。その頃登場したパソコンを、秘書から丁寧に教えて貰った。十本の指をフルに活かして、英語や日本語

を綴る。ひらめくままに叩き、修正・削除を繰り返して原稿を完成させる。冗長な表現は極力省くという習慣も助けてくれた。俄然文章創りが楽しくなった。

書き溜めたエッセイを、ご縁があった出版社から上梓したのもその頃である。作家もどきの誕生である。

卒サラすると、当ペンクラブに入会した。「何でも書こう会」で揉まれながら、エッセイに加えて、掌編小説も書き始めた。書き上げた小説は五十編近くある。

小説も、書き溜めたメモを素材に、下書きなしで、いきなりワープロで書き下ろす。パソコンだから、消したり、挿入したり、直したり、ルビを振ったり、自由自在だ。油絵は、自在に色を塗り重ねながら、芸術品を創り上げるらしい。それと同じといえるかもしれない。

同じ要領で、最近翻訳の面白さにも開眼した。

……というように、怪しげな小説やエッセイなど、たまには文学賞に入選したりして士気を上げ、恋人のパソコンを愛し撫ぜながら、文章創りをMY WAYで楽しんでる。手書きのメモが汚くて読めないなど、連れ合いの苦情・文句を忍びながら……。

老人ホームで思うこと

吉 寄 清 己

昭和四十年代のこと、私の母は脳梗塞で寝たきりになった。私ら夫婦は小さな社宅に母を引きとり、亡くなるまでの三年間、妻が世話をしてきた。明治の母は、わが子を一人前に育てたのであるから、子は親の面倒を見るのは当たり前と言う。父も同様に六ヵ月間世話をした。

ピンピンコロリは理想であるが、そうはいかない。いずれ老人は病になり、寝たきりになる。昨今の若夫婦や中年夫婦は共稼ぎである。夫人つまり息子の嫁は外に働きに行くから、家に寝たきりの親がいても、介護は不可能である。今や専業主婦なる妻はいないのである。

子供を産まないから、介護してもらえない子のいない老人、お金がなく介護付老人ホームに入所できない老人、そして寝たきりになった男やめや老女たちは増えていく。国や自治体が面倒をみるとすると、多くの税金が必要になるだろう。

昨年、私は整形外科の手術を受けて要介護2に、妻は脳梗塞により要介護1に認定され、私らは週に一回のリハビリに通っている。私は九十歳、妻は八十三歳。いつ寝たきり老人になるかも知れない。そのときどうするか。もつとも心配してくれる二人の子は既に六十歳である。長女と長男は、私らに老人ホームへの入所を勧めてくれた。私と妻は大和ハウス㈱の子会社社が経営する熱海市の介護付有料老人ホームに入居を決めたのである。入居金は三四四〇万円、二人の月費用は二十五万円である。

最近ちょっとしたことにも我慢ができない若者は増えている。イライラから親を殺すバカ息子を、TVは報道している。生きることには耐えること。屋久島の自然の森の生存競争をみると勉強になるだろう。

屋久島は花崗岩の隆起した高さ二千メートルの島である。年間一萬ミリの雨が降るから、土砂、腐葉土は流され、島は岩石で累々としている。木の根は岩の表面に露出し、岩にはり付く。高さ二十メートルもある木の幹の内部は腐り、空洞になっている。巨木は空いっぱいに葉を広げているから、木の下はうす暗く、そこは苔しか生えない。巨木

が腐って倒れると大きな青空が開き、太陽光は、下に差し込む。待つてましたと、倒木を栄養にして新芽がびっしりと吹く。しかし、ここは巨木一本のスペース、木の生長と共に弱い木は枯れ、強い木一本が生き残る。自然の掟である。

南太平洋のフィジー、ビチレブ島の東の沖合に、幅一〇〇〇^{メートル}、標高五^{メートル}足らずの小さな島トベルアがある。屋根をヤシの葉でふいたりゾートホテルがあつて、ニユージーランドやオーストラリアから白人夫婦が子供を連れて保養に来る。島には、電気、TV、電話がない。食事は、木筒を叩いて合図し、客はレストランに集まる。メニユーはあらかじめ好みを予約しておく。子供たちは、島にある海水プールで一日中遊び、日のある明るいうちに夕食を済ませ、日没とともにベッドに入る。親たちは、ろうそくの明かりのもと夕食をとり、会話を楽しむ。夫婦は一日中海を眺め、赤い夕陽をめぐる。変化があるのは潮の満ち引きのみ。このような雰囲気なのか、白人家族は一ヵ月もいると言う。息抜きのために。

息抜きにフィジーに行かなくても、農作業や庭仕事を

すれば心は癒される。神奈川の大磯、こゆるぎ浜にある明治の元勲たちの旧別荘地は、海岸に沿って海拔二十^{メートル}の高台が続く、津波に侵される心配がない。退職した老年夫婦たちは、別荘地の分譲地に家を建て、芝生と花を植え、盆栽を楽しむ。ガーデニングはもっぱら奥方の仕事で、旦那は濡れ落ち葉、ゆったりとした生活を楽しむ。しかし、奥方が寝たきりになったとき、どうするか心配であると私に語ってくれた。

私と妻は老人ホームの温泉を楽しみ、週末は大磯の家に帰る。野鳥とモグラを友に、雑草とりである。

熱海の中から出てくる清水を半径五^{メートル}、深さ二^{メートル}のタンク二基に流入し、水は海水に加工、ふぐとひらめをそれぞれに養殖する。必要な電力は大量にある落葉を原料に微生物発電で確保、そして魚の餌は、合成し易いメタノールを微生物に食べさせ、増殖する微生物体内のたんぱく質を与える。このような夢をみている。

微生物発電およびメタノール由来微生物飼料は、私が岐阜大・応用生物科学部へ研究支援しているテーマである。

七十年 日本の平和

大越 浩平

海軍鹿屋航空基地から『桜花』が出撃した。火薬の詰まった胴体にはエンジンと翼のみ。車輪も無く、操縦かんが付いている機体。親機に高度六千^{メートル}まで持ち上げられ、あとは落ちるだけの人間爆弾。若者には志願の選択しか無い。国民はそれを桜の散り際に例えた。

沖縄では国内初の地上戦、全国各地の空襲、広島、長崎の原爆投下。国民は肉体的にも精神的にも疲弊しきっていた。日本は無条件降伏、敗戦して終戦、国民は悲憤慷慨しつつも、空襲の恐怖や、隣組、国防婦人会、憲兵の目から見張られている鬱陶しさから解放されて、ほっとした。

脱脂粉乳を貪り飲み、パン文化に驚き、D D Tをしらみ頭にかけられて痒さから逃れ、F E N放送からは西洋音楽が溢れ流れた。闇市ですきつ腹を慰め、物々交換で日用品を求め、国民は貧困からの脱出に一斉に走り出す。

戦後初の正月に、並木路子の「リングの唄」がレコードになる。赤いリングに唇よせて だまって見ている青い空……。敗戦直後のこの歌詞に、赤いリングに日の丸や天皇を、青い空にアメリカを感じた人もいた。国民は貧しくひもじい中で西洋文化を夢中で吸収し始めた。

昭和二十一年十一月三日、日本国憲法が公布された。日本国憲法には、米国が日本を戦争の出来なくする国にする、野蛮な日本に西洋の進んだ文化を導入する、民主主義を教え込む、米国の属国として管理し米国益を担保する等の意図のあったことは、戦勝国として当然のことだ。その憲法九条に国民は強く共感し反応した。

マッカーサー元帥が失意のうちに帰米した際、元帥が憲法で日本に与えた婦人参政権、主権国民は、戦前には考えもつかなかった贈り物だと受け止められた。天皇制の維持やソ連による国土分割の阻止などに、国民は素直に感謝の気持ちを込めて彼を送別した。

今年（昭和七十年）は敗戦後七十年、日本に平和な七十年が続いた。

中国にとっては対日戦勝七十年、韓国にとっては植民地支配からの解放七十年だ。

安倍政権が危ない。日本の岐路だ。七十年間海外で武力行使（戦争）が出来なかった「日本の平和」を変えようとしている。特定秘密保護法で国民に言論統制の圧力をかけ、集团的自衛権の行使を容認する閣議決定で、米国と共に軍事行動と海外派兵を可能にし、戦争の出来る国を目指し、さらに改憲の動きを本格化している。

戦勝国に与えられた憲法だから、自分たちで憲法を作ろうとか、世界の現実には合わないので憲法を改正しよう等の声が出ている。

確かに与えられた憲法だが、国民はこの憲法の問題で七十年間、西洋経済、文化を懸命に学び、日本国民の肉体と精神に咀嚼吸収された。日本人には異文化を自家薬籠のものにする二千年の歴史がある。憲法はもはや与えられたものではない。

日本は戦争しないと世界に宣言し、どこの国の戦争にも参加できなかったおかげで、日本に悪意を持つ国は少なく、敗戦の廃墟から立ち直り経済大国に発展した。

大規模な戦争が起これば、原爆の恐怖にさらされる。原爆を落として報復が始まれば人類は滅亡だ。世界はそれを知っている。今こそ憲法九条の精神を世界に拡散する事が、原爆を二度経験し、水爆に被災し、自国の原発事故でメルトダウンを経験し、放射能の恐怖を存分に知っている日本国民の人類に対する役目だ。

使用済み核燃料や放射性廃棄物の処理場も無いのに原発の再稼働や原発の輸出を推進する。軍需産業を振興し、武器を輸出する。日本の武器で撃たれた他国民は、日本を敵国とみるのは当たり前だ。これでは世界の平和は益々遠くなる。戦後七十年続いた「日本の平和」を守らなければいけない。現代の戦争は軍人対軍人の戦線での戦いだけではなく、いかに相手国の民間人を自爆やロボットテロで、所構わず多く殺すかだ。

「日本が世界の中で安定した平和で健全な国として、近隣諸国はもとより、できるだけ多くの世界の国とともに支えあって歩んでいけるよう願っています」と述べられたお言葉をかみしめる。

ふれあつた異国の人達

木村 敏美

今年、私は古希を迎える。八月生まれだが戦後派ではない。ここまで何とか夫婦、子供達と生きて来られたことに感謝である。振り返ると想定外の多い人生だった。

その中でも、外国の人達とふれあえたのは、嬉しい想定外だった。九州の山奥で育ち、内気で社交的でもなかったたので、自ら求めた訳でもなく、どれも夫の仕事や趣味の関係での出会いであつた。

最初のきっかけは、三十年ほど前、夫の海外転勤でマレーシアに住んだことから始まった。そのときインド人教師夫妻に英語を教えてもらい、家族同士で交流するようになった。家に招かれ、初めて食べたインドの家庭料理やお菓子は、日本で食べたことの無い味で、沢山の香辛料が使われていたので、その種類や料理方法等も教えてもらった。

家族は長老の父親を軸に、養子の男の子や障害のある人もいたが、いつも明るく全員で歓迎してくれた。何気ない会話で盛り上がり、こんなに顔立ちの違う異国の人達と笑い合うときが来るとは思ってもみなかった。

十年程前、息子夫婦とこの一家を訪ねたことがある。二十年程のブランクはあつたが、当時と変わらぬ手作りのお菓子で歓迎してくれ、庭には愛用している日本車があり、再び温かい思い出ができた。

次の出会いは、夫が現役の頃、日本に留学している学生達と交流するボランティア活動に参加していたときのことである。その時知り合つた中国の女子大生が、定年退職したばかりの夫の元勤務先に就職したことが偶然ながら、交流が始まった。

夫は定年後の夢だった畑作りを小高い山の上で始め、傍に小さな山小屋を建てたが、そこを彼女も気に入るべく来るようになった。畑には彼女専用の畝も作り、野菜の収穫を共に喜び合つた。中国から両親もみえ、山小屋で沢山の水餃子を作ってくれたことも思い出深い。

昨年、日本人男性と結ばれ、只今育児奮闘中である。一段落すると企業に戻り、中国と日本の架け橋となつて再び活躍するだろう。流暢な日本語を話す彼女は感性も似ていて、いつも外国人であることを忘れてしまう。

次の二つの出会いも夫の在勤中で、仕事関係で知り合った人達だ。同じ日系企業に勤めるカナダ人で、日本に出張して来たとき、夫が休日に観光案内をしたことで交流が始まった。旅行中ビデオを撮り、編集して、お土産にしたことが嬉しかったらしく、その後も手紙を出し合った。彼は誰もが認めるジェントルマンで品格があった。

夫の退職記念にカナダ旅行をしたとき、勤務後に二時間ほど車を飛ばして、夫婦でホテル迄会いに来てくれた。山小屋の近くに畦道に咲く彼岸花の写真を二人に見せると、美しいと感動していた。六十五才が定年の彼は、その後湖の近くに別荘を持ち、ウッドデッキは彼の手作りで、木工の趣味と自然を愛する気持ちは夫と変わらなかった。

もう一つの忘れられない出会いは、企業研修でイギリス人学生を会社で受け入れたことがあり、担当した夫は交流を深めようと、彼を家に招待した。そのとき、彼は自ら祖母との面会を求め、畳の部屋できちんと正座して挨拶した。カボチャのスープを出すと、とても喜んでくれた。

研修を終え帰国した後、お礼の手紙も来て、彼の礼儀正しさと真摯な態度には胸を打たれた。その彼は、今、日本企業で働いていると風の便りで知った。心から応援したい。

幸い、平和な時代に生きることができ、何かの縁で出会った人達は、アジアの人も欧米の人も皆温かかった。想定外の異国の人達とのふれあいは、どれも心に残り、大切にしたいことばかりだ。

之を楽しむ者に如かず

藤原 道夫

少々古い話になってしまいが、私の趣味に関わることで、貴重な体験をしたことを思い出しながら書き留めてみたい。

二〇一二年五月二四日頃の新聞紙上で、音楽評論家吉田秀和氏の訃報に接した。享年九八歳、急性心不全で斃れる前日まで原稿の校正に当たっていたとか。氏のこと、新聞紙上の音楽評論記事や単行本『モーツァルトを求めて』などを通して随分昔から知っていた。何とも言えない品位のある表現法を駆使した巧みな文章に引き込まれ、深い洞察力に感動を覚えながら読んだことを思い出す。七月九日に氏とのお別れ会がサントリー・ホールで行われることを縁のあった方から聞き及び、また新聞紙上にも案内が出たので、参加希望のハガキを出したところ、間際になって入場券が送られてきた。

当日、皇后陛下が臨席され、NHKアナウンサー桜井

さんの司会で会が始まった。前半はヴィジュアルを使つて縁ある方々の話があり、鎌倉の自宅で晩年を過ごす吉田氏の生活ぶりが紹介された。会主の丸谷才一氏は、病氣療養中だったのか、ヴィジュアルでの挨拶だった（氏はその年の暮れに亡くなられた）。

後半は、吉田氏が手塩にかけて育てた水戸室内管弦楽団による演奏。弦楽器奏者が揃うと、手術後休演宣言をしていた小澤征爾が静々と現れ、「G線上のアリア」（J・S・バッハ、G・マラー編曲）を指揮した。続いて管楽器奏者が加わり、準・メルクル指揮により「ジークフリート牧歌」（R・ワーグナー）が演奏された。これがしみじみと哀愁を伴って響きわたってきた。吉田氏に実にふさわしい演奏のように思えた。演奏は拍手もなく静かに終わり、閉会となった。席にしばらく座ったまま余韻を味わいつつ、今後も音楽にしっかりと耳を傾けていこうと思いを新たにした。

後日「ジークフリート牧歌」のCD（朝比奈隆指揮、関西フィルハーモニー）を入手し、折に触れて聴いてい

る。あの晩のことを思い出させるしみじみとした演奏だ。その年の夏に、メトロポリタン・オペラのライヴ・ヴェーリング（実演の映像）で「ワルキューレ」と「ジークフリート」（R・ワーグナー）を見た。いずれも休憩時間を含めて五時間以上にわたる長丁場の楽劇、感動的な場面が続き、まさに魅入られた演奏だった。秋には、吉田氏が鼓舞激励してきた庄司紗矢香の演奏（ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタNo.10など）を聴く機会があった。今や世界的な若手ヴァイオリニストとして活躍する彼女のしなやかで光沢のある音色にここ数年来魅せられている。

後日、吉田氏による論評を定期的に掲載していた月刊雑誌『レコード芸術』に、氏の追悼特集が組まれ、昔の論評も取りあげられていた。あるところで吉田氏は述べている。

「『音』は音楽の生命である。しかもその生命は一瞬にして消える。何とはかないことだろう。だから、私たちはそのはかないものの生命を大事にし、こよなく愛する」

また「之を楽しむ者に如かず」とも（原文は勿論『論語』）。音楽を聴くことは私の生活の重要な一部だ。今思う、吉田氏の言葉を胸に刻みつつ、バッハやワーグナー、加えてブラームスなどの作品を中心に、音楽をしつかり聴きながら楽しみを深めて行きたい。吉田さんのお別れ会に参加することにより、門外漢の私も心に残る贈り物を頂いたような気分を味わった。それは褪せることなく今に残っている。



我が心のキリスト教

平尾 富男

小学五年生のころ、北海道の親戚が送ってきたクリスマス・プレゼントに添えられた絵葉書。そこに描かれていた磔刑のキリスト像と聖書の言葉「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ伝二三章)が、キリスト教への「洗礼」だった。

小学校を卒業してミッションスクールに入ると、「汽笛一声新橋を」で始まる鉄道唱歌のメロディに乗せて「マ〜タイ・マコ・ルカ・ヨハネ伝、使徒・ロマ・コリント・ガラテヤ書」と、新約聖書の福音書のタイトルを暗唱するようになる。

中高一貫の男子中学校では、毎朝の礼拝と、週に一時限の「聖書の授業」があった。日曜日には、幼馴染の女の子が通っていることを知って、近くの教会の日曜学校に行き出し、少しずつ聖書にも親しんでいった。

日曜学校だけでなく、学校でも週日賛美歌を歌わされる。なかでも、最初に覚えた賛美歌三二〇番の『主よ御許に近づかん』は大好きになった。アメリカから派遣されてきていた宣教師からは、英語の歌詞(“Nearer, My God, to Thee”)も教えて貰った。

この賛美歌は、一九一二年の豪華客船タイタニック号沈没の際に、沈みゆく船の甲板上で同船の専属楽団員が、パニックに陥る乗客を落ち着かせるために演奏したという。このエピソードは、映画『タイタニック』でも描かれたので、日本でも広く知られるようになったが、当時の中学生は知る由もない。

日曜学校でこの賛美歌を歌うときには、斜め一列前に立つ幼友達の気を引こうと、一段と声を張り上げたものだ。以来この三二〇番を聞いたり歌ったりする度に、何故か胸にジーンと来るものを感じるようになった。

高校に進学して大学受験の準備に日々を過ごす頃に日曜学校からも淡い恋からも遠ざかる。洗礼を受けてクリスチャンになる気持ちはまったくなくなっていた。

大学では、英語の授業の一コマで「英国教会史」を受

講したが、これは専ら英文学や歴史への理解を深めるのが目的だったから、信仰への傾斜は起こらない。

社会人となってニューヨークに駐在して間もない一九七〇年代の初め、ロックミュージカル『ジーザス・クライスト・スーパースター』を、ブロードウェイで観たときの驚愕と感動は今でも忘れない。

セリフも語りもなく、音楽と歌だけで物語が進行する斬新な演出。キリストの最後の七日間の苦悩と、裏切り者ユダ、イエスを愛するマグダラのマリヤが織りなす愛憎劇を観たその夜は、興奮の余り一睡もすることができなかった。マリヤを演ずる美しいアメリカ人女性と、心に染み入るその歌声に、魂を奪われてしまったのだ。そこには、中学生のころに賛美歌を歌いながら、想い描いた聖書物語とはまるで違う世界が広がっていた。

新約聖書はキリストの言葉や奇蹟を、弟子たちがキリストの死後に当時の日常語ギリシャ語でパピルスに書き遺したもの。新旧の聖書は書物としてはそれぞれ別のものだが、新約の中には旧約から多くの引用が認められる。旧約で預言されたことが、新約の時代に実現していると

いう記述が随所にある。両者の関係は深いのだ。

新約の最初の三つの福音書、マタイ・マルコ・ルカでは、イエスの生涯の一部が、似たような視点・筋書で展開されるため、「共観福音書」と呼ばれる。

三つの福音書に比べて思想・神学がより深められ、イエスを神であると明示しているのがヨハネ伝。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった」で始まり、旧約聖書の創世記の世界観を引き継いでいることが分かる。

最古の日本語訳聖書ヨハネ伝の出だしは、「ハジマリニカシコイモノゴザル」だった。この聖書は、プロテスタントのドイツ人宣教師によつて、一八三七年にシンガポールで印刷・発行された。現代版聖書の「言（ことば）」が「カシコイモノ」だったり、如何にも時代を感じさせる「ゴザル」が面白い。

今、孫に囲まれ古希を過ぎた年齢になつても、「マタイ・マコ・ルカ・ヨハネ伝……」を口ずさむと、甘酸っぱい中学生のころを思い出す。

「神よ、私を赦し給え。もう何もわからないのです」

格安の風景

三 春

昨年十月、LCC (Low Cost Carrier = 格安航空会社) を利用して沖縄に旅行した。LCC初体験である。空港建物からバスで移動して、タラップを登る搭乗スタイルが懐かしい。まるでVIP専用機? 連想したのは一九六六年のビートルズ来日。はつぴ姿でタラップを降りてきた光景だ。

子供の頃は、田舎から親戚が訪ねてきたら案内先は羽田空港と決まっていた。庶民には飛行機そのものが憧れ半分・恐怖半分で、料金的にも高嶺の花の時代。それが今や飛行機は速くて安い庶民の足となり、逆に新幹線の料金が法外に思えてくる。

IATAカルテルの崩壊、原油価格高騰による経営悪化、インターネットでの直販が、価格引き下げ競争を生み、欧米で乱立した格安航空会社は次第に淘汰された。東南アジアでは、急激な経済成長に伴って一九九〇年代から

航空自由化が進んだが、日本で外資系LCCに続いて国内LCCが誕生したのはつい先ごろ、二〇一二年のことだった。

徹底したコスト削減が話題になり、「安全性も削減?」と警戒されてか、特に中高年は敬遠していたようだ。実際、学生やOL、幼い子供を連れた若い家族が多く、どうやら私が最長老。費用は往復航空運賃とホテルつき食事なしの二泊三日で基本料金一万円台。これにホテルのランクアップその他のオプション料金を上積みしても二万円台と激安だ。

空港のカウンター前には待合用の椅子が三〇脚ほど、しかも数社共同である。機内に娯楽サービスはないが、沖縄までの三時間なら読書にちょうどよい。弁当持参の旅慣れた人もいれば、メニューから選んでその場で支払う人もいる。座席の狭さも大手のエコノミーとほとんど変わらない。飛行時間の長い海外旅行なら、LCCのビジネスクラスを選んでワンランク上の設備とサービスを受けるほうが賢明だろうが(それでも従来の半分程の金額)、国内旅行ならこれで充分。回転寿司や立ち食いフ

ランチに群がるように、シンプルで実用的な低料金が人気で、この日も満席だった。

嘗ては企業の管理職の出張はファーストまたはビジネスクラスと決まっていたが、もうそんな余裕もないから今後の需要は高まるはずだ。定年退職したシニア層の利用も増えていくだろう。にもかかわらず、過当競争やパイロット不足で、どこも経営難に苦しんでいる。LCCも設立当初はJALをリストラされたパイロットを大量採用できたが、もはや期待できない。利益率の低いLCCが、巨額の新人育成費を捻出するのは難しからう。

さて、沖縄を訪れるのはこれで三度目。行くとびに様変わりしている。一度目は返還から数年後。まだ米軍色が濃く、空港建物は簡素で、ゴーヤチャンプルも苦手だった。二度目は沖縄サミットの直後で、宮廷料理を堪能した。空港やホテルも立派になったが、道路は昔のままで渋滞がひどかった。三度目の今回は、本島を縦断する幹線道路やモノレールが完成していて、世界遺産や水族館に押し寄せる観光客のみならず、本土や海外からの移

住者が激増していた。ラフターや沖縄そばは美味だし、人情の温かさも変わらないが、その一方、凡庸でアンパランスな都会化が感じられた。

そんな時、心の扉を叩くような風景に出逢った。それは北東部の津波（つは）集落。澄みきったエメラルド色の海沿いに、古びた琉球瓦を頂いた十軒ほどの民家が点在していた。津波（つは）の地名は津波（つなみ）に由来するとも。時代から忘れ去られたような家々の軒先には洗濯物がはため

いて生活の匂いがある。見慣れぬ観光客を怪しんで犬が吠え、数匹の猫が物陰から遠巻きに睨む。床屋の三色ねじり棒は眠気を誘うようにのんびりと回っている。



パソコンに振り回される

下山 健夫

コンピューターに実際に関わったのはもう一昔前になる。HP2000と呼ぶ、部屋に鎮座するものだった。プログラマー業務を知ること、ベーシックでプログラムを自分達で書き、カードにパンチアウトしたものを読ませて入力する必要があった。IT部門は最新・高能力機器をすぐ導入したがと教えられたが、自分でパソコンを買うようになり、早く動く最新のものがすぐ欲しくなるので納得させられた。自宅にあるパソコンは、間違いなく当時の何百倍の能力を持っていると思う。

この後十五年程、コンピューターには全くご無沙汰だったが、OSと既成ソフトでパソコンが動く時代になり、今まで何台買い換えただろうか。また四、五年程前までは高価とのイメージがあり、今のパソコンは部品を買い集め、自分で組み立てたものだ。これで十分に動くので、国内メーカーが台湾、中国製に太刀打ち出来ないのは実

感できる。自分の用途からすると私のパソコンでも大変なオーバースペックなので、もう最新機器あさり遍歴は終わりだろう。

ただこの半年、パソコンに色々と振り回されている。個人情報保護が異常にうるさい日本では考えられないことだが、ウエップ検索で何十年ぶりに米国人の友人と連絡が取れた。その彼から、今香港旅行中だがパスポートなどを盗まれたので金を送って欲しいとのメールが入った。昔の国際電話と違った同然のスカイプで米国の自宅へ連絡したら、パソコンがハッキングされてしまい、登録していたメールアドレスが盗まれて、同じようなメールが多く多くの友人達にも配信され、金がないのかと冗談を言われたとのことだった。奥さんとも久しぶりに話が出来たが、私の英語が嘗てより上達したとの落ちがついた。まだ日本では、個人のパソコンへのハッキングによる詐欺の話はあまり聞かないが、これからこのような事が多くなるのではないか？ 今も時々不審なメールがあり、アドレスが全く送信した覚えのないルーマニア等東欧の国になっていたりで、ウイルスの感染を心配してい

る。

新しいスマホに替えたときにもソフトのトラブルがあった。パソコン側の問題と考えて全て最新ソフトに更新したが、後で同じことが数多く起こったことも知った。この頃ソフトは侵入予防のため自動更新が煩雑に行われ、画面がかなり長く動かなくなることがある。気短かな私は電源をすぐ切ってしまうのでかえってソフトを最初から再インストールするような最悪な状況にも数回陥っている。その上最新のソフトは、今まで親しんだ画面が一新されて、我流で対応してきた者には戸惑うばかりだ。その後、機器温度の上昇で自動シャットダウンが何回も起こったが、CPUのラジエーターに綿ゴミがつまっていた。秋葉原にはこのゴミを吹き飛ばすエアードスターも山積みで、私だけではないと胸をなでおろしている。年末になり急にパソコンの時間表示が平成一〇〇年になり、ソフト上で直しても直ぐにもとに戻ってしまった。これは電池切れと判明、ケーブルを外し、面倒なケースを開けて修理する羽目になった。

パソコンは色々と問題を起こしてくれるが、次々と新

しい楽しみも提供してくれる。今はYouTubeで、好きな昔の音楽家の動画ダウンロードにはまっている。もうDVDの購入は必要ないかもしれない。ウィーンオペラも自宅で安価に同時視聴することが可能なのを知り、ライブビューイングを観に映画館へわざわざ足を運ばなくても良い。いい時代になったものだ。世界中の大学の授業もネット受講できるとのこと、もう少し時間ができたらチャレンジしたいが、あまりにパソコンの前ばかりでは家族から気持ち悪がられるのが心配だ。



老人のつぶやき

玉山 和夫

私は昨年七月、はじめて救急車に乗った。救急車に運び込まれたらすぐに酸素吸入をしてくれ、呼吸がかなり楽になった。救急隊員が電話をかけて患者の受け入れを交渉してくれ、K病院ならすぐ行けるとのこと。私は赤十字病院には精密検査をうけたデータがあるからぜひと頼んだ。入院するなら四万円の部屋になるがよいかと念を押され、受け入れてくれることになった。これに十分ほどかかった。それから、救急車はサイレンを鳴らして走り、日赤の救急センターに着いた。

センターのベッドに寝かされ、急性心筋梗塞と診断された。土曜日の夕方であったが、幸いに専門医がいたので、つまっている心臓の血管の一つにカテーテルを足の付け根から挿入して広げ、ステントを三本入れた。手術が終わって、EICUに移されたのは真夜中に近かった。EICUで行き届いた処置を受け、六日後に一般病棟

に移り、十二日目に手術室でもう一本の血管にステントを入れた。三本目の血管も狭窄しているが、血管が固いのでステントを入れないことになり、十六日目に退院した。実は、もつと入院していたかったのだが、日赤は急性期病院なので、ベッドを空けておくために早く退院させるのだった。

行き届いた日赤の治療にかかった費用は、一人部屋の追加料を除くと、健康保険の三割負担で十五万円だった。救急車は無料だった。これがアメリカだったら一千万円近くになったかもしれない。これだけの支出で済むのは、日本の健康保険制度の有難いところだと痛感した。

今回の緊急治療でわかったことは、救急センターに行ったら、治療は全面的におまかせするのが前提条件になっていることだ。緊急だから医師の判断で治療するのは当然でもある。私は延命治療を受けたくないと言った。これは役に立たないと分かっていた。医師の立場としては、例えば延命治療とみなされる点滴注射をやめれば、患者が死ぬかもしれないので、殺人罪で告訴されかねない。止めるに止められないというの

である。一般の病院でも患者に続けて居てもらう方が経営上も有利であるから、延命治療を続けることになる。

しかし、大部分の老人は、延命治療をうけ寝たきりに近い状態で生き延びることを望んではない。家族にも負担になるし、本人にも苦痛の状態が長引くからである。

それで、後期高齢者健保から延命治療とみなされるものを省けば、病院は自動的に延命治療をやらないことになる。これにより健保の赤字がかなり節減され、財政再建に貢献できる。今は延命治療による長引いた入院などで、健保の大部分が使われているのである。

しかし、家族にとつては親や夫が一日でも長く生きていてほしいと願うのは人情でもあるので、生きていることに執着する人は、国の健康保険とは別な、今のガン保険を拡張したような民間の保険にはいれたい。

これは健康保険の適用範囲を制限することになるが、それでも諸外国にくらべればなお優れた制度だといえる。米国では、オバマ大統領が国民皆保険をねらって、今まで健康保険のカバーのない人をふくめた新しい制度をつくったが、実際には今までの民間の保険より保険料が

高く、しかも制限が多いものになったと評判がわるい。実際アメリカの医師の三〇％しか保険診療に参加していないし、狭い範囲の治療しかできないのである。

英国では、原則として診察も投薬も無料でうけられる。しかし、医師は費用の安い処置や薬を使うように強力に指導されているし、ホームドクターは予約制で、急病でもすぐ診てもらえないとの苦情も多い。医師は公務員扱いで定額の給与をうけているので、有能な医師が高収入にひかれて米国に行ってしまう難点がある。

どこの病院にも自由に行けて高度の治療が受けられる日本の制度は悪くなく、合理的に継続すべきである。

日本の後期高齢者健保では、加入者が支払う保険料は総費用の一割に過ぎない。これでは相互補助の保険という名目にそぐわない。費用の半額は国の補助であるが、残りの四割は健保組合からの支援金である。健保組合の収入の半分は会社員など若い世代が払っているのだから、老人が若い世代に負担をかけているのは心苦しい。

健康保険制度の変更は、財政再建のため避けて通れない課題なのではなからうか。

さくら咲く室生寺へ

保坂 令華

四月十四日、友と念願の女人高野の室生寺へ御仏に会いに行く。好天に恵まれ、新幹線のぞみ号に乗り一路京都へ！

真直ぐに夢ふくらませ花の旅

茶畑の続く沿線春霞

車中より眺めると毎年訪れる奈良、京都の想い出が懐かしく甦える。

京都より近鉄大阪線に乗り継いで、室生口大野駅へ。

そしてバスで室生川に添い走る。美しく咲く花々に眼を奪われ、七曲り八曲りする道に行く。朱塗りの太鼓橋を渡り、仁王門を入り念願の室生寺に着く。

夢ひとつ背負ひさくらの室生寺へ

さくら舞ふ朱の橋渡り室生寺へ

正面の金堂を見ながら、花びらを踏まない様によろい坂をゆつくり登る。

よろい坂遍路は白き杖鳴らし

金堂、弥勒堂、そして本堂。柿葺きと桧皮葺きの柔かい小堂だが、千年以上も衆生を見つめつづける国宝・金堂の五仏。中央の釈迦如来は格子天井に届きそう。左右には薬師、地藏、文殊、十一面観音が従い、堂内は圧倒されんばかり。私の好きな薬師如来立像の美しく、華麗なお姿に胸がつぶれそうになる。

花びらや伽藍の反りに舞ひ散りぬ

弥陀三尊帰依のこころに花明り

平成十年、台風の被害に遭い、十二年十月に修復された五重の塔を見に石段を登る。修復前の五重の塔を私は

知らない。平安初期の、室生寺の中で最古の建物と聞いているので、自然の中に建つ五重の塔を楽しみにしていた。

修復された塔は、華やきすぎて重みがなく、ちよつとがっかり！

塔五重華やぎの影さくら舞ふ

いよいよ奥の院へ向かう。七百二十段の急磴を登る。

野すみれの群生や、緑したたる羊歯に心安まる。降りて来る人達のゝあと少しですよ、頑張つて！ゝの声に励まされ進む。

小さな石仏たちに出会い、ほつとして掌を合わせる。

惜春や磴の荒きに地蔵たち

野すみれに言葉かけたく屈みけり

翳りても春日のやさし仏みち

奥の院に着く。ゝやったあゝと声弾ませて友と抱き合う。

女人高野の奥の院に來られた喜びが体中を駆け巡る。

御影堂で、お大師様にお参りする。社務所の方が、俳句手帳にご朱印を書いて下さり感動！ み仏に守られた良き記念になった。

堂より眺める室生の里は優しさと、春の光で絵のようだ。

飛花落花法燭ゆるる御影堂

さくら咲く室生の里や浄土とも

振り返る視野に室生のさくら舞ふ

自然に包まれた奥深い魅力の室生寺は、私達をやさしく、両手で迎え入れてくれた。

健康に恵まれ、念願の室生寺へ女二人旅が出来た倖せを感謝し、明日からの湖東三山、永源寺へと旅を続ける楽しみを胸に京都へ戻る。

グランド・オペラ

金京 法一

とくにオペラ通というわけではない。また、世界中の有名オペラ・ハウスを訪問したというわけでもない。ただ人生の一時期、ニューヨークのメトロポリタン・オペラ・ハウスに前後百回くらい通い詰めたことがある。

六十年代、ハイファイと称して高音質のレコード音楽鑑賞が流行ったことがある。筆者もすっかりその虜になり、ボナナスの大半はハイエンドの装置やレコードにつき込んでいた。特にオペラの全曲録音に夢中になり、暇さえあれば音楽鑑賞に没頭していた。チレーアの『アドリアーナ・ルクルーブル』やプッチーニの『トゥランドット』など、こんな素晴らしいものが世の中にあるのかと聞き惚れていた。五百枚近いLPを所蔵していたと思う。

そんな筆者にニューヨーク転勤の話が持ちあがり、六十三年春に赴任した。メトロポリタン・オペラハウスの

ことは知っていたが、シーズンオフでもあり、個人生活の立ち上げで結構忙しく、ほとんど注意を払わなかった。それでも八月の終わりにもなるとそろそろ気がかりとなり、オペラハウスのチケット・オフィスに出かけて、とりあえず初日のチケットを手に入れた。シーズン幕開けのチケットは通常料金の二倍ぐらいするので、かなりの高額の割には中間ぐらいの席であつたと思う。それよりも初日はニューヨーク社交界の一大イベントで、名士が詰めかける。六十三年の時もケネディ大統領夫妻が臨席していたはずである。暗くなった舞台から『アイーダ』の序奏が始まると、心はすっかり舞台のほうに吸い取られたようになった。素晴らしい音響効果とめくるめくような雰囲気につきかりはまってしまった。今でも覚えているが、「ニューヨークにいる間、とにかくメトロポリタンにかよいつめよう」と心に誓ったものである。すっかり興奮してしまい、どうやってアパートに帰ったか記憶がない。とにかくポット出の筆者にはメトロポリタンの舞台は衝撃的であつた。

思い出深い名演奏も多い。今は亡きエリザベート・シ

ユワルツコップの『薔薇の騎士』は素晴らしいものであった。二晩続けて観たが、同じ感激を味わった。

当時絶頂期にあったビルギット・ニルソンの『トゥランドット』では、姫の第一声は衝撃的で、雷に打たれるとはこういうことかと感激したものである。

一時期サッカーのワールドカップにちなんで、開催地で三大テナーの夕べが催されたことがある。ローマ、ロサンジェルス、パリ、東京であったと思う。三大テナーとはパロッティ、ドミンゴ、カレーラスで、いずれ劣らぬ美声の持ち主であるが、若き日のドミンゴの事故によるメトロポリタン歌劇場デビューに出くわした。人氣ソプラノであったレナータ・テバルディーとハンサムなテナーのフランコ・コレリ共演の『アドリアーナ・ルクルーブル』で、テナーが時間になってもあらわれず、急遽ドミンゴが代役で登場したのである。当時ほとんど名前が知られていなかったが、その美声は素晴らしく、すごい新人が現れたとばかり観客の興奮はいやがうえにも高まっていた。

当時ヨーロッパの有名劇場は戦後の混乱から立ち直っ

ておらず、有名歌手や音楽家はこぞってアメリカにやってきた。ミラノのスカラ座が年間十回程度しかオペラ上演ができなかったところに、メトロポリタン歌劇場は九月から翌年の四月までの期間に二百回近い上演をこなしていた。特に一九六四年からはリンカーン・センターの新歌劇場に移り、新名所として人氣絶頂であった。

半世紀以上の時間が経過している。その後歌劇場がどういった盛衰をたどったかは知らない。

何年か前にメトロポリタン歌劇場の日本公演があった。リハールズの切符が手に入り、レヴァイン指揮のモーツァルト『後宮よりの逃走』を、懐かしさを味わいながら鑑賞した。



土佐の「いづつそう」

矢澤 正二

土佐の「いづつそう」は、津軽の「じょっぱり」、肥後の「もっこす」と共に日本三大頑固に数えられている。快男児、気骨ある男などを意味する高知県男性の県民性である。

私の母方の祖父母は土佐の出であり、私も幼い頃、夏を土佐で過ごした。郷里静岡から東海道線に乗ったが、昭和二十年代に電化していたのは浜松まで。以後は蒸気機関車であった。

高松から土讃線に乗り、四国山脈を越えて（窓から入る汽車の煙のため、トンネルの度に窓を開け閉めする）静岡から高知まで延々十八時間の旅だ。

そこで、共に楽しく過ごした従兄達。泳ぎをおぼえた仁淀川。山をゆるがすクマゼミの大合唱。

忘れられないのが、鰹の「タタキ」である。

この料理は祖母、母、叔母と受け継がれたもので、五枚におろした鰹の節を皮のついたまま表面を軽くあぶり、自然に冷ます。刺身包丁で一センチ程度に切り重ね、大皿に盛りつける。タレはニンニク、生姜をすりおろした醤油、柑橘酢で、鰹の身にまぶして三十分位おく。薬味にはきゅうり（軽く塩もみをし、水気を切っておく）、ネギ、ミョウガ、新玉ネギ等をたっぷりと添え、また三十分位冷蔵庫で寝かすと出来上がり。鰹をタレ、薬味によく漬込むことが肝要である。

私は鰹のタタキを家でもよくする。嫁にいった娘も「美味しい、美味しい」と言ってパクパクと食べるが、その味を引き継いでご馳走してくれたことはまだない。

土佐は第二の故郷といってもよい思い入れがある。

土佐は戦国時代末期、四国一円を治めた長宗我部氏の本拠地であった。長宗我部氏は西軍についたため土佐を追われた。代わりに、論功行賞で山内一豊が遠州掛川五万石より土佐に移封され、二四万石の大大名に出世した。以後明治まで約二八〇年間、山内氏が治めることとなる。

この山内氏が土佐へ連れてきた武士団が上士であり、軍事および政務などの統治機構を独占・世襲した。

一方長宗我部氏の下級家臣団は、普段は農業に従事し、一旦事が起されば鋤や鎌を捨て、槍や刀を持って立ち上がる半農半士の組織であった。彼らは山内氏が治めるようになってからも頑強に抵抗した。これに手を焼いた山内氏は、これを郷士という身分にして山内氏に組み入れたが、禄高は与えなかった。

さらに、江戸時代末期になると、この郷士の生活は苦しく、郷士の株を手放した者を地下浪人といった。逆に裕福な商人は郷士の株を手に入れた。その代表が我らが愛する坂本龍馬の家であった。

この地下浪人から身を起こしたのが三菱の創始者、岩崎弥太郎であった。岩崎家も極貧を絵に描いたような生活ぶり、僅かな土地を耕して飢えをしのいでいた。

NHKの大河ドラマ『龍馬伝』で、鳥カゴを売り歩いている岩崎弥太郎が泥まみれになっている場面が再三あり、「大三菱の創始者があまりにもひどいではないか」

という声が、三菱からあったそうだが、これが真実であったろう。

祖父の家も、その昔先祖が侍の身分を売ってこの地に住んだという。すなわち地下浪人であったように思われる。祖父は一時期、村医者として開業していた。その祖父が話をしてくれたことがある。

ある日のこと、岩崎家の縁者の人が病氣にかかり、それを祖父が診察、治療して無事快癒した。ところが、治療費が払えず、代わりにとって差し出したのが、自分で編んだ数枚の筵（むしろ）であったそうである。

驚いて祖父が「貴方はあの岩崎の縁者であろう。さすれば貴方一人位はなんとでもなろうに」と言ったところ、「いや、あの岩崎は我が家から見れば分家筋に当たり、とても頭を下げて行くものではない」と言ったそうである。自分は、地下浪人の頃と同様の貧乏暮らしであつても「本家の者は、いかに三菱の社長であつても、分家筋の者に頭を下げるものではない」と言うのである。

これぞ、まさに土佐の「いごっそう」ではないか。

教育はあるが知性が

中村 晃也

オリバ氏と会ったのは、イタリアのミラノ座の音楽会のボックス席であった。招待してくれた取引先の農薬会社の社長の甥とのことで、ミラノ工科大学出身。髪の毛の色もとび色で、落ち着いた雰囲気は、イタリア人というよりは、ベルギー人に近いような感じであった。

「現在、スペインの子会社の経営を担当しているが、ぜひ御社の除草剤をスペインの稲作市場で販売させてほしい」とのことであった。

我々の開発した水稲除草剤はイタリアのポー河流域での直播型水田で使用され、好評を博していた。スペインでもバレンシア地方に稲作地帯があり、そこに新製品として導入したいというのである。

スペインでの二年間の実地試験と登録作業を終えて、最終打ち合わせのために、当社の営業担当のKを帯同し

て、オレンジとパエリヤで有名なバレンシアを訪問した。仕事の話が無事に終わった勢いで、食事の前にいくつかのバルをはしごした。一杯飲んで次のお店という具合である。

双方リラックスしていろんな話をした。商売上の他社の噂から始まって、国際経済の話、音楽や絵画の話、各地の料理や酒の話など話題は尽きなかった。

話の途中でKが面白いことを言った。「イタリア人と日本人がベンツに乗って、スペインの中華料理店に来て、英語で話し合っている。まさに国際的ですな」「じゃあもつと国際的になろう」といって、オリバ氏はフランスのワインと英国産のウイスキーを注文した。

酔った彼の車で送ってもらったホテルのバーで、Kと最後の一杯を楽しんだ。Kは言う。「中村さんは研究所出身の技術屋部長ときいていましたが、英語が上手ですね。どこかに留学したのですか？」

「いや俺は英語はうまくないよ。相手も俺が流暢にしゃべるのを期待していないさ。問題は話の中身で、相手のレベルに合った会話が楽しめればそれでもいいと思って

いるんだ。スペインに來たらスペインの料理の話、例えば鰻の稚魚のオリーブ炒めが好きだとか、どこかガスバツチョは美味かったとか。飲み物ではイタリア、フランス、スペインのワインの違いをコメントするとか。スペインの絵画ではゴヤとグレコ、ベラスケスとムリーリョの違いとその時代背景とか。歴史でいえば、キリスト教徒とイスラムとの闘い、レコンキスタまでの云々とか。いわゆる雑学的な知識があれば話すことはいくらでもあるよ。要は語学よりも一般常識の問題だな」

「一般常識の点では、商社マンは有利ですね」とK。

「ただ、いろいろな知識を披露したいあまり、テーブルの話題を独占する人はいやですね?」

「うん、政治談議でも経済論でも、新聞などのメディアから得た知識の受け売りだけではね。事実の把握と評論は立派だけど、有力な解決案が出せずに『そこが問題なんですよ』と結論する人が多いのは問題だなあ」

「知識や技能は教わるものですが、教育があるだけではアカンということですかね? 最高教育を受けていながら、専門知識が社会で活かされていないケースは多い

ですよ。それどころか酒の勢いで暴れたり、レストランでは大声で注文を急がせたりする人もいます」

「それは品性の問題だよ。自分の意見や感想を述べるTPOも大事だし、ユーモアを交えた温和な話し方などが一体となったものが、教養っていうものではないかな?」

「………」

「教養は自然と滲み出てくるもので、奥ゆかしさが伴い、自ら喧伝しなくても人間性と知性は相手に分かるものだ。もつとも俺などは知性よりも、痴性が勝っていると自覚しているがね」

ここまでしゃべって気が付くと、Kはスッカリ寝込んでいた。相手の疲労具合を考えずに、長々としゃべったのは知性というよりは気働きが足りない証拠だ。

相手が寝込んで見栄をはる必要がなくなったので、バーテンに怒鳴ってやった。

「セニョール、ウナ・マス・ウイスキー! (ウイスキーもう一杯!)」

なけなしの教養をかなぐり捨てた一瞬であった。

遊樂夢笑 すべからく美しい

浜口 須美子

私にはひとまわり上の兄がいる。

毎年秋に、その兄の所属する書道愛好家仲間の展覧会が京都文化博物館で開催される。書道展の入口での記帳ほど緊張するものではなく、毎回「来年こそ練習してから来よう」「書きやすいペンネームを考えよう」「名前をクリステイナに変えたらよかった」などと思う。でも筆で名前を書くのは非日常の事。筆を持つことで、芸術の秋を愛でる資格を得たような感覚はいいものだ。

さて、私流書道展の楽しみ方は、まず全体を鑑賞して知人の書からそのメッセージ性を考え、どうしてこの文字を選んだのか、どんな気持ちで書いたのか、その人の世界に思いを馳せる。前回は兄の「浮生適意為楽」が私のメッセージと勝手に受け止めた。人生は自分の意に合うよう気儘に過ごすがい。これが楽しめというものだ。「あんたは充分気儘に生活してるやん」って声がど

こからか聞こえてきそうだが、気儘に過ごせるようになるための努力は惜しまないという兄の意識をも汲み取って、人生、肩肘はらずに、悠々と生きて行きたい。そして自分が、ありのまま、気儘に過ごすことが、他人に受け入れられる程度のものかどうかを自問自答し反省の材料としたい。

今回の兄の作品だが、その中の一点は「おまえのメールやねん」って兄が言った。私のメール？ 兄から「まだ出品の作品はできてないねん」というメールに対し、「私からのリクエストが可能なら、『遊』『楽』『夢』『笑』などの文字が入った『遊戯三昧』『安居樂業』などが好きです。でも、お兄ちゃんが選んだ文字の意味を調べるのも楽しみのひとつです。名誉ある人の書ならば、反古紙も書き損じも価値ありとか。気楽にチョチョイのチョイでお願いします」と返信した。で、このメールの作品って、何？ 兄の書に私がどのようにかかわっているのか、ドキドキしながらその作品と対面した。

『遊樂夢咲須美』（咲は笑の本字）

まあなんとおちゃめなお兄ちゃんだろう。私は「遊」

『楽』『夢』『笑』などが入っている言葉が好き」とメールしたけど、まさかその全部が並ぶとは思わなんだ。「すべからく美しい」とまとめる兄の頭の柔軟さに、ますます尊敬の念を深めた。

私の名前、須美子。人に漢字を伝える時には「すべからく美しいと書きます」と時々は言ってたけれど、なんだか大きな声で自分で言ってはいけない言葉だと理解し、関東の人には「那須高原の須」関西の人には「須磨海岸の須」と言ってきた。すべからくの意味は「当然」「是非とも」「必然的に」。私の命名は、「是非とも美しくの願望を込めた親の願い」だったのであろう。

このように、私の好きな文字が並んだ挙句に、半世紀以上使い慣れた自分の名前が加えられ、書となって、まるで私がスポットライトを浴びたような晴れがましい感覚。姉が、「よかったね。戒名をつけてもらったやん。私も書いてほしいわ」と言った。「姉ちゃんも、四文字熟語の下に名前入れてもらったら戒名になるやん。『七転八起美智』なんてどう?」と私も盛り上がる。

私のメールを書の題材にしてくれた兄。その書を戒名

に使えるという姉。その姉に七転八起と名付ける私。

父は文学的意識の高い人だった。しかも少しシャイで、冗談はいつも知的な香りがした。母も俳句歴七十年。お茶目でノリがいい。

そんな父と母の遺伝子が、兄、姉、私に分散されて、芸術の秋にふさわしい幸せの光景。

これぞ、遊楽夢笑の世界。



「遊楽夢笑絵図」
我が母富貴子 94 歳の絵

『ニーベルングの指環』雑感

横内 則之

昨秋、メトロポリタン歌劇場で上演されたワグナーの大作『ニーベルングの指環』のライブビューイングが、東劇で上映されるのを観た。超大画面なので、特S席から見るようで迫力があり、休憩時間には、楽屋裏や役者の屈託のない会話なども紹介され、歌劇の醍醐味を満喫した。

何しろ本作は、四日間十五時間の超大作なので、内容を一言で言い表すことは難しいが、北欧神話に題材を取って、運命を司る主神ヴォータンと、人間ジークムント及び、その子ジークフリートの葛藤の物語で、あらずじは以下のとおりである。

ラインの乙女達に守られている水底の黄金は、世界を征服する力を持っていた。その黄金が、ニーベルング族のアルベルヒに奪われ、それから作られた指環を巡って、争奪が繰り広げられていく。

一方、ヴォータンと人間の女の間に、ジークムント、ジークリンデの兄妹が生まれるが、二人は生き分かれとなっていた。逞しい若者に育ったジークムントは、嵐の夜雨宿りに立ち寄った館で、その主フンディングの妻ジークリンデと会い惹かれあう。やがて、フンディングが一族の敵であり、ジークリンデは生き別れた妹であることを知る。運命に従えば、死後英雄たちの眠るヴァルハラ宮に迎えられるが、運命に抗いジークムントは、ジークリンデを奪い去る。結婚の女神フリッカは、そのことをとがめ、ヴォータンをけしかけ、フンディングにジークムントを殺させる。一方、ヴォータンと智の女神エルダとの間には、九人の戦乙女（ワルクユーレ）がおり、彼女達は、死んだ英雄たちの魂を、ヴァルハラ宮に運ぶ役割を担っている。その長女であるブリュンヒルデは、二人の純粹な愛にひかれ、兄妹を助けようとするが、父の怒りを買ひ、神性を奪われ、炎の山で永遠の眠りにかされる。

ジークリンデは、ジークムントの子を宿しており、ジークフリートが生まれる。ジークフリートは、廻りめぐ

って指環を手に入れ、炎の山に眠るブリュンヒルデを目覚めさせ、永遠の愛を誓い合う。

呪いで、記憶を失ったジークフリートは、ブリュンヒルデとの愛の誓いを忘れ、彼女の復讐により死に至らしめられる。指環を手に入れたブリュンヒルデは、指環をラインの乙女たちに返し、ヴァルハラ宮は炎上する。

この物語は、神から与えられた運命に従えば、死後ヴァルハラ宮で永遠の安息が得られるにも拘らず、勇氣と愛を以って、自らの意志で生きる人間を謳い上げている。澁刺とした若者の立ち回りと、大がかりな舞台装置が、観客を感動の渦に巻き込んでゆく。特に、戦乙女が天駆ける『ワルキューレの騎行』は、バックの勇壮な楽曲と相まって、否が応でも高揚感をかきたてる。ヒトラーがワグナーに心酔したのも、むべなるかなと思つた。

この物語を見ていて、ふと宗教改革を思い起こした。十五世紀前後におこつたルネッサンス運動は、教条的なキリスト教支配から、ギリシャ、ローマ時代の文芸を見直すことにより、人間解放を行い、それが幾多の宗教改革につながっていった。これを第一期とすると、十九世

紀後半に第二の宗教改革があつたのかもしれない。

同時代のニーチェは、『ツァラトゥストラはかく語りき』で、『神は死んだ』と宣言した。これは、清く正しく美しく生きていけば、神が天国に導いてくれるというキリスト教的な価値観に対して、神の意志などある訳はなく、善も悪もない世界が永遠に回帰するだけであると主張である。そして、一つでも生きていて良かったと思える事があれば、生きてきた意味があり、人生の全てを肯定することができる。つまり、人間は、現世を肯定し、苦悩を引き受けつつこれを乗り越えていくべきことを教えている。かくて、神の存在は不要となり、ヴァルハラ宮は炎上し、消滅することになる。

森羅万象も、生き物の生死も、元素レベルで見れば、増えもせず減りもせず、組成が変化しているだけである。この考え方は、般若心経の『色即是空、空即是色』『輪廻転生』にも通じるものがある。人間、遠く離れていても、考える事は同じだなと思う。

残り少ない齢を数えつつ、こんな心境にも浸つた観劇であつた。

神さま談義

池田 隆

人物紹介… I (理系大学生)

T (Iの高校時代からの友人、文系大学生)

F (カソリック系高校出の女子大生)

M (Tの母親、話術巧みな理知的美貌の持ち主)

と き…一九六一年のある晩、ところ…TとM宅の居間

M 「I君は今でも無神論者なの」

I 「ええ、今のところ神なんて必要ないからね」

F 「いつも神さまの話になると苛められてるの。今晚は

一緒にI君を負かしましようよ」

I 「一対三か、手強いなあ」

T 「君は神がいないと証明できるかい」

I 「神がいるという証明はどうなんだい」

M 「ねえ、科学では因果関係によって真理を探究していくのでしょ

う。しかし、科学では最も基本的な真理、
そうね、なぜ宇宙が出来たかというような事は説明

できないでしょう。そこにある不可知な力が神さまとは考えられないの」

I 「僕が考える神はそんな漠然としたものでなく、全知全能で奇跡を起こし、悩みを助ける存在ですよ」

F 「I君は人間の最も知りたいことから逃げてるわ」

M 「たとえば、この手のかすり傷も自然に治るわね。こんな不思議な力は神さまが居るからでしょう」

I 「幼稚過ぎますよ。進化論によれば、自然治癒力のあ
る生物だけが生き残ったのであって、奇跡でも何
もないですよ」

F 「人間も小さな粒子で構成されている物体と考える
でしょう。それでは私たちの意思も感情も、行動さ
えずでに予定されているのね。つまらなくないの」

I 「しかし、そう考えるのが最もすっきりするよ」

T 「君、聖書を読んだことあるかい」

I 「少しならね。文学ならともかく、事実ではないよ」

T 「もちろん史実ではないさ。喩話だけど、そこで神が
述べている道徳律は、人間にとっても必要だと思うね」

I 「それは認めるよ。敬虔な信者には高潔の士が多いし

ね。それだから神が存在すると言えるのかい」

T 「あのような立派な道德律を、人間が作れる筈がない」

I 「人間は社会的動物というだろう。団結を乱す奴が沢山いる集団は滅亡した。一方で、利他という目標に向かって自己制御できる人たちが多くいた集団が生き残ったのさ。その目標が遺伝的に、あるいは後天的な教育で伝えられて道德になったと考えるね」

F 「それなら神さまのために殉死した聖人や、修道院で一生祈り続けているような敬虔な方々がいることを説明できるかしら」

I 「そのような人は一種の精神的利己主義者だよ」

M 「I君のように幸せに育った人は信仰に入り難いんですって。宗教は洋服のようなものだから、心身ともに丈夫な人はべつに着なくても良いのかもねえ」

I 「ええ、僕も宗教を禁止せよとは言いませんよ。せっかくそれで幸せになっている人がいるのに、それを壊すことはないもの。他人に迷惑をかけぬかぎりのようにして幸福になろうと当人の自由ですから。ただ、宗教アクセサリーには反発を感じるな」

T 「皮肉かい」

I 「神の恩寵は万人平等なのだろう。それなのに、なぜ無信仰の人に神は差別待遇するのかな」

M 「信仰は杓子のようなもので、底のない杓子に神さまがいくら水を注いでも駄目なのよ」

F 「そう、信仰に入るには、こんな議論をいくらしても無駄。まず理屈ぬきに神を信じるのよ。そうしたら世界がばあど開けて分るようになるわ」

T 「たしかに、何も考えずに溝を跳び越える必要がある」

I 「そうらしいね。はじめて意見が一致した」

その後

I と F はこの談義の三年後に M 夫妻の仲人で結婚する。I は技術者となるが、科学技術の限界を痛感する。以来、仏教哲学に関心を抱き、百観音巡礼も徒歩で満願を果す。F はキリスト教も仏教も到達目標は同じと悟り、ある時から毎朝仏壇の前で般若心経を唱えている。昨年二人は仏式の金婚式を挙げた。しかし神仏の存在を未だ心底より確信しているわけでもないようだ。(なお、本文は I の当時の手記に拠った)

世の中便利すぎるのでは

川村 邦生

「あつ、また停電だ。早くローソクを出して」と言うこともない時代に生きていると不便さを忘れてしまう。身の回りどこもかしこも便利さに囲まれている現代生活だ。トイレの温水洗浄は当たり前。極端なものはドアを開けると蓋が開き、用を済ませると温水で洗い、自然に汚物を流す。これがすべて自動だ。

昔の大名は用をたすのに自分は気張るだけで後は全て人の手で行われていたが、今まさにそのような状況になった。

自動車技術も便利さのスピードを上げている。自動運転が開始され、人は乗り込んだら目的地を選ぶだけという時代がすぐそこまで来ている。

「民に利器多くして国家滋（ますます）昏（くら）し」と老子の言葉がある。使ってみると便利だが、文明の宿

命であるとしても利器のせいで失われていくものについて考えなくてはならない、「小国寡民」の思想だ。

インターネット「一木に天地あり」の解説によると、「現代社会を逆行せよ、昔に戻れと言うように思われるがそうでなく、文明社会の発達は、労働の重さを軽減し、生活を豊かにし、寿命が延び、人生を楽しいものにするが、一方で人間の生活が浪費され怠慢になり墮落し、それゆえするがしこくなり、生命を軽んじ、人間の内面性があるさにかになっていく。このような現代社会の様々な問題点を振り返っていくべきだ」という。

メーカーは利用者の関心を引こうと新しいものを造り出すが、便利さの過剰はコストアップ以外にも悪さをする。

便器は開くものとして座ってしまったり、汚物は流れるものと思い、そのまま出てくる。便利さに慣れ切ってしまうと間違いを起こす一例だ。

大震災の時ライフラインがダウンした。不便・困難に直面した人は多かっただろう。

訓練では避難誘導や徒歩帰宅などは行いが、ライフラインがダウンした時の訓練は聞いたことがない。

電気やガスはあるのが当たり前というわれらの感覚では、想像しにくい事なのだろう。

現在、カーナビを利用する人は多い。どこに行くにもカーナビの指示を仰ぐ。地図を見てどのルートが一番かと考えなくなった。これは些細なことかもしれないが、一事が万事この状況であるならば、頭脳の退化を心配するのは大げさではない。

若者の殺人事件が発生すると、「ゲーム上、殺してもリセットすれば簡単にゲームを再開でき、何回でも続けられて便利だ。その感覚が頭脳のどこかに埋もれている事が、若者の安易な殺人事件に大きく影響しているのではないか」と言われる。頭脳の進歩が便利のスピードについていけず、人間性に歪みがでくるのではないか。

昔の生活に戻れと言うのではない。そのスピードを少し抑え、人間がついていける程度のものにしてはどうか。

進行が遅くなると、資源枯渇、環境悪化が遅くなり、対応に余裕が生じる。

便利さに慣れ切った人は、不便・困難に弱い。

メーカーは人が求めるままに便利な製品の開発・製造をせざるを得ないが、その為に消費するエネルギーや資源を考慮すると大変なロスも生じている。これこそ地球環境上大きな問題をはらんでいる。

人の要求を果たすためという事情で便利の迫及を果てしなく続けると、人は心身の生きる力を減少させていき、加えて懸案の地球環境、エネルギー問題も解決が遠くなる。

現代人は自分達の責任でもう少しペースを抑え、過剰な利便性の要求を止めることだ。かく言う小生、パソコンで原稿を書いている。まあいいか。

今年は節目の多い年

杉浦 右藏

阪神・淡路大震災から二十年になる。私は二回目のお勤めが六十二歳で終って定年退職した。失業年金の受給も受けだした。時に任せて、退職時の人事担当や関係担当に挨拶に回った。計らずも、フィリピンへJICA専門家で行かないかとの話を受けた。こんな面白い話はめったにない、直ちに了承した。色々な手続きも終わり、三ヶ月のJICA事前訓練も終わり新年が明けた。派遣担当課長からの激励も済んで、出発の準備をしているときに大震災が起こったのである。

人生二回目にお世話になった会社の伊丹工場は五万坪の広大な敷地だった。直下地震の被害を受けて、頑丈な電線工場の本建屋に亀裂損害を受けた。会社幹部は、通信主力工場が破壊されて大きなショックを受けた。私も何回か降り降りの阪急伊丹駅はペチャンコに潰れ、高架道路は横倒れて、その写真を見て驚いた。

こんな状況下でフィリピンに出発した。赴任先はフィリピン電気通信学園(Telecom Training Institute)である。メトロマニラ西北部二六料にある。交通渋滞の激しい道だが、通勤経路と逆なので助かった。職務の方は意に反した。赴任した月に、大統領令で運輸通信省の通信部門が民間会社に移行した。日本政府は民間会社には援助できない事態となった。TTI学園自体の存続問題に発展した大きな節目だった。

近隣国の日韓・日中関係も節目だ。日本国から韓国を見れば併合解消、韓国側から見れば独立七十周年記念である。東南アジア諸国にとっても欧米の植民地の憂き目から解放されて独立した記念すべき年である。また、中国との朝鮮半島をめぐる日清戦争から数えて百二十年になる。安倍内閣も戦後七十年の節目内閣だ。

明治大正昭和を合計すると百五十年になる。豊臣秀吉が明の国を攻めようとしてから約四百年、元が朝鮮半島を制圧し手先とした元寇の戦いから約七百年、日本の天皇制確立から略一千四百年、という歴史をマクロ的に考察すると、時代の進化を加味して二倍のスピードで変化

して来た。丁度、今年が次の時代への変化点と捉えられる。アメリカにはアメリカ民族はいない。だから合衆国と呼ぶ。地球上の人間は他民族と混合融合した地域が優れているようだ。シリコンバレーという都市は無いが新天地を生み出す地域として存在する。

東日本大震災・原発事故が起きて四年になる。震災の復興復旧は大変だ。原発事故は世代に跨って続く。

今年の『悠遊』で、ウェアラブル・IoT・3Dプリンタを取上げたが、今年はスマホ5G元年になるだろう。今年を原点として、全ての分野でイノベーションが始まりそうだ。色々の節目の中から次の一つだけ注目したい。

成田空港を思う

昨年十一月日本技術士会千葉県支部で「成田空港」勉強会、十二月に千葉県環境研究センター主催で空港水処理環境見学会に参加した。旧管制塔の管制室から空港の全貌を見ると、図に示すようにB滑走路の延長が早急に必要な。発着便増・メンテナンス面等から、航空交通改善に取り組まねばならない。



ヌットさんが戻ってきた

―バンコク女中物語 その二―

浜田 道雄

サワイが結婚してペツブリへ去ったあと、私たちはさらに三年バンコクに滞在した。この間、わが家の家事を見てくれたのはチエンだった。インターナショナル・スクール一年と幼稚園だった二人の息子は、チエンを親代り、あるいは仲のいい「お姉さん」として育ったし、私たちも彼女の人柄と仕事ぶりが大好きだった。そのチエンとは、以来三十数年いまでも付き合いが続いている。

だから、順序として第二話はチエンが主人公になるべきだが、ここではチエンのあと、その後さらに三回あったバンコク勤務の間、いつもわが家の家事を見てくれたヌットさんの話をしたい。ヌットさんは、今もわが家の一員だからだ。

大使館勤務から数年後、私たちは再びバンコクで暮ら

すことになった。タイ政府内務省の要請で、労働政策顧問を務めることになったのである。

この二度目のバンコク生活で、私たちはチエンに戻ってきてもらいたかった。だが、それはできなかった。

私の赴任する半年ほど前、国連機関のアジア地域を担当する事務局長補としてバンコクに赴任した先輩のNさんの頼みでチエンを紹介し、彼女はすでにそこで働いていたからである。それで、家内は出発前、チエンに連絡を取って、彼女の友人のなかで一番しっかりした人を紹介してくれるように頼んだ。そんな経緯で、ヌットさんはわが家で働くことになった。

私たちがバンコクに着いたあくる日、チエンはヌットさんを連れてやってきた。

東北タイのロイエット生まれのヌットさんは、大変頭が良く、仕事も早い、すばらしい女中さんだった。

それまではインド系タイ人の家で下働きをしていたとかで、家内の質問に「料理はカウパット（焼き飯）ぐらいならできると」ひどく自信のない様子だったが、すぐ

に家内との息も合って、わが家になくてもならないひとになった。「自信がない」といつていた料理も、料理上手のN夫人が自宅で開くホームパーティーにチエンの手伝いとして送り込み、勉強させたし、しばしば彼女を市内の日本料理屋に連れて行って、私たちと同じ料理を食べさせ、その味を教えたので、ヌットさんは瞬く間に腕を上げ、わが家の食卓は日々豪華になった。

ヌットさんは大変な働き者だった。わが家は夫婦に中学生の次男という小さな家族で、広いとはいえアパート暮らしだから、家事も料理などを除けば、そんなに多くはない。働き者のヌットさんは、毎日瞬く間に家事を済ませ、「暇を持て余す」と訴えるようになった。

そこで、彼女が「理容を習いたい」という希望をもっているのを知った家内は、すぐに家事の合間に行ける理容学校に通わせた。

その学校を終えると、今度は語学学校で英語を勉強させた。おかげで、その後私たちは床屋に行かずにすむようになった。

私はその後、国連機関勤務、それに再度のタイ政府政策顧問と、さらに二度のバンコク勤務をすることになったが、その度に家内はヌットさんと連絡をとり、わが家に戻ってくれるよう手配した。その頃には、ヌットさんはさらに料理の腕をあげていて、友人たちを招いたわが家のホームパーティーでは一流料理屋並みの料理をだして、私たちや友人を驚かせ、楽しませてくれたものである。

ヌットさんとの付き合いは、これで終わらなかった。ヌットさんは、またわが家に戻って来たのだ。バンコクで事業をしている次男夫婦のもとで、昨年から家事をみてくれているのである。

昨夏次男のところに滞在していた私たちに、ヌットさんはこういった。

「奥さんもネハン（私のこと）も、バンコクに来て暮らしたら？ 私がここで世話するから」

ヌットさんは、今度は「わが家の家政婦」から「わが家の介護士」へ変身してくれるようである。

リソルジメント（イタリアの統一）

松浦 俊博

昨年はベルリンの壁開放二十五周年にあたり、十一月九日にはブランデンブルク門で盛大な式典が催された。そして、壁が立っていた線に沿って夜空に風船が放たれ、ドイツの「統一」が強調された。

しかし、これに逆行する動きも見られた。まず、三月に突如クリミア半島がウクライナ共和国から切り離され、ロシアに併合された。次に、九月にはスコットランドで独立の賛否に関する住民投票が行われ、エリザベス二世が異例のメッセージを出して独立阻止に動いた。そして、十一月にはスペインのカタルーニャ州で、政府の反対にも拘わらず住民投票が強行され、独立を望む人が多いという既成事実を作った。一つの国家が分裂解体した例は、新しいところではソ連やユーゴスラヴィアがあるが、小国になって主権を維持するのは大変なことだろう。

この逆が「統一」であり、「分裂」より桁違いに困難

な道のりである。イタリアは古代ローマ帝国の中心的地域であったが、九世紀後半には早くも全イタリアを統治する君主はいなくなった。その後、ロミオとジュリエットの話にもあるようにイタリア人同士が争い、フランスなど外国からの侵入者とも戦い、一八六一年になって、ようやくイタリア人からなるイタリア王国が成立する。正確には、第一次世界大戦後に、やっとイタリア語を話す人々が一つの国家を作ったのである。イタリアの統一という困難な事業を振り返ってみた。

フランス革命直後の混乱期には、ナポレオンが活躍し、海外侵略を行った。このころのイタリアでは、シチリア島のみがフランスの占領を免れたが、ローマ教皇領やイタリア統一運動の中心となるピエモンテ地方も含めて、全てナポレオンの支配下に入った。さらに彼の一族による支配地域が広がったことは、住民たちに「自分たちはイタリア人だ！」という民族的自覚を促した。

しかし、すぐには「統一」には結びつかず、ナポレオンの失脚後に反動的なウィーン体制を築いたメッテルニヒにより「イタリアは政治的一貫性を持たず、地理学的

な意味しか持たない存在」という侮辱的発言を受けるほど、イタリア統一への道は遠かった。

それでも、フランス革命によってフランス人が国民国家を作ったのを見て、イタリア人の中にも国民国家建設を望む動きが現れるのは自然な成り行きであった。最初にイタリア統一を目指したのは秘密結社のカルボナリであり、続いてマッツイーニがマルセイユで結成した青年イタリアであった。彼は弁護士であり、共和制国家の建設を目指した。しかし、彼の説く抽象的な革命論は、人口の多くを占める、識字率が低く無気力な農民を動かすことはできなかった。

鉄道の敷設について面白いエピソードがある。旧来の特権を維持したいイタリアの各国君主は「鉄道は新しい思想を伝播する怖いもの」と恐れたが、イタリア統一を成し遂げるカヴールは「思想の伝播を促す鉄道こそリソルジメントの決定的要因」と鉄道の敷設を歓迎した。

一八四八年にはフランス二月革命がおこり、結果としては保守派がすぐ巻き返したが、「諸国民の春」と言われる新しい動きがヨーロッパ中に起こった。イタリアで

はサルデーニャ王国の国王カルロ・アルベルトがオーストリアと戦ったが敗北した。青年イタリアは教皇ピウス九世が二月革命の余波でローマから脱出した後にローマ共和国を建てたが、フランス軍の侵入により倒された。

しかし、これらの失敗から十数年後に、カルロ・アルベルトの息子ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世、列強諸国とのあいだに折り合いをつけ、国内の軋みを鎮めた天才的水先案内人の首相カヴール、戦いを勝利に導く動物的感覚を持ち、波瀾万丈の人生を送った船乗りガリバルディの三人によって統一が実現した。彼らはお互いを非難していたが、ほんの一瞬ベクトルが同じ方向を向いた時を見逃さなかったということが興味深い。

イタリア各地には、彼ら三人の名前がついた駅、通り、広場があり、銅像も多く見受けられる。ローマのヴィットーリオ・エマヌエーレ二世記念堂、ピア門、ジャンニコの丘など、古代ローマの遺跡に劣らず多くの「統一」のモニュメントが残っている。イタリア人にとって、カエサルやアウグストゥスと同じくらい、彼らは自慢の人々なのだろう。

学生服

濱田 優ゆか

昭和二十三、四年、ぼくが十歳か十一歳だったその頃、どんな恰好をしていたのだろう。記憶をたどっても思い浮かばない。

どうしたものか、と考えあぐねていたときに、自ら身をもって示してくれる奇特な人を見つけた。磯野カツオ君だ。いわずと知れた磯野家の長男でサザエさんの弟。朝日新聞に登場したのが昭和二十四年。その時十一歳で今もそのままの姿をしている。環境も似ている。父親がサラリーマンの庶民の家で、子供が男一人、女二人の五人家族。だから当時のぼくの姿はカツオ君のそれとほぼ同じと考えてよいだろう。

丸刈り頭で夏も冬も半ズボン。上は、夏は半袖シャツかランニング、春秋は長袖シャツ、冬はその上にセーターを重ねている。ぼくはさらにその上に羽織るジャンパーを持っていた。父の古着を母が縫い直したものである。

概して男の子は着るものに無頓着だから記憶が薄い。ちなみに二人の姉は、モンペと白シャツを脱いでワンピースに着替えたとき終戦を実感した、と話していた。

昭和二十四年、高空たかぞらに鰯雲が漂う日の午後、買い物から帰った母がニコニコしながら「これいいもの」と言っただけ大きな紙包みを取り出した。何だろう？ お腹すかしのぼくは、「何かいいものない」とおやつをねだるのが口癖だ。食べ切れないほどのお菓子だったらいいな。

母は勿体を付けながら包みを解く。現れた物は思ひもよらない青灰色せいがいしよくの霜降りの学生服だった。

「少し早いけれど、お前も来年は中学生だからね。これは小倉織こくらおりといって丈夫だから長く着られるよ」

母は、ちよっと着てみてと促す。学生服を着るのは初めてなので、緊張して袖を通すとさすがに身が縮まる。

「うん、馬子にも衣装。凛々しい男の子になるね」

姿見をみると、そこには自分とは別人のような恰好いい姿が映っていた。

母は裁縫の心得があり、着物も洋服もこなす。既製服

が出回っていなかったあの頃、家族の服を作るだけでなく、近所の人から頼まれて内職に縫物をしていた。この服も内職をして貯めたお金で買ったのだろう。

小学校にはほとんどの生徒がカツオ君と同じような普段着で通っていた。それで母が買ってくれた制服は晴着として着ることにし、普段はこれまで通りの服で通学した。小学生の時にその制服を着たのは五、六回だ。

翌年四月、中学生になった頃は学生服姿で登校した。しかし、どうしてもよそゆきの感じがして、行儀の悪いぼくは馴染めない。数日経つと我慢できなくなり、学校の帰りにふざけっこをして服を汚してしまった。母に叱られると覚悟して服を見せると、

「まあ、派手に汚して。でもこれは洗濯しても大丈夫」と母はいう。

「明日、洗ってアイロンを掛けておくから」

そして次の日――。学校から帰ると、母はすっかり落ち込んでしゃがみこんでいた。「何かあったの」と聞くと、黙ってタライを指さす。そこには色褪せてクタクタになった学生服の成れの果てが浮かんでいた。

母は大丈夫といったけれど、初回の洗濯は慎重を期して漬け洗いをし、汚れのひどい部分をブラシ洗いつつもりだった。粉石けんを溶かした水に服を漬け、他の用事を済ませて戻ると、すでにこの状態だったという。

「このご時世だから多少のスフ入りは仕方ない、と思っただけ……。こんな粗悪品をつかまされるなんて」

母はこう言って自分を厳しく責めた。

ぼくは少しは惜しいとは思っても、何かと気を使う学生服から解放される喜びの方が強く、未練はなかった。それで素直に自分の気持ちを伝えた。

「母さんの服の方が着易くて好きだから、ぼくは構わないよ」

「優しいこと言ってくれて……。お前を喜ばせておいて罪なことをしたね」

母の眼から堪えていた涙がどつと流れ出て、ぼくは戸惑った。ぼくが気を遣っていると誤解したらしい。学校でも自由に走り回れることがどんなに嬉しいか、この気持ちはいくらぼくの心の奥に収めておこう。

東京駅散策

廣澤 重穂

お天気お姉さんの「明日は、西高東低の冬の気圧配置が日本全体を覆うでしょう」という予報通り、その日の東京は、快晴にしてとても寒い日だった。

山形から遊びに来る友と、私は東京駅で待ち合わせていた。もともと東京出身の彼だけに、ただ会って軽く一杯やろうと東京駅を指定したのだ。

「奴が来れば銀ブラでもして日本橋界隈まで流れ、そこで渋く、熱燗で一杯やるのも悪くない」などと夢想する。

ブルブル待つこと約十分。八重洲北口の駅構内が何やらざわついている。雪の影響で、山形新幹線が福島付近で立ち往生し、ダイヤに乱れが出ているという。

さて困った。いったん家に帰って出直すか、それともどこかの喫茶店に避難して、時が経つのを待つべきか。

震える子羊のごとく迷っていると、東京駅が開業百周

年を迎え、Suicaを求めてパニックになったというニュースを思い出す。いい機会だから（何がいい機会だか分からないが）、掌編小説のネタ探しを兼ねて、東京駅を散策してみるのも悪くない。

散策し始めたはいいが、構内は土産物屋とレストランばかり。まったく面白みに欠ける。丸の内側に回ってステーションギャラリーを覗くも閉館中。北口にある八角形の吹き抜けの尖塔へと足を運んでみる。天井の彫刻意匠に素晴らしいものがあると聞き及ぶが、メガネが合わず、よく見えない。東京ステーションホテルの入り口に顔を出しては見たものの、敷居が高そうで入りづらい。

結局、東京駅正面にまわってレンガ造りの建物を、いかにもという顔で眺めてみる。

いつもの見慣れた東京駅だ。

周囲を見回してみた。と、目の前の新しいビルに、丸にM字のマーク。丸善のロゴである。冷え切った体の本好きにとって絶好の時間潰しが出来そうだ。

それまでの弛緩した歩みとは異なり、キレのある足運びでそのビルへと向かった。

なんでもその建物は、「丸の内オアゾ」というらしい。オアゾ、聞き慣れない言葉だ（後に知ったのだが、エスベラント語でオアシスを意味するらしい）。昭和の親父とすれば、何のこっちゃ。丸の内オヤジか？と突っ込みたくもなる。

ともあれ一階から店内を散策しながら、徐々にエスカレーターで上に昇って行つた。途中、二階で『東京駅の隠れた名所と裏話』というムックを購入。東京駅散策となれば、何か記念品が欲しくなるのも当然だろう。

四階は文具&時計売り場となっている。ウインドショッピングも悪くない。高給万年筆や腕時計がこれでもか、これでもかと男の欲望と虚栄心を刺激してくる。

窓側に喫茶室があった。

寒い、行く当てもない、時間がありすぎる。しかも高級腕時計なんぞ目に毒だ。ましてや掌編小説のネタ、アイデアさえも浮かんでこない。

となればやはり、この喫茶室に避難するしかない。

全面ガラスの窓からは、ポカポカと日差しが降り注ぎ、実に暖かい。真綿にくるまれたようにホンワカと暖かい

のだ。冬の日の陽光こそ、何物にも代えがたい贅沢だと実感させられる。窓外に目をやれば、目の高さで中央線の電車が行き来していた。

コーヒーを飲みながら、先ほど買ったムックを開く。今も東京駅構内に、濱口雄幸首相が暴漢に襲われた現場や、原敬首相が刺殺された場所にモニメントが残されているという。写りの悪いモノクロ写真が往時の雰囲気を行拂とさせる。

さらにページをめくると、北町奉行所跡や現存する明治期の架線柱、レンガ壁などが紹介されていた。非公開の地下通路や、飛び込み自殺者が安置された霊安室（今は使われていない）の存在も記事になっている。

いやはや、東京駅には名所旧跡がいっぱいだ。本の中の東京駅散策、しかも時空を超えた散策は、観光オンチの自分にはピッタリだったかもしれない。

あ、忘れていた！

急いでメールを打つ。

「待ち合わせ場所、変更。丸の内北口を出て、丸善四階の喫茶室に。そちらの現在の状況を知らせよ」

私と読書とペンクラブ

富岡 喜久雄

さる会合で「我ら知識人」なる言葉を久しぶりに聞いた。地下人だと自認する筆者は、自分も含まれるとすれば面映ゆい気がすると同時に、何やら上から目線の響きもあって落ち着かなかった。そこで知識人とは一体どんな人種だろうと考えた。高邁な哲学的思考やこの世の森羅万象を読み解き、しかもこれらを庶民に書き知らせる文筆の達人であるとも言えようか。それだけに、大量の書を読む読書人である筈だ。大量といっても文学書ばかり読み漁る文学オタクでは心許ない。ビジネス風と言えば書の世界の消費者兼生産者でもあるということか。

翻って、我が身の消費者としての読書歴はと言えば、生きるために必須な情報、知識、知恵の如きは、教科書はじめ各種実用書を読んできたが、いわゆる殿上人としての教養、趣味のための読書はしてこなかった。

生産者、即ち書き手としても業務上でしかなかった。

だから筆者の国内在勤中の読書について語るものはないに等しい。習性としての読書は、海外出張が多くなつた海外事業部に転じてからである。機中の無聊を慰めようと、空港で買う横文字のペーパーバックが最初だった。まずは派手なカラーの美女がどぎつく微笑む物にいい手がでる。辞書なしで読み飛ばし、気になる語彙は現地着後に確かめた。おかげで少しはボキャ貧が救われたが、ストーリー、人物、情景描写も単純だからすぐ飽きが来る。それでも現地でやらされるスピーチに織り込み、笑いをとる一助にはなつたから少しは実利もあったと言えよう。やがて目も肥えて、徐々に読み応えのあるものに移行していったが、とても知識人に相応しいものだったと言う自信はない。

それではならじと、現役を離れてからは何かと評判を聞くものを、月に一冊は読もうと心がけるようにした。しかし加齢のせいかわ、つい読み易い文芸ものや軽い評論ものになつてしまふ。さらに読むだけでは均衡を欠くので、書き手即ち生産者側になる修行もせねばと、門を叩いたのが「企業OBペンクラブ」という次第である。

先ずは「なんでも書こう会」という勉強会に参加した。

書きたいことを八〇〇字に収めること、並びに基本的な文章作法を、遠慮ない叱咤激励を受けながら修行の後、八〇〇字では収まり切らないものはエッセイ・コラムへ。

さらに欲を出し長編物の修行にと「掌編小説クラブ」

にも参加した。これは目下悪戦苦闘中である。流石に歴戦の猛者に太刀打ちできず、我が構想力の乏しさを痛感するばかりである。どうやら、文筆世界での生産者としてはまだまだ修行が足りない。ならばと「なんでも言う会」にも参加したが、これももっぱら聞き役専門で、ペンクラブ卒業は遠そうである。せめて『悠遊』編者の要請に依って、今回テーマの「心に残る一冊」で諸氏の琴線を震わせようと思ったが、これとて弦も探れず、撥もなく、曲も決まらずの始末である。どだい各人の好み、情感は出自や経験で千差万別だから一冊に決めるのは難しい。

それに、作品そのものにも最適賞味時期や期限もあるようだ。作品の評価は人それぞれだから推奨しようとは思わないが、我が読書歴の中で記憶に残った三冊を挙げ、

諸氏の参考にもなればと思うのみである。

① 堀江敏行 著 『雪沼とその周辺』

短編小説の文本としたいような一冊である。鄙びた避暑地を舞台に、様々な職業を持った人物が起す一癖も二癖もあるエピソード。主人公の職人気質とも言える職業上の蘊蓄と心理描写がとてつもなく臨場感を与えてくれる。ほのほの且つ清涼な読後感が残る作品。

② 宮本 輝 著 『流転の海』

五巻まで続く長編だが、著者の自伝を思わせる内容で、父母の生きざま、生い立ち、育ちゆく環境、背景が身にせまり、他人事と思えず、一冊は誰でもかける傑作と言われる自叙伝の範にしたいと思った作品。筆者の掌編小説クラブ参加の動機にもなったものである。

③ 村田喜代子 著 『蕨野行』

文体が特異。内容は『栢山節考』と同様の設定だが、架空の村での架空の方言を駆使した語りが効果的で、現実感を生む。姥捨て場である「わらび野」に行く姑と嫁との会話で物語を進め、その交情が胸に迫る。

高齢者社会の到来に再読を勧めたい作品と思う。

聖獣白澤（はくたく）を追って

大月 和彦

二十年ぐらい前、修

験道で知られる信州戸

隠神社のある神職の家

で、気味悪い動物が彫

られた大きさ三〇cm×

八〇cmの版木が見つか

った。埃を落として摺

ってみると「白澤避怪図」とあり、奇怪な動物が描かれ、

説明文があった。



白澤乃図 戸隠山

頭は獅子に似ているが、顔は人間で、あごひげを付け

ている。胴体は牛のよう。目が顔と背中の中の左右に三つず

つ計九個、角が額と背中の中の左右に六本生えている奇怪な

獣である。顔には宝珠らしいものを戴いている。

この獣は麒麟や鳳凰などと同じ想像上の動物で、白澤という。

聡明で、人間の言葉を解し、森羅万象に通じていて、民の害を取り除き、明徳の帝が世に出れば現れる瑞祥といわれる。「避怪図」によれば、赤い蛇が現れたり、鶏が軟らかい子を産み、宵に鳴いたり、蛇の交尾が見られるなど奇異な事象が起きたときの効験を説いている。末尾に「戸隠山」とある。中世以来多くの参拝者があった戸隠山顕光寺がこの絵図を作成し、祈祷に使ったり、信者に配ったりしていた。

戸隠山の荒々しい岩壁を描いた江戸末期の「戸隠山絵図」にも「白澤御岩穴」と記された箇所がある。九頭龍神を祀り、水の神として農民の信仰が厚かった戸隠山が、白澤信仰を取り入れたものと思われる。

明治になってからも多く信者や参拝客があったにもかかわらず、白澤の信仰はすっかり姿を消してしまった。廃仏毀釈運動と文明開化のかけ声で、この信仰が忘れ去られたのだろうか。

江戸時代の百科事典『和漢三才図会』にも白澤の項目がある。

東京目黒の五百羅漢寺に、人面牛身虎尾の動物が猯王（白澤）像として安置されている。姿は戸隠の白澤とほぼ同じ。目が顔と左右の背部に三つずつ、合わせて九つあり、あごひげをつけている。カッと開いた目で前方をにらんでいる。

江戸時代には本所にあったこの五百羅漢寺に祀られていた白澤は、「白澤の目を見てまた二百五十人」と川柳に詠われるほど庶民に親しまれていた。

白澤がなぜ猯なのか。中南米に生息する猯は、中国では、人の悪い夢を食い、いい夢を与える神獣と考えられていた。猯は、大晦日の夜、宝船の帆に猯の字を書いて枕元に置いて寝るといい夢を見するという縁起のいい動物だった。江戸期の随筆集『嬉遊笑覧』には、「白澤は猯なるべし、澤猯白同韻なり」と断じている。澤と猯が同韻で、避怪や招福の獣なので混同してしまったらしい。

白澤は日光東照宮にもあった。本殿内の拝殿には將軍着座の間と法親王着座の間があり、大名などが座る法親

王の間の間仕切りの杉戸に白い動物が描かれている。ぎよろつとした目、あごには長いひげ、頭には二本の角が生え、背中には瘤が三つ、両腋から炎が出ている。狩野探幽の描いた白澤で、国宝になっている。

白澤がなぜ東照宮にいるのか。中国の伝説上の帝王黃帝が、東海の浜を巡視中に現れたという言い伝えがあり、徳の高い為政者の治世に白澤が現れ、政治に過ちがあれば忠告し、耳を貸さない為政者の時代には姿を消してしまふという故事による。

「万物の情を知る」白澤は人間や生き物の苦しみを決して見逃さない聖獣——善政のシンボルとされ、家康こそが白澤が現れる時代の為政者だったとの意が込められている。この部屋で拝礼を許される一国一城の主、大名に対し、白澤が出現するような政治を心掛けるようにとの教訓を示している。

白澤は、政治の理念とされる一方、戸隠神社や目黒の羅漢さんのように、厄除けや開運昇進の瑞祥として庶民にも人気があった聖なる獣だった。

被災地見舞い

清水 勝

元勤務先のOB会には、いくつかの勉強会がある。そして年に一度は研修会と称して出掛けている。最近「腰が痛いからゴルフは止めにしよう」とか、「酒が弱くなったから少し控えたい」等々、かつての企業戦士もすっかり色あせてしまった。

そんな中で、一昨年から研修会の新しい方向性を見つけて、何となく誇らかな気持ちになっている。そのきっかけは、「東日本大震災 語り部バスツアー」だった。観光気分では被災地に行くのは拙いだろうと考えていたが、被災地ではメディア報道も減ってきており、何とか震災を風化させないために、観光目的であっても被災地の現状を知って欲しいとの希望があると聞いたのだ。

そこで、津波の襲来で、鉄骨がむき出しになった南三陸町の『防災対策庁舎』や復興を目指しての『南三陸さんさ商店街』を廻るバスツアーに参加した。このツアー

は『ホテル観洋』が宿泊者向けに企画したもので、語り部はホテルの従業員の方々であった。その体験談は津波の恐ろしさだけではなく、復興への情熱が感じられた。

女将はこう語っておられた、「お越しいただければ、被災地は元気になる」と。

この経験から昨年十二月の研修会は、平成二十五年の台風26号による記録的な集中豪雨に見舞われた伊豆大島に行った。伊豆大島は『椿まつり』で知られる観光の島であり、毎年二十一万人の観光客が訪れていた。ところが、集中豪雨被災後は大幅に減っているそうで、町の経済は大打撃を受けているという。東京都は、災害復興は当然として、観光復興と地域経済の活性化を目的に観光客への補助金を出し、島に行つて欲しい、島を元気づけて欲しいとの思いが込められた施策を採っている。

町役場に行つてお話を聞いただけに、一人でも多くの人に伊豆大島に行つて欲しいとの気持ちが強まった。

先ず「伊豆大島は近いですよ」と言いたい。竹芝桟橋から高速艇で一時間四十五分、熱海からなら四十五分で行ける。しかも船からの景色が抜群。東京の高層ビルを

海から観るのは良いものだ。そして富士山が見事。そう、調布から飛行機で行けば二十五分で着いてしまう。

島の観光はレンタカーが便利だ。椿見物の他では、島の成り立ちの三原山に登って欲しい。火口展望台まではいい遊歩道があり四十五分程の心地よいハイキングコースだ。振り返れば富士山や伊豆高原の大室山が見える。

我々が歩いていると、元気のいい若者が走り抜けて行く。聞けば箱根駅伝に備えて合宿をしている帝京大生だ。

「頑張れ!」と応援した。

歌で有名な波浮港もいい。昔ながらの木造の家が狭い路地に建っており、昭和の雰囲気を残している。ここは明治の文人墨客が保養に訪れ、その作品に登場している島には若者が少ないが、この近くには都立海洋国際高校がある。しかも、今や珍しい全寮制の高校で、海洋実習をしているようだ。

伊豆大島の食べ物といえば「くさや」があるが、これは近海で獲れるムロアジ、トビウオ、シイラなどの魚を使用した干物で、独特の臭いのあるくさや液に浸け込んでいる。このくさや液にはビタミン、アミノ酸などが豊

富に含まれていて、抗菌作用もあるとして注目されている。

その他、魚は美味しいし、野菜では明日葉がある。そしてお土産には椿油に椿石鹸。それに自然海塩がある。

どうです、伊豆大島に出掛けませんか。

この二年間は被災地見舞いの旅をしているのだが、最近はどうしたことか、候補地が増えてくるのが気になる。昨年でいえば、広島の集中豪雨、御嶽山の爆発そして北信濃の地震があった。

集中豪雨は砂防施設の整備により、土石や流木を防ぐことが可能ではあるが、それらが想定を超えるものになってきているだけに、想定値そのものの見直しが必要。

火山爆発は突然とはいいながらも、観測体制を整えれば予知可能だろうと思う。しかし、地震予知は難しい。それだけに発生時の対応が被害を抑えられるように思う。どうか今年は災害の少ない年になって欲しいと願わずにはいられない。

デジカメ登場で消えたもの……

福本 多佳子

先日、友人が「テレビを見ていたら、貴方が話してくれたように、ドイツでは混浴サウナが普通だって」と電話をかけてきた。もう十年以上ドイツ旅行をしてないの
で、最新の情報は知らないが「デジカメ登場以来、流石のドイツ人も……？」と、当時を思い起こした。

人間、慣れとは恐ろしいもので、八十年代、ドイツで暮らしていた時、私にとってもいつのかにか混浴が当たり前になっていた。最初に体験したサウナはデュッセルドルフの日系ホテル内だけに、他のホテルと違い「ミックス」と「女性」の二室があった。けれど、サウナ室から出ると男女ともに素っ裸で水を浴び、足湯を楽しんでいるのだから、その中を一人だけタオルを巻いて歩くのは少々違和感がある。それに女性用とされているサウナ室だが、男性係員がメンスール液を熱い石にかけるために入ってくるし、他のホテルや、スポーツ施設ではサ

ウナは一つというのが当たり前だから間違えて入ってくる男性もゆったりとくつろいでいる。私がバスタオルを体に巻いていると、がっちりとした中年女性から「体に良くないからタオルを取れ」と言われた。ドイツ人はお節介りなんだからと思いつつ、タオルを取った。サウナ室の上にはプールがある。私は水着を着て泳いでいたが、プールへと直接通じる階段があるので、素っ裸で泳ぎにくる人たちもいる。男性が背泳ぎを始めるのを見た私は（素っ裸の時に背泳ぎすることもないだろうに）と思った。

家近くのホテルサウナでは、横の部屋に仮眠できるような低いマットレスが並べてあった。サウナの後、しばらく横になり、ふつと脇を見ると、隣にはハンサム青年が目を閉じて横になっていた。「横たわる時くらい、小さなタオルでいいから置いてよね」と私はつぶやいた。

私だって、初めのうちは日本人男性が来いていない時は混浴サウナで平気と思い、そのうち、知らない日本人男性なら一緒でもかまわない。次には同僚男性とも並んで腰掛け、おしゃべりするようになった。一緒にテニスやスカッシュをした後、サウナも一緒であれば、時間を気

にすることがなく、便利だと思っていた。

しかし、夏のミュンヘンでは驚きの光景が待っていた。

友人と木陰でドイツ語の宿題をしようと英国庭園に向かい、緑の中を散策、中央広場にたどり着いた。なんと、そこには百人以上と思われる人々が全員素っ裸でボール遊びやら、犬とたわむれている。裸で犬を抱いている女性を見て、犬だけは着衣と感じたほどだ。二人とも哑然とした表情に変わり、服を着ているという違和感から広場の芝生の横の小径を下を向いて歩かざるを得なかった。通りすぎてから「いやー、さすがに驚いた。でも、問題はどの時点で脱ぐかだね。芝生の上に布を敷いて腰を落ち着けてからだろうね……」と喋りながら帰った。

週末、ホームステイ先のおばさんが休暇から戻ってきた。「プールで泳がない？」と誘われたので、水着を着て庭に降りた。彼女はやはり裸。目を細めて日光浴を楽しんだ後、芝生の上でやおら美容体操を始め出した。声には出さなかったが、「うーん」と唸らざるを得なかった。

ドイツ語個人レッスンの先生は休暇中の湖畔でのキャンプファイアーの写真を見せてくれた。「これが妹、とな

りが妹の旦那、これが両親よ」。みんな裸で、スニーカーだけははいている。「両親と一緒に裸で写真……。うーん、混浴サウナに平気で入れるようになったぐらいじゃ、まだまだドイツ人の感覚とは程遠い」と思った瞬間だった。「でも、他の国はどうなの？」と思い、訊いてみると、バーゼルに住むスイス人男性は「スイスではそんなことないよ」と答えた。フィンランド女性は「家族で入るだけ。公共のサウナでは男女別よ」と言っていた。ということはいドイツ特有なわけ？

私にはあの大らかな情景が他の国でも、しかも都会の公園で見られるとは思えなかった。ボールをつかもうと跳躍した青年の姿はまさに自然児、健康美にあふれていた。古代のオリンピックもあんな感じ？ 裸の夫婦が膝に抱いたベビーを慈しむ姿もほのぼのとしていた。芝生の上のあつけらかんとしたおばあさんも堂々として、たくましく、美しかった。「生き物はすべて美しい」と言っていたアートの先生の言葉が思い浮かぶ。

デジカメ、スマホ全盛の今日でもあの光景は存在するのだろうか？ ……無いだろうな……。

第二の地動説

鳥海 博

昨年の十月末に日銀黒田総裁は突如として第二次金融緩和策を発表しました。これまた『異次元』緩和政策でした。マネタリー・ベースを年間80兆円増やす（今より10〜20兆円も増やす）。国債も同じく80兆円買い込む（今より30兆円も多い）。四月の消費増税で消費が沈滞し、連れて物価上昇の足取りも弱く、黒田日銀の目標とする2%のインフレ・ターゲットに影が射していたところへ、七月以降から始まった原油価格の予期せぬ暴落。前者をボディー・ブローとすれば、これは将にアップパーカットでした。物価上昇2年で2%達成がいよいよ怪しくなつて来て、折角のデフレ脱却マインドが元に戻りそうなので、そうならないように「予防措置」として、上記の措置が取られましたが、それはそれで是としましうか。確かに、この『量的・質的金融緩和の拡大』により、円安・株高が進み始めました。

話を前へ進める前に、現下の経済の出発点である「アベノミクス」を簡単に復習しておきましょう。ご存知のように、「アベノミクス」は三つの矢（大胆な異次元の金融緩和、機動的な財政、民間投資を喚起する成長戦略）から出来ています。これにより何が何でも長引くデフレから脱却することが企図されています。つまり、中央銀行が金融を限りなく緩和し、財政ファイナンスと見紛う程巨額の国債を買い込み、一方、政府はなけなしの財布をはたいて、公共投資その他の施策を行う。また歳出には殆ど手を付けないので、相も変らぬ多額の国債発行を行い、その総額は1000兆円を超え、GDP比200%を超える借金体質はそのまま継続される。民間部門には積極的な投資を促し、経済を成長させるような諸施策を行う。

問題は第三の矢である経済成長（戦略）です。世界全体を見渡しても技術革新の端境期であつて、さしたる成長の芽がありません。低開発国が先進国を追い掛け追いつく現下の経済社会では、先進国経済の低成長（停滞）と低開発国のほどほどの経済成長しか期待できません。

ましてや我が日本は、人口構成の悪化（高齢化と人口減）が重なって成長のしようがない訳です。然は然りながら『デフレ脱却』はここ二十年來の悲願ですから、悪足掻きとも言える財政出動と金融緩和政策の総動員ですが、旗持ちの日銀黒田さんが掲げたのが「2年で2%のインフレ・ターゲット」ところがこれが、上述のように消費低迷と原油価格下落の逆風に遭って怪しくなってきたという訳です。

本題に戻ります。株高はさて置き、円安の効果・効用です。輸出型と称される我が日本経済、この円安によって自動車、電機等の主要産業に思わぬ超過利益を齎しました。この利益を企業がどう処理するかですが、一部は内部留保されるでしょう。会社の設備投資にも使われ、また株主にも増配という形で還元されるようですが、忘れてならないのは、従業員への配分です。会社を良くしているのは、一生懸命に働いている従業員だからです。株主？ 申し訳ありませんが、株主は——極論するなら——お金を出しているだけで、何もしていません。株価の騰がるのを待っているだけで、株価が騰がれば株を売

ってしまつて、他の会社の株を買う。今時の株主は、投機家とは言わないまでも「渡り鳥的」投資家なんですね。ですから、標語的に言うなら「円安メリット（余剰利益）は、株主に配分しないで、従業員に」です。

昨年十月の当会の「サロン21」で、『1000兆円の公的借金は民間の資産と見合いなので、これを隠してしまえ（忘れよう）」という大胆な提言を行いました。今またここに『円安から生まれる超過利潤と原油安メリットは、働く若者の賃金アップに回せ』と提言したいと思います。私に言わせれば、これは「地動説」で、至極当たり前の所論なんです。これを首肯出来ない方は「天動説」論者と断定します。後者がニュートン力学なら前者はアインシュタインの相対性理論です。困った諸事象がこれで解決の方向に向かうことと信じています。

最後に余白を利用して一言。「円安国家（国民）貧乏論」。円安は見かけの好況（繁栄）を齎しますが、基本的には国民を貧乏にします。通貨価値の下落は国際的に見ての購買力の低下ですからね。海外から高い値段でモノを買い、海外旅行にも行けなくなります。

「掌編小説勉強会」この一年

「掌編小説勉強会」は、短編より短い、字数四千から一万二千字の小説を隔月開催の合評会に提出して、互いに批評し合いながら切磋琢磨する勉強会です。

発足して八年、合評会はこの一月で四十八回を数えました。この一年間で四十二編の作品が加わり、累計は三百五十編に迫る勢いです。

作品の内容は、企業物から海外物、時代物、想像物、そして恋愛小説まで多種多様です。

メンバーは、女性三名、男性九名の十二名、それに読者目線から厳しいコメントをくださる評議者二人が加わります。年齢層は六十から九十代まで幅広く、キャリアもさまざまで個性的な人たちです。

なかでも九十五歳になられた、このクラブ最長老の玉山さんは、お元気で毎回意欲的な作品を書き続けておられます。彼の小説は日本の安全問題を扱う学会誌（季刊）で取り上げられ、既に四回、二〇一四年冬号には五回目の『サイバー攻撃』が掲載されました。これらはみ

な、この勉強会で書いた作品を基に編集した小説です。

合評会には毎回七、八編の作品が提出され、活況を保っています。しかし、当初からのメンバーの高齢化は避けられず、玉山さんは例外で、これまで通りの活動が困難な人も出はじめました。本人が望むなら、それぞれが自分のペースに合わせ、出来るだけ長く創作の楽しみを続けられるようにしたいと思います。

以前から、合評会に出席しなくても、パソコンメールを活用して事前に作品とコメントを送り合うことにより、勉強会の効果が得られるように運営してきましたが、今後さらに実効があるように工夫したいと考えています。さらに先を考えると、もっと新しい人に加わってもらって新風を吹き込み、活性化を図ることが最重要の課題です。小説というとハードルが高いようですが、最初は二千字程度のショートショートでも構いません。創作に興味がある方は是非一度見学に来てください。

（プロマネ 濱田、西川、廣澤）

創作短編



かんたん夢

内藤 真理子

香とシルクロードの写真展を見に行った時のことだ。

菩薩というのは、半眼で斜め下を見ているものと思っていたが、二五三窟（晩唐）と添え書きのある写真の、中央に立っている菩薩像は、その前に立つと、ピタリと目を合わせるのだ。

「かおり、この菩薩、どう思う」と聞くと「フツ…」

香というのは僕の恋人なんだけど、菩薩の切れ長の目の成熟した大人の感じとは正反対、月とスッポン。目がまん丸で長いまつ毛がクリッと上を向いている。素直^スだけが取り柄のような女の子だ。

「普通?...じゃないと思うけど...」香を無視して、菩薩像に集中していると、色っぽいまなざしで僕に何か訴えているような気がしてきた。

大学生の僕は、夏休みを利用して、香には内緒で、二五三窟がある莫高窟に、実物を見に行くことにした。

着いてみると、二五三窟は、五メートル四方の小さいものだったが、鉄柵で閉ざされた洞窟の中は真っ暗で、事前に申し込まないと見ることができないそうだ。

二五三窟は後回しになったが、次の玉門関に行き、砂漠に点々と、今も残る崩れかけた長城址や烽火台をじっくり見ることが出来た。今日は、傍の観光用の宿泊施設に泊まることになっている。

ガイドに案内され、部屋に入ると「寛丹^{かんたん}さん、夕食が出来たら呼びに来ますから、どうぞごゆっくり」と彼女は行ってしまった。僕はごろりと細長いベッドに横になったらいつのまにか眠ってしまったらしい。

ドアをノックする音で目が覚めた。

開けると飛天のような柔らかな衣服をまとった、三十二、三のすらりと背の高い美しい女性が立っていて、「あなたが、莫高窟の二五三窟を訪ねて、日本からお出でになった、カンタンさんですか？ 私はその窟にゆかりのある者ですが、日本からのお客様と是非お話がしたいと思って伺いました」と言った。「ワ〜ォ!」、僕としては喜んで招き入れ、身を入れて話を聞く態勢になった。

二五三窟は日本から遣唐使と一緒に来た留学生の繁光という者が作りました。彼は仏教を日本に広めるために、絵画や彫刻の技術を学ぶことに一生懸命でした。はつきり言つて真面目で融通が利かない朴念仁でしたが。

……昔の人の話なのに、まるで知ってる人みたいな話し方だな、と僕は思った……

彼は高という商家の食客になります。そこには、敦煌一の美女と評判の高い香蘭という娘がいました。

繁光は、太い眉毛とキリッとした精悍な目の、意欲にあふれた若者です。彼が高氏と話している所に居合わせた香蘭の胸に「ビビッ」と電流が走りました。

「ステキ！」

繁光は高氏に、莫高窟で壁画や仏像を学びたいと、内に秘めた情熱がほとばしるように話しています。

香蘭は父に「莫高窟には私が案内してもよろしいでしょうか」と申し出ました。

香蘭は繁光を伴つて一つの洞窟に行きました。

そこには極楽浄土で楽器を奏でる人の様子が、ラピスラズリーを基調にした彩色で描かれていました。

繁光はじつと息をつめて見えています。まるで周りの物が何もかも無くなつてしまったかのように。

そんな彼を香蘭は、思いつめて見つめました。二人は毎日莫高窟に通いました。ある日、高氏は繁光を呼び、「西方に旅をする。窟を寄進するので、それを繁光に任せよう」と言いました。あてがわれた洞窟は、五メートル四方の小さなものでした。

一年の月日が流れました。高氏は、西方への旅に出る日が近づいたある日、寄進する窟を訪れました。

と、どうでしょう、そこには天井にも壁にも香蘭がいたのです。憂いを含んだたたずみ、美しい指を天に向けて舞う飛天は、顔もしぐさもすべてが香蘭でした。

高氏は、繁光に「娘をモデルにしたのか」と聞きました。彼は、ハッと、自分が香蘭を深く愛している事に気が付きました。でも、どうにもならないのです。自分には使命がある。黙ってしまった繁光。高氏は側らにいる娘に「香蘭は、繁光をどう思っているのだ」と聞くと、ぽつと赤くなりながら下を向いて「留学している間だけでも良いから一緒にになりたい」と言いました。

高氏は、いじらしい香蘭の願いをかなえてやりたくて、
せめて自分が西方に旅に出ている間だけでも一緒にいる
ように繁光を説き伏せ、二人は結ばれました。

出立の日、高家の人々は玉門関まで行きました。烽火
台に出立を祝うのろしがあがり、薄桃色の煙はいつまで
も砂漠に行く隊列を見送っていました。

やがて二人の間には娘が生まれました。香蘭は、彼が
留学生の使命を決して忘れないのは不服でしたが、人目
もはばからず、二人を大切にしてくれるので幸せでした。

高氏は二年で帰ってきました。それは繁光と香蘭の別
れの時でもあります。彼は毎日、一歳になったばかりの
娘に「ママの言う事をよく聞くのだよ。お父さんは、い
つもお前の事を思っているよ」と言い続けています。

……話しているうちに興奮してきたのか、彼女の顔は
妖気を含んだように高揚し、僕にピタリと目を合わせる
と「私は約束をしたのですもの、引き止めるわけにはい
きませんでしょう。カンタンさん、日本の仏像に、繁光
作の物がありますかしら」僕はゾクツとして思わず唾
をのみ込んだ。「わたし???」この目は、写真展で見

た二五三窟の菩薩像ではないか。……

繁光の送別の宴では、彼の希望で烽火台に出立を祝う
のろしが上がりました。

私は繁光が日本に帰ってしまうのなら、いつそのこと
彼を殺してしまおうと思い、父に言うのと、娘が望むのな
らと、のろしにまぎれて彼の命を絶つことにしたのです。
宴もたけなわの頃、烽火台では薄桃色の煙が天にも届
けと上がっていました。その時真っ直ぐに上っていた煙
に交って、莫高窟の方からも煙が飛天の形になり、押し
寄せてきました。色とりどりの飛天の群れは優雅に舞い
ながら天空にたち昇り消えてゆきます。そして、繁光の
姿も消えてしまったのです。

……美しい訪問者の筈の彼女は、今では切れ長の目は
つり上がり、唇は耳まで裂け「繁光がもし帰り着いて、
仏像を残していたら……仏像もろとも呪ってやるう」
「わあっ」。僕はベッドから転げ落ちてしまった。

その時「かたんさんさん、お食事の支度が出来ました」
ドアの外でガイドの声が聞こえた。夢だったのか。

「かおり」僕の胸は香でいっぱいになった。

左遷と復讐

大西 宏

■糸の切れた風

「反対です」

この一言がその後の私のビジネス人生をそこまで一変させるとは、想像していなかった。上司との路線対立だった。

突然の辞令——その要因があまりにも理不尽に思った私は、愚かにも禁則を破って上司に抗議し、本社人事部に訴えを起こして、ある期間居座り続けた（これがムダな抵抗であり、私の決定的なイメーシダウンにつながったことはまちがいない）。

任地の九州に向かう機中で、見送ってくれた同僚からプレゼントされた『左遷の哲学』という本を読みふけり、私の心は「糸の切れたタコ」のように浮遊し始めた。九州は二度目で上司は元ライバル。

頑張れば頑張るほど結果がマイナスとなるこの不条理——努力すればするだけ遠ざかるものを人生の目的とすることの頼りなさを思い知らされ、私の火種はもろくも消滅した。

それまでは……

○わが身の出世というのが目的だから、勢い上に取り込み、ヨコを蹴落とし、下を囲い込むという働き方となる。したがっていつも戦々恐々として心が落ち着かなかった。数字一辺倒の量志向で創造性というようなものもからきしなかった。

○仕事（とゴルフ・麻雀・酒の類）を引くと、ほとんど何も残らないから、豊かな教養、趣味、人間性からほど遠くなっていた。

○家庭を顧みないから、家族（特に娘）の評判が悪く、現にこの転勤は「行くなら行つて」という全員の希望で、初めての単身赴任となった。

○ファッション感覚が鈍く、ポマードにチツクの髪型、ミュージックは演歌だけ——要するにダサかったから、妻や子供だけでなく、世の女性や若者から不人気そのもの

のだった。

○宴会続きや偏食、睡眠不足、運動不足、ストレスで、成人病のいくつものが首をもたげていた。高血圧、高コレステロール値、高血糖値、脂肪肝、胃潰瘍の傷あと、知らぬ間に結核に罹って治ったあと……。

右のような心身共に危うい人生の危機が、左遷という機会を与えられなかったら自覚できなかったであろう。

■人生観の転換

その危機は、「人生観の転換」を迫ることとなる。

まず、仕事の取り組み方が、評価を気にした「数字本位」から「仕事の中身で勝負する」ように変わった。すると、仕事自体の内容の質が再び向上し始めて、それが注目を集め、いくつかの事例が取り上げられて全国に展開されるようになったのである。

「大西が変わった、髪型、服装まで変わった」

突然バーマをかけたたり、エンポリオ・アルマーニ（フオーマル）やコム・デ・ギャルソン（カジジュアル）を着

だしたのだから、そう言われるのもムリはなかった。変わったのは格好だけではなかった。

左遷後の福岡での何年かの間に、私が「参入した」レジャーの分野は次の通り多彩である。

○カラオケ教室……「聞いても感動がない」と酷評された私が突然「小節回し」や「バイブレーション」、「シンコペーション」を使いだし、「英語のエイトビート」を感動に震える（本人）ように歌い出して、みんなを驚かせた。

○スイミング教室……それまで金植だった。

○テニス教室……それまでできなかった。

○バツティングセンター……高校時代よりも腕をあげた。
○「奴さん」かつぱれ「どじょうすくい」南京玉すだれ」など……博多芸者の自宅での個人教授が主だったが、旦那からにまれながらするそのプロセスもえがたい人間修業だった。それまで苦手だった宴会が楽しくてたまらなくなったのである。

手を出したものが、ちょっと多過ぎるかもしれないが、これも、レジャーの世界に渴えていたとすればやむをえ

なかった。

これらについては、さすがに今も続いているものは少ないが、①それまでできなかったことが「できないのではなく、やらなかっただけ」②物事はやるだけではいけない、基本が大切③歳を言い訳にするな——という価値観はそのままで。

■復讐心がエネルギー

その後の私のポジションは再び上昇カーブに乗ることはなかったが、東京の販売会社、大阪の研修所と斜めに進み始めたのである。

私は、もう仕事人間ではなかった。

林富士雄（池袋）、海渡英祐（新宿）、田久保英夫（渋谷）各氏の小説創作教室に通い始めた。それが曜日を変えての同時進行であったのは、ヒマがなかったからである。

妻に断りを入れて、「色恋」をふくむ小説作家を目指したが、「才能がなさそう」なのと、ビジネスものに比

べいかにも「まだるこしい」とで挫折したが、自分が生息するビジネスとは全く違った景色が映りだした。「組織の闇」さえ興味の対象となり、私の中で光を帯び始めたのである。

次に、思いもかけず、会社のサッカー部長のお鉢が回ってきた。「そんな時間はないはず」と直属の上司の猛反対を受けたが、高校時代に優勝寸前で終わった夢のところが躍りだし、強引に居座ってしまった。そして、ついには弱かったチームを「まぐれ」の連続で、とうとう天皇杯日本一にまで導き、そのチームを母体に「ガンバ大阪」を発足させたのである。

企業ブランドを外すことに積極的に賛成して社内批判を受けたが、取締役会に出て「モノだけでなく夢を売ろう」とたじろぐことはなかった。あの左遷がなければ、ガンバ大阪も実現していなかったかもしれない。

「書くこと」とサッカー——私の人生を彩る二つのイベントは、理不尽な組織に対する復讐心をエネルギーにしていることは間違いない。

星の瞳

馬場 真寿美

「梨花、何を読んでいるんだい？」

正月の三箇日も明けたある昼下がり、ダイニングのテーブルで新聞を広げていた藤島浩司は、部屋続きのリビングにいる彼の小さな娘に声をかけた。

何かと慌ただしかった年末年始の恒例行事も終えて、ようやく落ち着いていた日常が戻りつつある。窓の外には、昨晚から降り出したこの冬一番の雪が薄く積もって、庭一面を真っ白な雪景色へと変えていた。

梨花と呼ばれた女の子は、先ほどから大きなソファの上にちょこんと胡坐をかいて、一冊の絵本に夢中になっていた。父親に名前を呼ばれて顔を上げたものの、すぐに視線は、再び手元の本へと手繰り寄せられていく。

「児童館で借りてきたのよ。題名は『星むすめ』だったかしら……?」

浩司のカップに熱い紅茶を注ぎ足しながら、妻の絵莉

子が娘の梨花に代わって答えた。

梨花は現在、幼稚園の年長組で、今年の春からは小学校に上がる。娘が、妻の絵莉子によく似て、色が白く目がぱつちりとした可愛い顔立ちであることに、浩司は秘かに満足していた。それに、親バカのようなだが、なかなか聡明であることも否定できない。なんといっても、本が大好きで、暇さえあればこんな風に齧りついているのだから……。

が、それは同時に、父親として浩司の気がかりなことでもあった。大人ばかりに囲まれて育ってきたせいか、どうも子どもらしさに欠けているくらいがある。実際、梨花は齢のわりにはひどく大人びていて、聞き分けの良いもの静かな少女だった。

（弟妹でもないばあ……）

部屋の片隅で一人遊びをしている娘の姿を見て、いつも思うことである。自分も妻の絵莉子も、兄妹の多いにぎやかな家庭で育ってきたせいなのか、梨花がひとりっ子であることが、不憫に思えてならない。

もともと、だからといって、こればかりはどうして

やることもできなかった。病院で検査を受けても、夫婦そろって子どもがでにくい要因は何も見つからないのだから……。

毎年、「クリスマスのプレゼントは何がいい？」と尋ねるたびに、無邪気な様子で瞳を輝かせ、「梨花ね、赤ちゃんが欲しい！ 妹でも弟でもどっちでもいいから」なんてせがむ娘の心中を考えるとなおさらである。

ふと、そういうば去年のクリスマスは、梨花の口から一度も「赤ちゃん」という言葉が出なかったな、と浩司は思い出していた。――諦めたのだろうか？

「梨花、おばあちゃんの持つてきてくれたケーキ、ここにきて一緒に食べないか？」浩司は梨花を誘った。孫娘の顔見たさに、浩司の母親、澄子が先ほどまで遊びに来ていたのだ。ケーキはそのときの手土産である。

椅子に座った梨花の腕には、相変わらず先ほどの本が大事そうに抱えられていた。そして、

「パパ、このお話読んだことある？」

神妙な顔つきで、浩司の目の前に突き出した絵本の表紙には、絵莉子から聞いた通り「星むすめ」という表題

が描かれている。

「いや、パパは読んだことないな」浩司は、実用書以外はあまり本を読む習慣がない。

「ママは？」

すると、若い頃は自称文学少女だったという絵莉子が、
「当然」とでも言うように、「もちろん知ってるわ。フィ
ンランドの昔話でしょ？ 確か、あるお百姓さんの夫婦
が、雪山で女の子の赤ちゃんを拾ってくるお話よね」と
首を振る。

そして、浩司に向かって説明するように、話のあらす
じを語り始めた。

「その女の子の瞳は星のように美しく、やがて成長す
るにつれ不思議な力を見せるようになるの」

「ほう？」浩司は初めて聞く物語に、興味をそそられた。

「つまり、女の子の瞳には、普通の人には決して見え
ないものまでが見えてしまうの。次第に気味が悪くなっ
たおかみさんは、ある日、だんなさんの留守中に勝手に
女の子を雪山に捨ててしまう……。だけど、そのことを
後から知っただんなさんに怒られて、あわてて二人で女

の子を探しに行くのだけれど、とうとう見つけることができなかった……、とまあ、そんなお話よ」

「へえ」絵本のくせに結構奥が深いんだなあ、と感心して聞いていた浩司を横目に、

「だけど、どうして女の子は捨てられちゃったの？」

「もしも、ママがおかみさんでも、やっぱり捨てちゃう？」と、梨花が眉根を寄せて母親の顔を見上げた。

「そうねえ……。人間って心の中で綺麗なことばかりを考えているわけではないものね。人に覗かれたくないときだってあるだろうし……」絵莉子はふんふんと肯きながら「あつ、でもね、ママなら、たとえ梨花にそんな力があつたとしても、絶対捨てたりしないよ」と片目をつぶってみせる。

そんな他愛のない会話で、梨花の表情がふわっと明るくなり、小さな安堵の溜息さえつくのを、浩司は怪訝な面持ちで見守っていた。

☆

その夜、梨花が寝た後、夫婦でくつろいでいると、ふいに電話のベルが鳴った。近くにいた浩司が電話に出る

と、相手は昼間まで家に来ていた母親の澄子である。忘れ物でもしたのかと思って訊ねると、やがて言い出しにくそうに澄子が口を開いた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど。浩司、もしかして絵莉子さんが今、妊娠してるってことはない？」

「なに馬鹿なこと言ってるんだよ。我が家の事情は母さんだってよく知ってるだろ？ 第一そんなことがあつたら真つ先に連絡するさ」と、呆れた声を出すと、

「そうよね。だけど、ちょっと気になることがあつたものだから……」澄子は口籠った。

「どういふことさ？」

「あの子が……、梨花が言っていたんだけれど」

「梨花が……？ 何を？」

「ママのお腹には赤ちゃんがいるの。梨花はいつもお話ししたり、遊んであげてるんだよ」って……」

「……まさか！」

思わず大きな声を上げて振り向いた浩司の目に、テレビを観ながら、今まさに、甘夏みかんにかぶりつこうとしている絵莉子の姿が飛び込んできた。

入会に当たって

松田 昌康

この会を知ったのは、一年ほど前に会員の市川忠夫さんの奥様から家内が『悠遊』を頂いてきたことが始まりです。その時は会誌に一通り目を通して終わりましたが、中のフォト句が記憶に残りました。写真と俳句の組合せを見たのは初めてで、新鮮な感じがしました。

それから一年ほど経った現在、古希を目の前にして、足腰の衰えだけでなく頭のボケ防止にも備える必要がありますと感じ、以前から多少の興味があつた俳句をやつてみたいと思いました。取り敢えず、区の広報誌に載つていた句会に見学を申込みました。ここで『悠遊』に載つていたフォト句を思い出し、こちらも見学してみたいと思います、市川さんをお願いして、見学の段取りをつけて頂きました。

結局、先ず本会の月例会に見学者として参加させて頂き、フォト句、俳句及び川柳の各プロジェクトマネージ

ヤーをご紹介頂き、一月のペン句会とフォト句会を見学させて頂きました。開催曜日や時間帯の都合とともに、興味のある写真も含まれるフォト句をやりたいと思い、入会させて頂いた次第です。これから先、どんな展開が待っているのか、興味と多少の不安が入り混じった気持ちでいます。

ところで、足腰の維持のために、以前からやっているのが、テニスとゴルフです。テニスは天気がよければ週3〜4日（大体半日程度）で、ゴルフの方は月一回といったところです。これ以外の趣味としては、映画観賞や美術鑑賞です。本会では、今は休会中の「英語を読もう会」というのがあるようですが、興味はあります。

これまで、大学入学で上京して以来、東京を離れたのは、那須に単身赴任した時と、出張扱いでしたが台湾新幹線の仕事で台北に通っていた時ぐらいでした。六十六歳になる直前に退職して、サンデー毎日の日々を送っていました。一昨年の十月に元の職場からお呼びが掛かり、バンコク地下鉄建設のプロジェクト立ち上げのため、二か月間滞在して、最後のご奉公をしました。私に

とっても大変有意義で良い経験になりました。

ちなみに、会社に入った時の仕事は、レーザー光線を発生させる装置やそれを使った応用装置の開発設計でした。当時の最先端の技術の一つを扱う仕事で、楽しかったです。

一生の間にはいろんな変遷があることを実感している今日この頃です。



近況報告

中村 爽

現在の心身状態は昨年の「近況報告」時とそれほど変化はないと思いますが、一方では日常の行動範囲が少々狭くなって来たように感じています。

この正月に傘寿に達した家内が車の運転をきっぱりやめました。更に、わが町の「歩こう会」で偶然にも名前が私と全く同じで気が合った八十六歳の長老リーダーが引退を表明し、なんとなく寂しくなってきた所為かも知れませんが、後に続く者も多いと信じ、まだまだ引つ込むつもりにならないように空元氣をつけているところです。

ペンクラブの方とも随分長いご無沙汰で、会員資格剥奪とならぬようにと祈る次第です。

美術もペンも

塚田 實

私は、仕事柄海外出張や海外駐在が多く、機会を見つけては世界中の美術館を訪れ、著名な作品を鑑賞する幸運に恵まれました。しかし、自分で創作するとなると、からつきし駄目でした。小学生のころから褒められたことは、一度もありませんでした。会社を退職して時間ができたとき、何の迷いもなく美術に取り組もうと決心し、運よく世田谷美術館美術大学に合格し、昨年無事修了、今はステップアップ講座に通っています。

美術大学では、美術の講義から実務指導まで多くのことを学びましたが、何よりも私にとって素晴らしい財産となったのは、友達の輪が増えたことです。福本多佳子さんは同期生です。国際経験が豊富な福本さんとは、話が合い、話題が広がるなかで、企業OBペンクラブのご紹介を受け、入会させていただきました。

日立製作所では、国際関係の仕事をしておりました。

若い頃は何百回とアジアへ、その後は全世界への出張を繰り返しました。海外で暮らしたのは、社費留学も含めて、シカゴ、ニューヨーク、ロンドン、北京と合計十一年になりました。海外生活は、異文化との触れ合いを通じて、私の人生を豊かにしてくれました。国際経験だけでは駄目だと関西支社勤務も経験しました。大学時代遠い憧れだった祇園でお客様を接待する光栄にも浴しました。

会社では、経営の中枢にいたとき、リーマンショックを経験しました。また、プライベートでも、この頃がんの宣告を受け、五年後生存率十五パーセントと言われましたが、何回かの手術を経て、八年経過しました。もう大丈夫だと信じています。折角救われた命、大事にしたいと思っています。

大学では、法学部生でしたが、仲間と何回か掌編小説を書き、楽しんでいました。あれからほぼ半世紀経ちました。これからどういうことになるか、皆さんとともに精進してゆきたいと思います。宜しくお願いいたします。

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

二〇〇七年、平間真木子さんから引き継いだ「ペン俳句のこの一年・佳句鑑賞」も八回を数える。これからどうなるのかしらと不安を抱えながら、七名の方たちの句を引き、講評させていただいたことを思い出す。俳句好きのメンバーが私を支えてくださり、今年もこの原稿を書いている。面映ゆい気もするが、人数が減ることなく続いていることに驚きを隠せない。年を追ひ活発になっていると思うのは、多分に私の甘えであるが、メンバーの元気と情熱に触発されながら、昨年も楽しく一年を過ごすことができたことを感謝する。

新メンバーは、森田晃司さん、俳号を元斐とされ、俳句に熱心である。毎月の句会には新旧メンバーの個性豊かな力作が並び、選句に悪戦苦闘。相互選評の時間はもちろん、句会後の二次会も盛り上がる。

プロマネ安藤さんのご尽力で、昨年は二回の日帰り吟行を敢行した。六月、小石川後樂園、十月、鎌倉。美味しい昼食に酔い、句会をし、実りある吟行であった。

この一年のペン俳句の成果をまとめさせていただく。

木洩れ日や睡蓮の白あひ寄らず

池の面は風に親しよひつじ草

万緑に靴音の消ゆ哀しかり

光圀の裔の亀なり青嵐

青嵐溪の深きへ帰りけり

梅雨の蝶記憶に青き森ありぬ



秋夕日弓背負ふ子の帰り来る

安藤 晃二

秋澄みて大路に松の影の濃し

炊き出しの釜の赤錆長崎忌

輝ける楠の若葉やロダン立つ

初島の浮かぶ海原冬日和

晃二さんの五句は簡潔、的確に景を捉え、読み手に景を伝える。作者と読者が共にその場に立ち、日射しや風を感じ、それぞれが感情移入することができる。俳句は饒舌を嫌うと言われる所以である。季語を信頼して作句するコツを掴まれたのだと思う。さらなる健吟を祈る。

.....

子等を乗せ近づきて来る宝船

猪股 重子

行き先の決まらぬ切符春立つ日

夫在らば傘寿の膳や初鯉

昼寝覚夢の翼をたたみけり

一合の米砥ぎてをり終戦日

関連なご様子ではあるが、体調と相談しながら通い通し
てくださった。感謝。二句め、行く先の決まらぬのに買

った切符、近場の御出掛けであろう。ようやく来た春分
の高揚した気分を表して秀逸である。四句め、素敵な夢
をみて醒めてしまった余韻を楽しんでいる作者である。

.....

百の目の寄る白魚の命かな

上田 信隆

制服の膝に弁当初桜

富士の影動かぬ湖の暑さかな

赤とんぼ杭の打たるる埋立地

縁側に爪切る日和小鳥来る

「ゆく秋や波に振り向く風見鶏 信隆」の句が俳人協会の
今年のカレンダーに載った。日頃の精進の賜物。句友
として嬉しい。「縁側に」は句会で高得点を得た。「小鳥
来る」の季語がこの句の眼目。爪切るのはいつものこと
だが、季語が平和な一日を表現して、共感を得た。

.....

初冠雪山また山を遠望す

大泉 子泉

庭師来てみるみる冬の空開く

なほ読まむ万巻の書や春の雨

五月雨や小鴨寄り合ふ池の端

夏宵の歴史を閉ぢる聖火台

昨年転居をされて、句の材料にも度々なった。冠雪を望める新しい生活が気に入られているご様子である。「庭師来て」では、一転、写生句に挑む。庭師の作業によって、冬の空が開いたという視点がよいし、「みるみる」の措辞で庭師のてきぱきとした所作をも表現できている秀句。

春雪の三尺兄の便りかな

志村 良知

陽光やしらすパスタの塩加減

薫風の黄泉へと渡れ野辺送り

珈琲の豆変へて挽く梅雨の空

破れ蓮映して揺れず池の面

御父上、黙榮氏の俳句をHP上で鑑賞、解説されている。そこから学ぶことが良知さんの原点であろうと羨ましく思う。「珈琲の」の句が好きである。梅雨の鬱陶しさを、珈琲を飲んで紛らわそうとしている作者だが、豆を変えてみるという何気ない日常で表現するところが良知俳句。

パスポートに新たな十年春立ちぬ

首藤 しずを

郭公やほがらほがらに森明けぬ

春愁や紅茶に沈む角砂糖

遠き日のデモの雄叫び夾竹桃

泥葱の地べたに積まれ暮の市

句柄が多彩、軽快である。五感を総動員して句を作る姿勢に賛成。新しくしたパスポートに触れた感慨。郭公を朝の森で聞く愉しさ、夾竹桃の赤に遠い日のデモを思い起こす。春愁も大げさではなく、紅茶に溶ける砂糖の揺らぎ。一転、暮の市の景。肩肘はらぬ素敵な句が並んだ。

草萌えや日はたつぷりと岬道

中村 晃也

潮騒は風の伝言啄木忌

椎落葉殞の列の木遣り歌

バスを待つ梅雨寒の手にメロンパン

軒先は風の領域秋つばめ

五、七、五の中のどこかに独自の目線を生かしたいと心を砕いている作者。いつも楽しみである。挑戦の人という

印象。四句め、梅雨のじつとりした感じとメロンパンの表面の乾いた感じが良いと思う。焼き立てでなくてもよい。表面のちよつと硬い感触と梅雨寒が心地良い句。

.....

胸うちの弱音に効きて玉子酒

保坂 令華

雛飾る戻らぬ日々の恋しかり

竹の秋五百羅漢の泣き笑ひ

荒梅雨のひとりの鍵の重さかな

針穴の见えて通らず残暑かな

鎌倉吟行では下見、道案内などお世話いただいた。寺院への吟行がお好きと聞いている。「竹の秋」の句は竹の葉の降ってくる方を見上げている羅漢様と共に泣き笑いの作者がいる。「針穴の」では、手先の仕事に困って、夏の終わりの暑さが身に応えている作者がいる。

.....

厨房に貝の匂ひや春の雨

森田 元斐

黒土に父祖の温もり菊根分

風を待つ虚飾削ぎたる稲の花

長雨に倦みし頭上に月の舟

新酒古酒茅葺の舎奥出雲

端正な姿の良い句が並ぶ。季語を見つめて句を作られるのであろう、いつも季語が句の中心にある。これは当然なようでなかなか難しいこと。外の春雨の気配と貝の匂い、菊根分けに使うほつりとした黒土にその土地の歴史、稲の花にはご自分を重ねているのかもしれない。

.....

古日記四十冊あり年迎へ

玉山 和夫

梅古木集団疎開の宿の跡

花のもと九十五歳の深呼吸

夏草や敗戦の夢かけめぐる

野分吹く死よりも惚けを恐れをり

俳句は短いようであるが並べると自分史になる。御句を、この欄で年に一度目にとると、それがよくわかる。読み続けることの大切さを、いつも教えていただいている。率直な句柄で、「花のもと」の句では、若々しい気力が句に充溢。年齢を重ねる勇気を戴いている。

二〇一四年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

二〇一四年十二月に、第二百二十七回を迎えた長期伝統を誇る分科会です。

月に一回の勉強会は、二〇一二年七月から、稲田屋新宿西口店に場所を移して楽しく勉強しています。

現在は総勢十三名（大阪からの投句参加を含む）が毎月、企業OBらしい川柳を詠んで合評しあっています。

勉強会の後は愉快的な飲み会で、川柳そっちのけの大論壇。以下は、全メンバー十三名が、二〇一四年に詠んだ自薦の優秀（！）三句です。（作者・作品は順不同）

酔雅 すいが

- ① 鶴と亀増えて財源先細り（亀）
- ② 孫のあと這ってみつけた別世界（這う）
- ③ ああ卒寿貯めたへそくり場所忘れ（貯める）

不言 ふげん

- ① 気がつけば銭貯め終えて全て萎え（貯める）
- ② 師の影を踏んで蹴っても憂さ晴れず（影）
- ③ 老老の自宅介護で愛深め（介護）

酔深 すいしん

- ① 介護士の来る日は髭剃り念を入れ（介護）
- ② 主の影三步下がって踏んづける（影）
- ③ 猛妻も虫這い出でて半狂乱（這う）

井波 いなみ

- ① 厚労省鶴亀長寿はほろ苦い（亀）
- ② 雨霰溢れるマネーどこに舞う（雨）
- ③ 退職後主は変われど宮仕え（宮）

零門 れいもん

- ① かくれんぼここにいろよと影教え（影）
- ② 介護士に秋茄子ねだる老女居り（介護）
- ③ 多すぎる祈願の数に宮聞かず（宮）

損得そんとく

- ① 陰日向使い分けてる憎い奴
(影)
- ② 色模様家に帰れば雨模様
(雨)
- ③ 宮仕え終わった途端に尻の下
(宮)

火酒ウオツカ

- ① 二日酔い昨日千鳥で今日は這う
(這う)
- ② 骨こつひろい金齒ないかと目が光る
(光る)
- ③ 影法師昔ソップで今あんこ
(影)

安兵衛やすべえ

- ① ともかくもお宮参りで年は明け
(宮)
- ② バラバラにバラし流してグッドバイ
(ばらす)
- ③ 桐壺の愛の証や玉の御子
(証)

鬼瓦おにがわ

- ① 遣り水を貯めて律儀に鹿威し
(貯める)
- ② 身の丈で生きた証の五十坪
(証)
- ③ ばらされて廻り舞台をシャリ抱え
(ばらす)

だし

- ① 待ちぼうけ月影寒くそば屋台
(影)
- ② 老後にと貯めた積りが底が抜け
(貯める)
- ③ 老い先の介護頼みの縁結び
(介護)

明迷めいめい

- ① 雨降りに水まくなお節介
(雨)
- ② 元カノがキレてバラしたアデランス
(ばらす)
- ③ 存在の証に見えた割烹着
(証)

見二てんにつぐ

- ① 親は貯め子供がひねる相続税
(貯める)
- ② 老猫を明日は我が身と介護する
(介護)
- ③ イソップの亀の知恵欲し原子力
(亀)

西貢さいこん

- ① 天怒る恵みの雨が汚染水
(雨)
- ② 信ずれば証は要らぬオレオレは
(証)

「800字文学館賞」

昨年に続き、第六回「800字文学館賞」の作品を募集したところ、二五三編の作品が寄せられました。

審査の結果、次の通り最優秀賞一編、優秀賞二編、特別賞一編および佳作二編が選ばれました。

最優秀賞 「書生緋」

せきねくおんさん

優秀賞 「ある寒い朝」

村上 理江さん

優秀賞 「いただきます」

三好 郁子さん

特別賞 「介護歌暦」

西谷 克巳さん

佳作 「わたしと東京と福島」

遠藤 里沙さん

佳作 「改名」

森園 順子さん

紙面の都合で最優秀賞の作品のみ紹介します。なお、最優秀賞から特別賞までの四作品は、当クラブのHPでご覧いただけます。

せきねさん、西谷さんは一月二十二日のクラブの新年会に参加され、会員と談笑されました。

(プロマネ 首藤、内藤、野瀬)

書生緋

せきね くおん

歳の暮れに埼玉の川越喜多院へお参りがてら、年の瀬に開かれる喜多院境内の骨董布市に寄ってみる。シートや薄縁を敷いた上に、うず高く積まれた古布の中から目に留まったのが、藍が疲れ切った表情をしている古い書生緋の着物だった。昨今の古布ブームで古着も結構なお値段だ。手繰り寄せて見ると思っていたより全体の傷みがひどい。行きつ戻りつしながらも藍の古緋に心惹かれる。

「百年以上前の着物ですよ。藍がまだ生きています」

お婆さんの柔和な目に惹かれ思い切って衝動買いをしてみましょう。一抱えほどの古着を持って境内を一巡し、くだんの古着屋を改めて覗いて見るが、早仕舞いしたのかお婆さんの姿も店も見あたらない。あの柔和な目に何やら不思議な懐かしさを感じたのだが……。

黒の太い木綿糸でしっかりと縫いあげる丈夫な書生緋

は、裏表のない硬い木綿の織物で幾度も縫い返しや洗い張りができる。表地が焼けると裏表にして縫い返す。書生絆は昔、出世前の若い男子の普段着だった。

この古い書生絆も大切に着たのであろう、継ぎあてや接ぎも多く、昔の女の手仕事がそこかしこに見え隠れする。丁寧に解いてゆかないと、痛んだ布はぼろ布となつて溶けてしまいそうなので、ゆっくりと丹念に根気よく解いてゆく。その過程で縫い手の工夫や丹精さがうかがえ感動さえする。解き終えるとぬるま湯を入れた桶にひたす。しばらく浸けて置くとまっ黒な污水が浸みだし、百年分の垢や汚れが布の歳月を物語っているように感じる。幾度も丁寧にすぎ竿に干す頃には、陽の光が透けて見えるほどの柔らかな絆になり、垢や汚れを落として軽くなった明治の着物が、のんびりと風に吹かれゆらゆらと揺れている。

誰がどなたに着せるのに縫ったのだろうか、あのお婆さんが新妻の頃、若い夫に縫って着せたのだろうか……。百年の歳月を経て優しく風に揺れている書生絆を眺め、この紺絆を初めて着た若い男に思いを馳せている。



ペン・フォト句会

ペン・フォト句会は「何でも書こう会」「サロン21」と並ぶ当ペンクラブの独自の勉強会のひとつで、昨年末で四十六回を数えるに至った。

写真と句を併記するだけで、作品の巧拙が瞬間的にわかること、撮影した写真の転送が簡単にできるスマホが出現したことで、より手軽に楽しめる文芸となった。

現在、作家の森村誠一の主宰する「写真俳句」と俳人の伊丹三樹彦の「写俳」がブログ上で展開しているのに対し、当ペンクラブのフォト句会のみが、月例の勉強会を開催している状況である。

いわゆる写真愛好家でも文才のある人は写真を撮るだけでは飽き足らず、五・七・五のような韻文をつけて作品の陰影を深める新しい文芸を志向する人は多い。

勉強会の常連は約十名。平素からカメラやスマホを持ち歩き、周囲に目を配って機会を逃さずに珍しいショットや美しい情景をモノにする習慣がついた。

その結果、徐々に写真の腕前も、句の付け方も上達し、お互いの作品を楽しく批評し合う段階に到達した。

句の付け方は単なる画像の説明ではなく、画像に、より滑稽味を加えた川柳タイプでゆくのか、詩情を盛り込んだ俳句タイプを伸ばすのかは、作者の個性にもよるが、プロマネとしては将来的に後者の路線を進めるのが良いのではないかと考えている。

また課外活動として始めた「世界のグルメレストラン巡り」は新宿・渋谷地区を中心にはじめたが、なかなか好評で、食事会だけに参加するメンバーも増えつつあり、食に関する一言を書きかつ食らうグルメ勉強会（仮称）ができる下地ができあがったと思うようになった。

要は、メンバーが楽しく生きがいを持って活動に参加でき、少しでも呆け防止に役立つのであれば、当クラブの趣旨に合うのではないかと思うからである

（プロマネ 中村晃也）

ホームページ関連

平成二十六年のホームページの集計結果を分析します。
・年間アクセス数は5万9千を超え、6万アクセスに近づいています。何と言っても、会員の投稿数の増加がヒット数も飛躍的に伸びた一因です。

・特に「8000字文学館」の3割7分増、「エッセイ」の1割5分増が貢献しています。中でも最近アクセスが急速に増えてきた「サロン21」は、活発な会員間の討議でかなり注目され始めました。今後は討議内容をいかに読者にアピールするかにあると思います。

・「8000字文学館賞」は、今年も応募が多く、だいぶ世の中に浸透してきているようです。一般公募の形で、雑誌などへの宣伝とホームページの案内で、相互に効果が表れていると思います。

・「写真館」は徐々にアクセスが増えてきていますが、まだ一部の人たちの協力で成り立っているのが現状です。更なる投稿が必要です。ふるって画像を送ってください。

昨年はインターネットの世界で、セキュリティに大変敏感な年でした。大企業に対する不正アクセスは、企業にとつて命とりになりかねません。私達のサイトについても用心にこしたことはありません。従つて会員間のやり取りについても、怪しいファイルのやりとりは気をつけなければと思います。またOSなどのバージョンアップについての取り扱いにも、専門家と相談するなど対応に万全を期す必要があります。

自分だけで困らずに、相談できる機能を新年度あたりから組織できれば、これからきつと会員のためになると思います。

最後に、ホームページは一人ひとりのホームページにたいする訴えがそのまま反映されるものと思います。情熱をもつて、更なる情報提供をお願い申し上げます。また投稿についての疑問点、不審点などありましたら、ご遠慮なくIT委員会にお問い合わせいただきたいと思います。

本年もよろしくお願い申し上げます。

(プロマネ 上田信隆)

企業OBペンクラブ本年の歩み

平成二十六年（二〇一四年）

一、役員人事

前年十二月に役員の改選が行われ、左記の新役員が、以後二年間会の運営を務めることとなった

会長	西川 武彦（留任）
副会長	大平 忠（財務担当・理事再任）
理事	大越 浩平（運営委員長・理事留任）
理事	志村 良知（事務局長・理事留任）
理事	清水 勝（会計担当・留任）
理事	安藤 晃二（広報、渉外担当・新任）
理事	森田 晃司（副運営委員長・新任）
監事	山縣 正靖（留任）

二、年度方針

- ①当クラブに相応しい多彩な人材の入会を求め、最低七十名の会員を確保
- ②ウェブサイトの充実・活用により外部発信を更に拡充する（含『悠遊』）

三、各月の活動報告

一月例会（二十三日）

- ・新会員 林 孝
- ・新春ゲスト講演Ⅱ 二村 伸氏（NHK解説主幹）
- 『海外ニュースの裏事情』
- ・椅子にかけての太極拳 松谷 隆
- ・新年会（二十三日）
- 会員四十五名、ゲスト十名参加
- フォト句大会（付け句）
- あらかじめ提示されたお題写真に参加者が事前に投句、当日優秀作品を発表
- 「800字文学館賞」入賞者表彰
- ・「何でも書こう会」熱海合宿（二十九、三十日）
- 第六回となる熱海合宿に勉強会有志十六名が一泊の勉強・懇親に参加した。

③電子書籍の出版に挑戦する

④「800字文学館賞」は広報の要となる行事として継続実施する

二月例会（二十五日）

- ・ 会員講演Ⅱ 下山健夫

『バナナから見える世界』

- ・ 会員講演Ⅱ 首藤静夫

『ハプスブルク物語』

- ・ 二〇一四年版会員名簿確定配付

会員数七十二名。平均年齢七十四歳。

最年長九十五歳、最年少五十六歳。

三月例会（二十日）

- ・ 会員講演Ⅱ 横内則之

『核融合エネルギーの話』

四月例会（十八日）

- ・ 新会員 八木信男（大阪支部）、川村邦生

- ・ ゲスト講演Ⅱ 稲垣 孟氏（元『飛鳥』船長）

『世界の客船とクルーズの楽しみ方』

- ・ 『悠遊』二十一号配付

五月例会

- ・ 新会員 川口ひろ子

・ 『悠遊』二十一号合評会

六月例会

- ・ ゲスト講演Ⅱ 斉藤征雄氏（能楽愛好者の会幹事）

『能について』

七月例会

- ・ PC勉強会Ⅱ 常定伸吉氏（リブラス社）

『PCとスマホ PCの危機管理』

- ・ 会員講演Ⅱ はやしたかし

『やがて日本が世界のリーダーになる』

・ 第六回「800字文学館賞」公募開始

訃報

企業OBベンクラブ名誉会長・作家

深田祐介先生ご逝去（十四日）

生前の当クラブへのご厚情に感謝し、

心からの追悼を申し上げます。

八月例会（夏休み）

- ・ペン俳句会Ⅱ原爆忌の六日、銀座で納涼句会

- ・『悠遊』の創刊号Ⅱ二十一号のデジタル化

（CD化）が完成

九月例会（十八日）

- ・ゲスト講演Ⅱ山田篤美氏

『執筆の苦勞話（真珠の世界史）』

十月例会（十六日）

- ・新会員 齊藤征雄

- ・会員講演Ⅱ馬場真寿美、内藤真理子

『源氏物語』

- ・ペン俳句会Ⅱ秋晴れの鎌倉に吟行（二十九日）

十一月例会（二十日）

- ・ゲスト講演Ⅱ張 富士夫氏

（トヨタ自動車（株）名誉会長）

『トヨタのもののづくりの歴史と今後の戦略について』

- ・設立二十五周年を迎える（二十二日）

旗揚げ時の名称は「企業OB作家連盟」

会員数十七名

十二月例会（十八日）

- ・退会会員 黒澤弘子、西田昭良、中村将陸、

兄玉忠雄、林 孝、小寺裕子（休会）

- ・ゲスト講演Ⅱ中澤公子氏（メゾソプラノ歌手）

『オペラについて』 ミニ・コンサート

- ・第六回「800字文学館賞」入選作品決定

ホームページ公開サイトに掲載

- ・最優秀作品Ⅱせきね くおんさん

『書生辨』

- ・優秀作品Ⅱ村上理江さん

『ある寒い朝』

- ・優秀作品Ⅱ三好郁子さん

『いただきます』

・特別賞Ⅱ西谷克巳さん

『介護歌暦』

四、会員の社会貢献

・浜口須美子

岐阜市の「みんなの森 岐阜メディアコスモス」

内の並木道『せせらぎの並木 テニテオ』が

九百二十点の応募から選ばれ、名付け親に

・上原利夫

山梨県韮崎市より観光振興貢献で表彰される。

楽曲『山恋しくて 鳳凰三山』の紹介提供

二〇一四年は前年に改選された新役員の第一年目で、

会員数七十二名でスタートした。二〇一四年末までに六名が退会したが、二〇一五年一、二月にお迎えした三名を含め新たに七名が加わったので、会員数は二〇一五年二月十日現在で七十三名である。

出版企画は、電子出版も含めて幾つかが提案され、熱心に論議された。残念ながら二〇一四年中に出版にまで

至った企画はなかったが、現在進行中の企画がまもなく電子出版される。

公募企画である「800文字学館賞」は第六回となり、今年は二五三編の応募を頂いた。応募者層は文字通りの老若男女さまざまで、同じく八〇〇字で表現する「何でも書こう会」の参加者には絶好の刺激になっている。

分科会活動

「サロン21」は輪番のプレゼンターの問題提起に毎回二十人余りの参加者が応えるという、最大の分科会活動になっている。昨年からは、サロン21での論議をホームページ公開サイトへ掲載しているが、アクセス数は着実に増え、月間一〇〇件を越えている。

「何でも書こう会」は、月二回の会合に毎回十五名以上が作品を携えて参加する盛会が続いている。ホームページへのアクセス数も月間一、二〇〇件以上であるが、投稿が活発過ぎてあつというまに巻頭から下がつてしまう、と云う贅沢な悩みもある。

「ペンフォト句会」は、お題写真に句を付ける付け句と、

写真と句がセットの自由題の二本立ての句会で、常連も増え腕も上がっている。会合終了放課後の恒例行事、世界の料理名店食べ歩き企画も人気で、放課後目当ての常連もいるようである。

「掌編小説研究会」は、新会員を加えて、十一月には第四十七回を数えた。創作に使う労力は分科会中一番であるが、最年長会員が活発な発表を行っている。

「ペン俳句」は、十二月で二四五回目の句会を迎えた。女性比率が高いのが特徴であるが、ここ数年戦後派の参加も増えて、常時十名程の参加となっている。

「ペン川柳」は、十二月で二二七回の長寿分科会活動。合評が始まると「呑み」が入る。開催場所を銀座から新宿に移して二年あまり、人と作風が土地柄に合ってきたのか、あらゆる面でますます快調である。

企業OBペンクラブの活動の大黒柱であるホームページは、毎月更新のトップページの工夫を凝らし、コンテンツも、アクセスしていただき読んでいただくために一層の努力をしている。その成果は、二〇一四年は前年比三、

二一八件増の五九、八九四件というアクセス数になった。二〇一五年は、総数七〇、〇〇〇件、月平均六、〇〇〇件を越えるアクセス数を目指したい。そのためには、新会員のリクルートに努め、日常の分科会活動を活性化し、魅力あるコンテンツを創造し掲載することに日々精進したい。

文責＝事務局長・志村良知



2015 年 新年会

企業OBペンクラブとは(会員以外の読者のために)

企業OBペンクラブは、平成元年に「世の中にも申したい」民間企業のサラリーマンOBが中心になって設立されました。その多くは、海外勤務を経験した人たちでした。その後、クラブの発展とともに、海外経験は出張や旅行だけというOBやOG、さらには官庁や政府機関のOBなど、また「世の中にも申したい」人だけでなく、自分の人生や職業経験から何かを書きたくなった人、俳句や川柳をひねりたい人、世界の動きなどを同年輩の仲間と一緒に議論したい人など、独身女性や主婦を含む多士済々の人々が参加して活動しています。

●どんなことをしているか、その一端を以下にご紹介。

- ① 同人誌『悠遊』の発行 一九九四年に第一号を刊行。それ以降、全員参加を原則に年一回発行を続けています。
- ② 月例会と講演会 会員または外部講師による講演会を催し、会員の知識欲を満たし、相互理解を深めています。
- ③ 何でも書こう会 会員の書く一編八〇〇字の短編に

対し、出席者が自由に感想や意見を出し合う、肩の凝らない楽しい会合で文章力の向上を目指しています。

- ④ 掌編小説勉強会 二〇〇七年一月に原稿用紙十、三十枚程度の掌編小説を書くことを目標として発足しました。隔月にメンバーの作品の合評会を開催しています。
- ⑤ ペン俳句会 日本人のDNAに組み込まれている句心を解き放ちます。年に数回の吟行も行っています。
- ⑥ 英語を読もう会 現在は休会中
- ⑦ サロン21 現代への理解は物書きには必須との認識から、特に国際政治・経済問題を中心に、歴史的・地政学的観点からの分析を自由討論形式で行っています。
- ⑧ ペン川柳会 川柳は小説の筋書き作りには最適です。二〇〇六年、二〇〇九年の卒サラ川柳シリーズの出版に続いて、二〇一三年にはエッセイや小説も合わせた『卒サラびとの文芸館』（青蛙房）を出版しました。
- ⑨ フォト句会 二〇一〇年に登場。写真と句との自由なコラボレーションを楽しみながら新鮮な発想を磨いていきます。飛躍的な発展が期待される遊びです。

氏 名		出 身 会 社
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
内藤真理子	ないとう まりこ	
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
中村 爽	なかむら そう	日本工営
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米国海軍基地
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
新田由紀子	にした ゆきこ	シュプリンガー・ジャパン
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
橋本 政彦	はしもと まさひこ	日商岩井
羽田 壽夫	はねだ ひさお	三菱重工業
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学
原田 信	はらだ まこと	NHK
平尾 富男	ひらお とみお	キヤノン
廣澤 重穂	ひろさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空、Creative Tours
藤原 道夫	ふじわら みちお	日本赤十字社（現職）
古川 幸雄	ふるかわ さちお	安宅産業、石川島播磨重工業
保坂 令子	ほさか れいこ	
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メディコ
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠
松浦 俊博	まつうら としひろ	東芝
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
松田 昌康	まつだ まさやす	東芝
水原亜矢子	みずはら あやこ	東急電鉄
三 春	みはる	住友商事
森田 晃司	もりた こうじ	三菱商事
八木 信男	やぎ のぶお	浪速学院高校（現職）
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行
横内 則之	よこうち のりゆき	トヨタ自動車、トヨタ紡織
吉寄 清己	よしぎき きよみ	関西ペイント

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名		出 身 会 社
阿部 典文	あべ みちふみ	石川島播磨重工業
新井 良侑	あらい よしゆき	ダイセル化学工業
安藤 晃二	あんどう てるつぐ	三菱商事
池田 隆	いけだ たかし	東芝
市川 忠夫	いちかわ ただお	東芝
稲宮 健一	いなみや けんいち	三菱電機
猪股 重子	いのまた しげこ	
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン
上田 信隆	うえだ のぶたか	東芝情報システム
上原 利夫	うえはら としお	住友商事
鵜飼 直哉	うかい なおや	富士通
大泉 潤	おおいずみ じゅん	三菱化学
大越 浩平	おおこし こうへい	NEC インフロンティア (旧 日通工)
大月 和彦	おおつき かずひこ	労働省
大西 宏	おおにし こう	松下電器
大平 忠	おおひら ただし	三菱化学
大野 昶	おおの ただし	三井物産
門屋 信行	かどや のぶゆき	監査法人 / 中央会計事務所
川口ひろ子	かわぐち ひろこ	アトリエ・リヴィエール
川村 邦生	かわむら くにお	第一勧業銀行
木村 敏美	きむら としみ	郵政省簡易保険局
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事、三菱総研
倉藤 金助	くらふじ きんすけ	桜井会計事務所
斉藤 征雄	さいとう まさお	三菱化学
清水 勝	しみず まさる	明治安田生命 (安田生命)
志村 良知	しむら りょうち	リコー
下山 健夫	しもやま たけお	サントリー、B-R31 アイスクリーム
首藤 静夫	しゅとう しずお	三菱化学
杉浦 右蔵	すぎうら ゆうぞう	NTT、三菱電線工業
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅、松竹
田原 敬	たはら けい	和田製本工業
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省、日英協会
塚田 實	つかだ みのる	日立製作所
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ (藤田組)
富田 佳瑞	とみた よしみつ	三菱商事

編集後記

▽浜田委員以外の三人は、『悠遊』第二十二号からの新米編集委員。従来の伝統の上に立って、どこまで新機軸が打ち出せるかが編集方針となった。編集の過程で、会員各位との遣り取りを通し、改めて皆さんの『悠遊』に掛ける愛着と意気込みが感じられたのが最大の収穫である。（平尾）

▽新編集委員の一人にと誘われた時は「八〇〇字エッセーが苦手な私が？」と意外だった。けれど、文章の勉強、会員の方々を知る良い機会と考え参加を決心。右往左往の毎日ながら、原稿を読み進むにつれ、会員各位の個性とお人柄を感じ取ることができ、楽しい作業となった。（福本）

▽原稿の集まりが、遅かった前号に比べてもお遅い、と浜田さんに締められたときは蒼くなつた。しかし、このクラブのいいところで、前任の方々も惜しみない応援・助力をしてくださり、浜田さんのご指導で何とか完成。次号からはもっと上手にやるぞ！（首藤）

▽『悠遊』の編集に関わるようになって七年、ようやく世代交代の時期がきた。安藤、三春の両氏が退任し、三人の若い人たち（わがクラブでは！）が参加してくれた。この二十二号はその新しい人たちの作品である。いいものがあったと自負している。（浜田）

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第二十二号

二〇一五年四月十六日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

西川 武彦

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一―一（〒一〇〇〇〇〇三）

TEL 〇三―三三二二―〇四七九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

志村 良知

横浜市港北区大倉山五―三―一八〇四（〒二二二一〇〇三七）

Eメール：rychshimura@f01.iscom.net

クラブURL：http://www.obpen.com

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店（409）

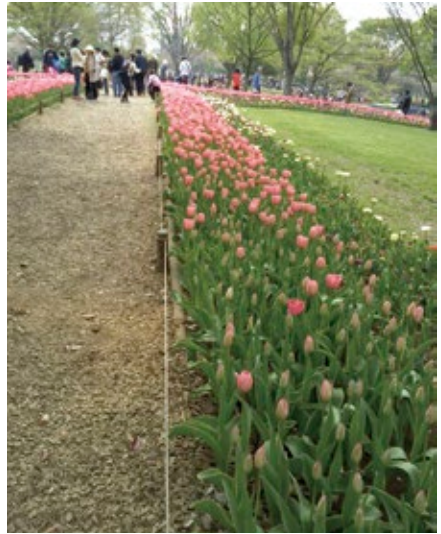
企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝

（普通）1086096

ペン・フォト句（後編）



百までの 満身創痍 カテーテル
矢澤 正二



正直に 陽の当たる場所 教えます
安藤 晃二



冬近し フィギュア舞うよな 水の精
池田 隆



脚長く 顔だけ俺に 似てる孫
下村 健夫



爺さんの 皺を刻んだ 畑づくり
清水 勝



福本 多佳子



山縣 正靖



富田 佳端